

27 水澤寺（みずさわでら）

表27-1

寺院名	五德山無量院水澤寺	所在地	渋川市伊香保町水沢214
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 水澤寺
主本尊	十一面千手千眼觀世音菩薩	仏事	初詣、花祭り(4/8)、除夜の鐘(12/31)
創立・沿革	推古天皇の勅願により高麗渡来の高僧慧灌僧正が開基、国司高光中将が創建する。本尊は十一面千手觀世音菩薩である。開山当初は御堂の數三十余宇御仏の數一千二百体にも及んだが再三の火災により焼失。大永年間(1511~1528)現在地に仮堂を建立。宝曆5年(1755)から天明7年(1787)に至る33カ年の大改修により現在の様になった(寺資料)。		
文化財指定			
水沢寺六角二重塔(県重文 昭和48年12月)、水沢寺仁王門、水沢寺観音堂(市重文 昭和60年5月)、水沢寺阿弥陀如来坐像、大ガメ及び彌(市重文 昭和52年6月)、水沢寺木造十一面觀音立像(市重文 平成28年3月)、水沢の鶴音杉(市天保 昭和59年9月)			

位置・配置(图27-1、写27-1)

県道15号線通称水沢街道を伊香保方面に進み、水沢うどんの店が連なる街並みの正面に本寺はある。水沢山の東麓で伊香保温泉から車で5分と近く、多くの観光客が訪れている。参道の石段の上に建つ仁王門を通り、さらに石段を登ると本堂となる観音堂、六角二重塔などが並ぶ境内となる。境内には樹

創建700年樹高38mの観音杉、龍王弁財天池、十二支守本尊、鐘楼、納札堂等が山裾に沿って並び、水沢の名の通り湧き水が出ていて、観音堂南側から石段を80段数登ると飯綱大権現がある。境内を北に進むと大駐車場前に平成の大修復により各建物から移された仏像等を保管展示する积迦堂がある。現在地の南東700mにある水沢庵寺跡が前身の寺院跡であると言われている。



圖27-1 配置圖



写27-1 境内金额

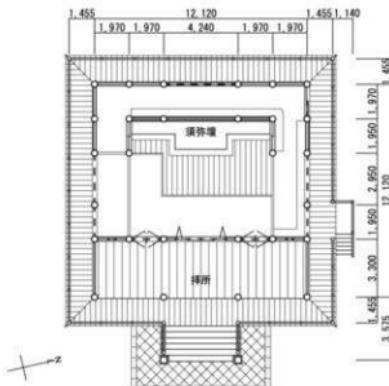


図27-2 平面図(聴音堂)

仏堂を建立し、宝暦5年(1755)から天明7年(1787)に至る33カ年の大改修により現在の様になった。天台宗、渋川市内の真光寺末寺である。「水沢観音」の名で親しまれ、坂東三十三観音霊場の第十六番札所として多くの人々の信仰を集めている。

かみのんどう 観音堂（図27-2、表27-2、写27-2～27-7）

本堂となる観音堂は、方形造の瓦型銅板屋根の正面に軒唐破風の向拝が付き、平面は、五間堂が間口5間奥行4間の室内と3間1間の吹放しの拝所となり、その外に四方縁を廻らし、大提灯が掛けた1間の向拝が付く形式となっている。建造は古文書より

天明7年(1787)である。内部は須弥壇に宮殿を置きその前は一室となり、脇・後陣は現在回廊になっていて、向拝柱は地紋彫を施し、虹梁上に二頭の虎と林和靖の浮彫り彫刻。柱・水引虹梁・海老虹梁に龍二匹の丸彫り彫刻が巻付き、左右の虎と龍は互いに睨み合っている。手挾は雉と稻、雲の籠彫である。拝所部の天井には龍・迦陵頻伽の三枚の天井絵があり、記録では絵師名と思われる墨書きが残っている。欄間に虎渢三笑、馬師皇（古文書に記録あり）、琴高の厚肉透かし彫、流水に花の厚板彫が嵌め込まれている。組物は二手先、彫刻軒板支輪、水仙・蒲公英な

表27-2 観音堂

建造年代／根据	天明7年(1787)／古文書	構造・形式	正面5間(12.12m)、側面5間(12.12m)、方形造、向拝1間軒唐破風付、瓦型銅板葺(当初草葺)
工 匠	不明	基 础	切石
軸 部	[身舎]丸柱・長押・台輪 [向拝]角柱・水引虹梁・海老虹梁・菖蒲桁・手挾	組 物	[向拝]連三斗 [軒廻]二手先[内部]出組
中 備	[向拝]彫刻嵌込 [軒廻]本蔓股	軒	二軒繁垂木・板支輪(彫刻、彩色)
妻 飾	[向拝]二重虹梁・兎毛通	柱 間 裝 置	棟唐戸・丸窓・蔀戸・板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁・擬宝珠高欄	床	[内陣]拭板張 [外陣]絨毯(覺)
天 井	[内部]格子天井 [向拝]鏡板天井(絵)	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(唐様)、宮殿
塗 装	黒・朱塗・極彩色(彫刻、支輪・欄間)	飾 金 物 等	木口金具・擬宝珠
繪 画	向拝部天井画(龍・迦陵頻伽)	材 質	不明
彫 刻	向拝柱(地紋彫、几帳面)、虹梁(絵様、錫杖彫)、向拝木鼻(龍丸彫)、虹梁上(竹・虎、林和靖)、手挾(雉・稻、雲、籠彫)、欄間(虎渢三笑、馬師皇、琴高、水流・花)、身合木鼻(獅子)、隅木上(象)、支輪(波・花)、蔓股(水仙・蒲公英、牡丹・菊・松・竹)		



写27-2 正面



写27-3 侧面



写27-4 外部軒廻



写27-5 向拝



写27-6 欄間・支輪・天井絵



写27-7 内部

どの植物の本茎股、木鼻は獅子である。彫刻は極彩色がされている。縁の擬宝珠の一部には「万延元庚申年(1860)八月高崎連尺町鑄物師金次郎」の刻みがあるが後補のものと考える。内部は出組、格天井の絵は護摩の煤により内容は確認できない。唐様の須弥壇前に觀音像があり、文化財指定された古いものは釈迦堂に納められている。建物前の石燈籠には元禄五壬申年(1692)の刻みも読める。昭和35年(1960)草葺き屋根を銅板葺きに改修し、平成8年(1996)瓦型銅板葺き屋根に再改修している。平成9年(1997)には欄間絵図の復元彩色を行っている。

六角二重塔(図27-3、表27-3、写27-8~27-10)

六角二重塔は、下層部は六面に向て、地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間界、天人界の六地藏尊(青銅製)を棚の上に安置し、芯を軸に回転する。左に三回廻してお参りすることでより良い世界に生まれ変わる御利益があると言われ、別名開運六角地蔵尊とも呼ばれている。上層部には大日如来が祀られている。柱は円柱で礎盤の上にあり、下層部は二軒扇垂木、彩色軒支輪、出組、獅子の木鼻である。上層部は二軒扇垂木、彩色軒支輪、三手先、獅子の木鼻で、一段目の軒板支輪には十二支の彫刻が

見える。柱間は格子戸と火灯窓、六面に擬宝珠高欄の縁が廻り、屋根には相輪が付いている。「県文化財台帳」によれば、相輪の心柱の墨書に「干時文化一四歳(1817)丁丑六月吉辰」、地蔵尊像には宝永5年(1708)、正徳2年(1712)、正徳5年(1715)と記載されているが、六角二重塔の建造は古文書より天明7年(1787)とし、仏像は移設、心柱の墨書は修繕による後補のものと推察する。昭和55年(1980)に屋根葺替、平成10年(1998)彩色を行っている。

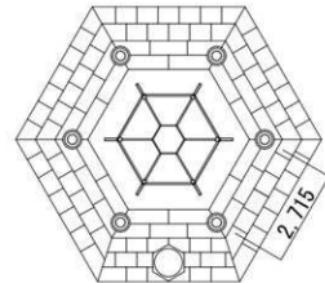


図27-3 平面図(六角二重塔)

表27-3 六角二重塔

建造年代／根拠	天明7年(1787)／古文書	構造・形式	一辺(2.72m)、六角二重塔、下層回転式、銅板瓦棒葺(当初柿葺)
工 匠	不明	基 础	基礎 2段、自然石、柱下礎盤
輪 部	丸柱	組 物	[下層]出組 [上層]三手先
中 備	なし	軒	[下・上層]二軒扇垂木
妻 飾	なし	柱間裝置	[下・上層]なし [上層]格子戸、火灯窓、板壁
縁・高欄・脇障子	[下層]なし [上層]擬宝珠高欄	床	[下層]石敷 [上層]不明
天 井	不明	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	黒・朱塗、極彩色(木鼻・支輪)	飾 金 物 等	隅木木口
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	虹梁(絵様)、木鼻(獅子)、隅木上(蟹)、軒支輪(波・龍、波・鯉、波・花、十二支)		



写27-8 正面



写27-9 下層軒廻



写27-10 上層部

仁王門（表27-4、図27-4、写27-11～27-13）

仁王門は三間一戸の楼門で、建造は古文書より天明7年(1787)である。昭和44年(1969)に茅葺から銅板葺に葺替えた入母屋造、屋根の前後中央部に軒唐破風を付けている。軸部は切石に丸柱を立て貫と台輪を廻し、下層中央間は唐破風(火打)型虹梁、中

備は裏束、蛇腹支輪と彫刻板支輪の二手先の持ち送りは特異である。上層は三手先の斗組を中央部は二列並べ、本幕股、彫刻板支輪で二軒繁垂木である。木鼻は獅子、隅木上に蟹、唐破風棟木受部に歯をむき出した獅子面(力神)の彫刻が見られる。木鼻と軒支輪は極彩色されている。石段の上に建ち全体が

表27-4 仁王門

建造年代／根拠	天明7年(1787)／古文書	構造・形式	3間1戸楼門(8.00m)、側面2間(4.58m)、入母屋造、平入、軒唐破風付、銅板葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基礎	切石、基壇付
軸 部	丸柱、台輪、貫〔下層中央間〕唐破風(火打) 型虹梁	組物	〔下層〕舟肘木、二手先〔上層〕三手先中央2列〔内部〕出組
中 備	〔下層〕裏束〔上層〕本幕股	軒	〔下層〕蛇腹支輪、板支輪(彫刻、彩色)〔上層〕二軒繁垂木、板支輪(彫刻、彩色)
妻 飾	虹梁大瓶柱、懸魚(蕉)、鰐、六葉	柱間裝置	〔下層〕金剛墻、板壁〔上層〕棟唐戸、火灯窓、板壁
縁・高欄・船障子	〔上層〕四方切目縁、逆蓮頭高欄	床	〔下層〕石敷〔上層〕拭板張
天 井	〔下層〕鏡板(輪)、格天井〔上層〕折上格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	黒・朱塗、極彩色(木鼻・支輪)	飾金物等	なし
絵 画	天井絵(龍)、絵師:狩野探雲	材質	不明
彫 刻	木鼻(獅子)、幕股(花)、軒支輪(波・花)、唐破風棟木受部(力神)、隅木上(蟹)		



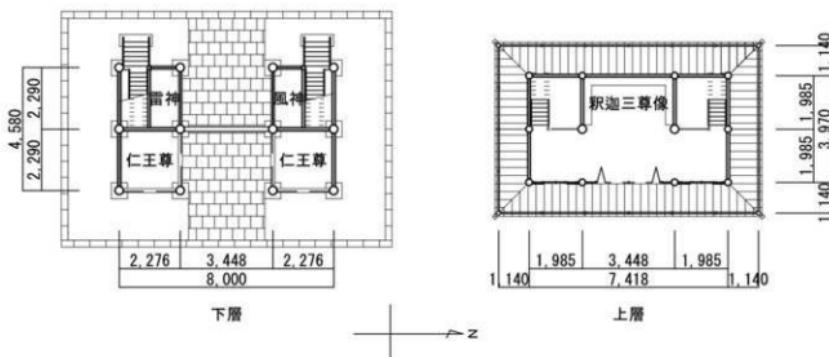
写27-11 正面



写27-12 下層軒廻



写27-13 上層組物



写27-4 平面図(仁王門)

均整のとれた美しい門である。下層天井には狩野探雲筆の龍の絵が2枚あり、平成6年(1994)に再彩色されている。急な階段を上層に上ると釈迦三尊像が安置されている。平成6・7年(1994・5)に仁王尊像、釈迦三尊像、風神雷神像を保存修理し、平成13年(2001)に完成した釈迦堂に移設保存されている。

まとめ

県立文書館に保存されている古文書「建立書水澤寺」には、観音堂、地蔵堂、仁王門等の構造規模・彫刻・地形・屋根・備品・石垣等の金額と施主名が詳細にまとめられ、総金額1607両2朱、銭20貫400文とあり、末尾に「天明七丁未年八月水澤寺貢隆」と記されている。また、宝暦5年(1755)から天明7年(1787)の整備を記した書状もあり、これらの古文

書から一連の諸建物が完成し整ったのが天明7年(1787)であり、3棟の建造年代とする。観音堂は彫刻に中国故事等を多用し豪華な社殿であり、六角二重塔は輪藏的で珍しい貴重なものであり、仁王門は彫刻と彩色を施した華麗な門である。江戸後期の建物が3棟まとまり現存することは県内でも貴重な遺構である。

(林 美幸)

【参考文献】

- 『群馬県近世寺社建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会 昭和54年
- 『伊香保誌』伊香保町教育委員会 昭和45年
- 『群馬県重要文化財台帳』群馬県教育委員会 昭和48年
- 『建立書 水澤寺』天明7年(古文書、群馬県立文書館所蔵)
- 『書状』天明7年(古文書、群馬県立文書館所蔵)

28 雙林寺〔そうりんじ〕

表28-1

寺院名	最高山雙林寺	所在地	渋川市中郷庚2399
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 双林寺
主本尊	釈迦如來	仏事	開山忌(4/22)ほか
創立・沿革			宝徳2年(1450)白井城にあった長尾昌賢(景仲)が嫡子長尾景信に命じて白井庄に建立した。長尾氏に招かれた一州正伊は前の月江正文を開山に迎え自らは長禄3年(1459)の出火回縁のうちに中興開山となっている。創建以来白井城主長尾氏の庇護を受けて繁栄、慶長10年(1605)幕府より上信越佐渡四ヶ国の僧頭に任せられ、曹洞宗最高位の大僧頭院に次ぐ地位を得た。元和3年(1617)中郷村に朱印地30石を与えられた(『群馬県の地名』より)。相模国大雄山最乗寺(南足柄市)を本寺とし、開山月江正文禪師は最乗寺第七世である。
文化財指定	長尾昌賢木像(県重文 昭和30年1月)、鳥飼翁塚(県史跡 昭和24年12月)、雙林寺の大カヤ(県天記 昭和27年11月)、雙林寺の千本カシ(県天記 昭和27年11月)、雙林寺の涅槃図(市重文 昭和58年6月)、雙林寺の木喰仏(市重文 昭和62年5月)、山崎石燕の墓(市史跡 昭和62年5月)、雙林寺のヒイラギモクセイ(市天記 昭和61年5月)		

位置・配置(図28-1、写28-1)

伽藍は子持山南面傾斜地に位置する。南北200m東西150mを超える広大な敷地に十数棟の伽藍が配置される県内屈指の大規模寺院である。南側の参道から勅使門、山門、本堂を南北軸に置き、周囲に禅

堂、六角堂、開山堂、鐘楼及び庫裡を配している。昭和23年(1948)の建物配置によれば、庫裡の南に衆寮を備え回廊で鐘楼に接続していた。昭和39年(1964)に衆寮・禅堂を焼失し、禅堂のみ昭和57年(1982)に再建されたが、現存も禅林七堂伽藍の面影がうかがえる。



図28-1 配置図



写28-1 境内全景

由来および沿革

旧子持村中郷集落は中世には白井保の中心であった。南には国指定史跡黒井峯遺跡、近世鉄物師の住んだ旧吹屋村があり、古代から近世までの多くの遺構を残す地域である。白井城は越後と関東平野の接点にあたる上杉氏の軍事拠点であり、雙林寺は上杉方の長尾氏の庇護を受けて繁栄した。太田道灌の江戸城築城より「城固めの法問」を行い、徳川幕府の終わりまで深い関係を有する。慶長10年(1605)僧頭任命後は元和3年(1617)には中郷村に30石の朱印地が与えられた。「雙林寺の水をのまざるものは禪僧にあらず」と言われ、2,000人の雲水を抱えたといわれ、中に四天王、十大老僧が禪師を補佐、教化は関東一円に広まったと伝わる。

本堂(図28-2、表28-2、写28-2~28-7)

正面11間、側面7間の堂宇は県内屈指の規模である。現在の入母屋造銅板葺きの屋根は当初茅葺であり、その姿は偉容であったと想像される。外部は貫見せ漆喰壁、柱上組物を大斗肘木とし、二軒疎垂木である。間取りは前面土間8室の平面形式を取り、西側背部に開山堂、東側裏手に書院、右手に庫裡を接続する。内外陣の欄間には龍獸が彫られた極彩色



図28-2 平面図(本堂)

表28-2 本堂

建造年代／根拠	18世紀初期／建築様式	構 造・形 式	正面30.33m、側面19.19m、入母屋造、平入、銅板葺(当初茅葺)
工 匠	[大工]上州沼田庄岩室在住 青柳佐次右衛門 清春／内陣欄間裏墨書き	基 础	切石基礎
軸 部	土台、角柱、丸柱(大間、内陣)、貫、虹梁・ 台輪(内陣正面)	組 物	[外部]大斗肘木(拳) [内部]出組(拳・内外 陣)、大斗肘木(拳・大絆)
中 備	木幕股(外陣)、詰組(内陣)	軒	二軒疊垂木
妻 飾	平三斗、二重虹梁、木連格子	柱 間 装 置	舞良戸、漆喰壁
縁・高欄・脇障子	なし	床	拭板(大絆、内陣)、疊
天 井	格天井(大間、内陣)、化粧屋根裏(大絆)、竿 縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(押宗様)
塗 装	極彩色(欄間影刻、幕股、支輪)	飾 金 物 等	なし
繪 画	天井画(大間)	材 質	檜(丸柱)、杉(角柱)
影 刻	欄間(龍、獅子、虎、麒麟、鳳凰、ほか)、木幕股(草花)、支輪(波に菊)、木鼻(渦・若葉)、虹梁(渦・若葉)		



写28-2 全景



写28-3 南東より



写28-4 大絆 西より



写28-5 外陣



写28-6 内陣前机



写28-7 外陣正面影刻欄間

の影刻欄間が嵌められ、大間の格天井には動植物の彩色絵、板戸には四季折々の題材が描かれている。内陣の影刻欄間の裏面には、髓得峯代(1702~1708)・大工青柳佐次右衛門と墨書きが残され、寺誌「歴代略年譜」(以下、寺誌とする)では、これを建造年代としている。虹梁や木鼻にみる唐草紋様や簡素な組物の形式から18世紀初期の建造と推定する。また、本尊前の前机は20世桂巖寿仙和尚時代の作で、元禄7年(1694)の火災以前のものと推察される。

山門 (図28-3、表28-3、写28-8~28-13)

5間1戸、側面3間の県内最大級の二重門である。入母屋造の屋根は組物で大きく張出され、茅葺であった当時の姿は、本堂と相まって威風を放つていたと推察する。

平成3年(1991)の大規模改修により、屋根を銅板に葺替え、妻壁(妻飾)を漆喰塗りにしている。外観は折衷様であり、上層の尾垂木、台輪、花頭窓等に禅宗様がみられ、蛇腹支輪や蟇股、虹梁の渦文様の簡素で律儀な形式に和様をみる。内部は下層部が虹梁と格天井の明快さを持ち、上層部は須弥壇廻りの意匠を出組・折り上げ格天井として飾っている。

建造年は寺誌(再建の募金募)より享保3年(1718)とされ、建築様式からも妥当であり、18世紀前期と推定する。

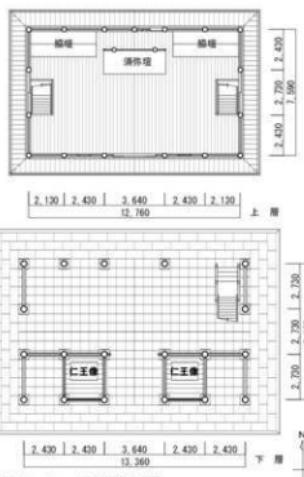


図28-3 平面図(山門)

表28-3 山門

建造年代／根据	18世紀前期／建築様式	構造・形式	5間1戸二重門(13.36m)、側面3間(8.19m)、入母屋造、平入、銅板葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	切石基礎、礎盤
軸 部	丸柱(棕)、地覆、貫、虹梁、台輪	組 物	[外部]四手先(尾垂木、上層)、二手先(尾垂木、下層) [内部]出組(拳)
中 備	本蟇股(上層・下層)、詰組・大瓶束(下層内部)	軒	二軒半繁垂木、蛇腹支輪
妻 飾	漆喰塗(平成3年修理)	柱 間 裝 置	中折れ格子棟唐戸、舞良戸、火灯窓、板壁
縁・高欄・船脛子	擬宝珠高欄	床	拭板(上層)、石敷(下層)
天 井	格天井(上層・修理)、須弥壇折上格天井(上層)、格天井(下層)	須弥壇・扇子・宮殿	有(改修)
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 贊 摧	
彫 刻	拳鼻(渦)、木鼻(獅子・額)、中彫(鬼)、虹梁(渦・若葉)、板支輪(水紋)		



写28-8 正面



写28-9 裏面



写28-10 北面



写28-11 正面見上げ



写28-12 1階虹梁・組物



写28-13 軒組物

開山堂 (図28-4、表28-4、写28-14~28-16)

正面3間、側面5間、寄せ棟造妻入、瓦葺（当初茅葺）である。本堂の西側背面の山腹に位置し、本堂とは渡り廊下と階段で接続する。軸部形式は自然

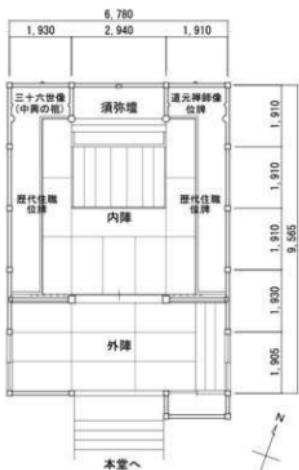


図28-4 平面図(開山堂)

表28-4 開山堂

建造年代／根据	19世紀中期／建築様式	構造・形式	正面3間(6.78m)、側面5間(9.56m)、寄棟造、瓦葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	自然石基礎
輪 部	[外部]土台、角柱、貫 [内部]須弥壇：丸柱(粽)、虹梁、台輪	組 物	[外部]舟肘木 [内部]出組(須弥壇境)
中 備	[外部]無し [内部]本幕股(須弥壇境)	軒	一軒疊重木
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	桟唐戸、硝子戸、障子、漆喰壁
縁・高欄・監障子	なし	床	畳、拭板
天 井	井 格天井、竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(和様)
塗 装	極彩色(須弥壇境組物、彫刻欄間)	飾 金 物 等	桟唐戸引手
繪 画	天井画(草花、花木、動物)	材 質	杉
彫 刻	虹梁(渦・若葉)、肘木(渦)、彫刻欄間(水流に風)、桟唐戸(松に鶴)		



写28-14 南西面



写28-15 開山堂への階段・入口



写28-16 開山堂正面

石独立基礎・土台敷き・貫構造で、柱上に舟肘木を置き一軒疊重木を掛けている。平面は、手前を外陣、桟唐戸を境に奥を内陣とし、内陣正面に須弥壇を備える。須弥壇には来迎柱が置かれ、彫り深い文様を付けた虹梁が架かり、極彩色の出組と裏股で飾っている。内陣に置かれた一对の燭台には文久2年(1862)の年号が刻まれ、寺誌ではこれを建造年としている。建築様式から19世紀中期と推定する。

書院 (図28-5、表28-5、写28-17~28-19)

梁間12.52m、桁行20.20m、寄棟造鉄板葺（当初板葺か）である。本堂とは東側の大縁で接続する。2列3室の6間取りの方丈形式を基本として、下手妻側に2室を付設し、四方に入側縁を巡らせていく。建物配置は、桁行を南北軸に取り正面（西面）に方丈庭園が作り込まれ、東側には裏庭が設えられている。なお、前後の列は喰い違い間取りとなっている。正面側は書院付きのツルノマを上段の間として、マツノマ2室を中の間、控えの間と設えている。背面側も同様に部屋の性格付けがされている。群馬県内の寺院建築の中で、このような形式の寺院は珍しく貴重な存在である。建造年は、寺誌で天明2年(1782)としている。ゴシュインノマの襖絵には

1. 本調査：寺院建築

金井烏洲（寛政8年(1796)～安政4年(1857)）の銘と落款が確認される。改修の痕跡もみられ、現在の姿になったのは江戸末期と推定する。参考であるが、座敷（ツルノマ）における柱間（2間）内法寸法は3,615mm（11.93寸）である。

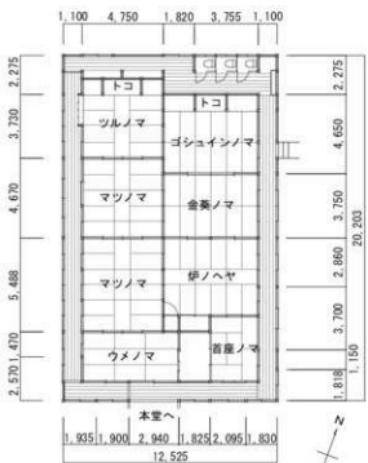


図28-5 平面図(書院)

鐘樓 (図28-6、表28-6、写28-20～28-22)

4本柱の二層形式で入母屋造銅板葺（当初茅葺）、上層四方に高覧を廻し下層を袴腰とする。組物は上下層共に柱上及び中備詰組を出組とし、上層四隅に尾垂木を付ける。彫刻は尾垂木（辰）・支輪（瑞雲）にみられる。肘木に和様、他に禪宗様をみる折衷様である。建造年は寺誌で安永4年(1775)の再興をしている。各部様式から18世紀後期の建造と推定する。

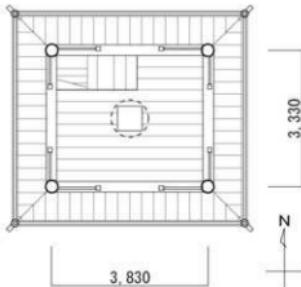


図28-6 平面図(鐘楼)

表28-5 書院

建造年代／根拠	江戸末期／建築様式	構造・形式	梁間6.5間(12.52m)、桁行10.5間(20.20m)、寄棟造、鉄板葺
工 匠	不明	基 磐	切石基礎
軸 部	土台、角柱、貫	組 物	なし
中 備	なし	軒	一軒疎垂木
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	硝子戸、襖、障子、漆喰壁
縁・高欄・脇障子	なし	床	疊、拭板
天 井	棹緑天井、化粧屋根裏天井	須弥壇・屏子・宮殿	なし
塗 装	なし	飾 金 物 等	釘隠
絵 画	襖絵 金井烏洲他	材 質	桧、杉
彫 刻	透し欄間 組子欄間		



写28-17 西面



写28-18 ツルノマ脇書院組子障子



写28-19 マツノマ

表28-6 鐘樓

建造年代／根拠	18世紀後期／建築様式	構造・形式	4本柱二層形式、入母屋造、平入、銅板葺(当初茅葺)、下層袴腰、上層四方高笠付
工 匠	不明	基 础	切石基礎
軸 部	丸柱、貫、内法長押、台輪	組 物	[外部]出組(隅尾垂木、上層)、出組(上層) [内部]出組(上層)
中 備	結組(出組)	軒	二軒蟻垂木
妻 飾	虹梁大瓶束	柱 間 裝 置	板壁、火灯窓
縁・高欄・脇障子	擬宝珠高欄	床	[上層]拭板 [下層]石敷
天 井	格天井(上層)、根太天井(下層)	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	朱塗、極彩色(板支輪・尾垂木)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜(丸柱)、杉
彫 刻	拳鼻(渦)、板支輪(水紋に菊)、尾垂木(辰)		



写28-20 南面



写28-21 北面



写28-22 西面見上げ

萬松閣門（総門・勅使門）（図28-7、表28-7、写28-23～28-25）

1間1戸、側面1間の向唐門である。正背面で意匠が異なり正面の装飾性が高い。正面を丸柱、背面を角柱、四方に虹梁を架け、正面木鼻を丸彫（獅子・家）、背面を拳鼻（渦）としている。柱上には正面を除き台輪を載せ出組とし、両妻飾りを大瓶束・彫刻板嵌めとする。彫刻は木鼻・支輪・妻飾り・兎の毛通しにみられ極彩色が施されている。正面虹梁の唐草文様には波紋がみられる。棟札はなく、寺誌では天明6年（1786）建造としている。各所にみる意匠・形式から建造は江戸後期と推定する。

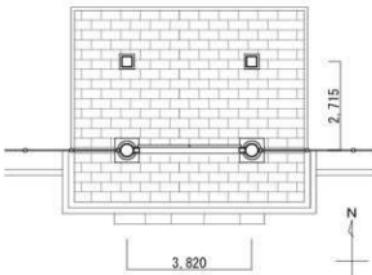


図28-7 平面図(萬松閣門)

表28-7 萬松閣門(総門・勅使門)

建造年代／根拠	江戸後期／建築様式	構造・形式	1間1戸向唐門(3.82m)、側面1間(2.71m)、銅板葺
工 匠	不明	基 础	切石基礎、石礎盤
軸 部	丸柱(正面)、角柱(背面)、虹梁、台輪(側背面)	組 物	出組
中 備	本幕股	軒	一軒蟻垂木(茨垂木)
妻 飾	虹梁大瓶束、彫刻板嵌込、兎通	柱 間 裝 置	杣唐戸
縁・高欄・脇障子	なし	床	切石敷
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	朱塗、黒塗、極彩色(彫刻)	飾 金 物 等	なし
絵 画	天井絵	材 質	檜
彫 刻	拳鼻(渦)、虹梁(渦・若葉)、木鼻(獅子・象)、妻飾彫刻版・板支輪(水紋に菊)、懸魚(亀・鶴)、幕股(牡丹)		



写28-23 正面



写28-24 北西面



写28-25 正面木鼻・組物

まとめ

県内屈指の大規模伽藍であり、禪林七堂伽藍の面影がうかがえ、往時の姿を明確に考察することができる。多数の文献史料を残す寺院である。さらに僧録頭であったことから多くの末寺及び各研究機関にも文書と資料があり、長尾氏の関連資料も各地に存在する。平成8年(1996)に開創五百五十年を記念して念願であった『最大山雙林寺誌』がまとめられた。今回は寺誌から概略的に建造年を確認にとどまるを得なかったが、小屋裏も含めた建造物の詳細調査と文献調査からそのさらなる全容を明らかにすることが望まれる。

(岡田敦志・小池志津子・長井淳一)

【参考文献】

- 『群馬県の地名』平凡社 昭和62年
- 『子持村誌 補遺編 伝承と路傍の文化』子持村誌編さん室 昭和62年
- 『子持村の民家と社寺建築』上毛歴史建築研究所 子持村誌編纂室 昭和62年
- 『開創五百五十年記念最大山雙林寺誌』雙林寺 平成8年

29 空恵寺〔くえいじ〕

表29-1

寺院名	天竺山空恵寺	所在地	渋川市上白井3958
宗派	臨済宗永源寺派	所有者・管理者	宗教法人 空恵寺
主本尊	虚空藏菩薩、般若如意輪	仏事	涅槃会、春秋彼岸、花まつり、施餓鬼、除夜等
創立・沿革	大同元年(806)最澄が創建し上野国で第一番の古寺との伝えがあり、当初の境内はさらに北方2kmの位置にあったとも伝わる。その後天台修驗寺門派の修行場となり子持神社別当大乘院などを分設したという。寺伝によれば鎌倉初期に白井城代となった長尾氏の菩提寺となり寺領の寄進を受け、文永7年(1270)鎌倉建長寺第一座華嚴堂拝を開山に迎え臨済宗に改め、多くの末寺を持つに至ったという。慶安元年(1648)、19世長續の入山により現宗派となり、同年朱印地18石が与えられた(「徳川家光朱印状」空恵寺文書)。裏山の長尾氏累代の供養塔は戦国後期の白井城主長尾景豈の建立と推定される(「群馬の地名」より)。		
文化財指定	空恵寺山門(県重文 昭和30年1月)、空恵寺の御朱印状(市重文 昭和61年5月)、長尾氏累代の墓(市史跡 昭和58年6月)		

位置・配置(図29-1、写29-1)

子持山東南麓の旧上白井村長峯の山中に位置する。利根川に沿って沼田西街道が走り、長尾氏が白井城に入ると北方の伊熊に寄居の砦を築いたといわれる。境内への道路は国道17号線を伊熊から入るものと、子持神社前から入るものとあるが、いずれも環境省の長距離自然歩道である関東ふれあいの道(19子持山若人のみち)のハイキングコースである。境内は南傾斜の山腹に位置する。道路に面した冠木門をぐぐり木立に囲われた深山幽谷の趣がある苔むした参道を北に上がる。山門、勅使門及び本堂が南北軸線上に置かれ、本堂西手前に鐘楼、本堂東に接続して庫裡を配す。裏山には長尾景仲ほか長尾氏累代の中世石造物17基を置く。

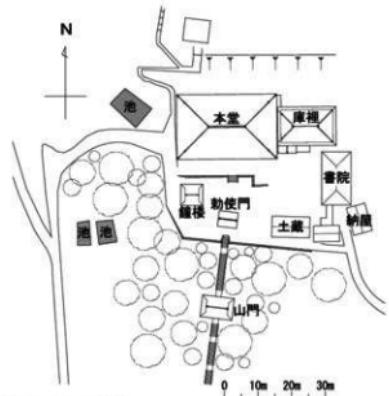


図29-1 配置図



写29-1 境内全景

由来および沿革

大同元年(806)最澄創建上毛古寺第一番の伝えがあり当初の境内はさらに北方2kmの位置にあったとも伝わる。明徳2年(1391)に第二世松庵道林が入寺晋山するまでの八十数年間は建長寺住持者試補道場として正住を置かず輪番で十三禪師が歴任していた。現在の臨済宗永源寺派になったのは慶安元年(1648)で、現住職で38世となる。近年は須佐権堂、須佐教道等、名僧を輩出している。

本堂(図29-2、表29-2、写29-2~29-7)

正面10間、側面7間の堂宇である。入母屋造銅板葺の屋根は当初茅葺き、東側一間は差掛けの下屋であった。自然石基礎に土台敷、貫を見せた漆喰壁とし、柱上を平三斗(背面舟肘木)、二軒疎垂木とする。間取りは前面廊下・8室の方丈形式を取り、側背面に廊下を付けている。西面の一間幅の空間は、

1. 本調査：寺院建築

当初は廊下であったと思われる。室中は中央部を拭板として周囲に置く四方單（相国時・建長寺の禪堂に例をみる）の形式を取る。大間及び内陣の欄間に、素木及び極彩色の雲獸・瑞花・瑞雲を題材とした欄間彫刻が嵌め込まれている。棟札が残され、天保6年（1835）の建造年、工匠（大工・彫工）が明らかである。

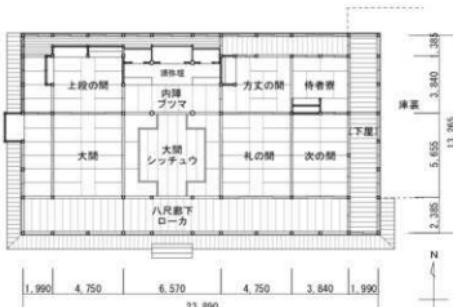


図29-2 平面図(本堂)

表29-2 本堂

建造年代／根拠	天保6年(1835)/ 棟札	構造・形式	正面10間(21.90m)、側面7間(13.26m)、寄棟造、銅板葺(当初茅葺)
工 匠	[大工]棟梁 群馬郡新井邑 松岡出雲正藤原富盛、同苗久太郎明貞、他門人8名、棟梁津久田邑 須田新左衛門信邦、門人5名 [彫工]棟梁 武州熊谷 小林源八正俊、門人3名 [木挽]高野金六、他7名 [鳩頭]飯塚隼助、福島虎右衛門、他2名	基 磨	自然石基礎
軸 部	[外部]角柱、土台、貫、長押、台輪(正面及び側面一間) [内部]角柱、丸柱(柱)・虹梁・台輪(大間内陣境、来迎柱筋)	組 物	[外部]平三斗(正面及び側面一間)、舟肘木 [内部]出組(大間内陣境、来迎柱筋)
中 備	[外部]無し [内部]幕股(大間内陣境、来迎柱筋)	軒	二軒疊垂木
妻 鋸	なし	柱間装置	硝子障子、漆喰壁
縁・高欄・脇障子	切目縁(正面、西側面)	床	畳、拭板
天 井	竿縁天井、格天井(大間、内陣)、蛇腹支輪	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(折衷様)
塗 装	素木、極彩色(欄間彫刻、幕股)	飾 金 物 等	なし
絵 画	天井画(花木・鳥)、板襖絵(山水)	材 質	櫛(丸柱)、杉(角柱)
彫 刻	欄間彫刻(大間／神仙雲獸、内陣／天女)、幕股(花鳥)、虹梁(水紋・鳥)		



写真29-2 全景



写真29-3 妻面(西面)



写真29-4 室中



写真29-5 室中正面見上げ



写真29-6 室中仏間彫影刻欄間(中央)



写真29-7 室中天井

山門 (図29-3、表29-3、写29-8~29-13)

3間1戸の楼門で側面2間とする。屋根は入母屋造銅板葺・当初茅葺である。総檼・素木の外観は2階が低く押えられプロポーションが良い。組物は基本的に出組とし木鼻には彫刻を付けていない。中備の撥東、蛇腹支輪、妻飾りの家替首等に和様をみる一方、柱脚の礎盤、柱の粽、花頭窓等に禅宗様がみられる。虹梁や拳鼻にみられる唐草模様の渦は比較的よく卷いており葉は簡素である。上層に仏が安置され、内部は一面に極彩色の文様が塗られた、非常に華やかな空間となっている。建造様式から17世紀後期から18世紀前期の建造と推定される。

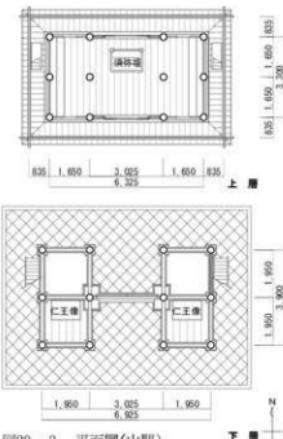


図29-3 平面図(山門)

表29-3 山門

建造年代／根据	17世紀後期～18世紀前期／建築様式	構造・形式	3間1戸樓門(6.93m)、側面2間(3.90m)、入母屋造、平入、銅板葺(当初茅葺)、上層高欄付
工 匠	不明	基 磐	切石基礎、礎盤
軸 部	丸柱(粽)、貫、長押、虹梁	組 物	[外部]出組(上層)、二手先 [内部]出組(上層)、出三斗(下層)
中 備	[外部]撥束 [内部]本棊股(下層本柱筋中央)、東	軒	二軒蟄垂木、蛇腹支輪
妻 飾	家替首	柱 間 裝 置	桟唐戸、花頭窓、板壁
縁・高欄・脇障子	切目縁、組高欄(上層)	床	拭板(上層)、切石四半敷(下層)
天 井	格天井(上層)、拭板(下層)	須弥壇・扇子・宮殿	和様
塗 装	[外部]素木、[内部](上層)金欄巻(柱、来迎柱)、極彩色(虹梁、組物、撥束、板壁)	飾 金 物 等	なし
絵 画	天井画(上層)	材 質	檜
彫 刻	木鼻(拳)		



写29-8 正面(南面)



写29-9 妻面



写29-10 正面見上



写29-11 2階縁



写29-12 2階西面



写29-13 上層部木鼻

鐘樓（図29-4、表29-4、写29-14～29-16）

4本柱の二層形式、二軒繋垂木の入母屋造銅板葺（当初茅葺）、上層四方に高覧を廻し下層を袴腰とする。外観は粽付柱、台輪、花頭窓を用いた禅宗様を基本としている。上層は出組・彫刻尾垂木付、中備に幕股を置き、下層は二手先、中備を詰組・花肘木（一手部）、さらに内側に幕股を付ける。彫刻は尾垂木（蟹）と板支輪（瑞雲）、幕股縁抜部（草木、渦）にみられ、極彩色で塗られている。また、貫・肘木の拳鼻の渦は丸く比較的良く巻いている。これらの形式から18世紀後半の建造と推定される。

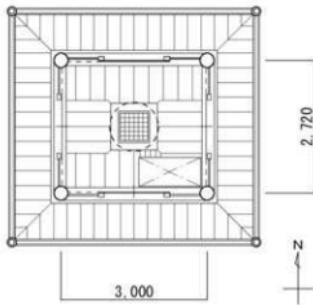


図29-4 平面図(鐘楼)

表29-4 鐘楼

建造年代／根拠	18世紀後半／建築様式	構造・形式	4本柱二層形式、入母屋造、平入、銅板葺（当初茅葺）、下層袴腰、上層高欄付
工 匠	不明	基 础	切石基礎
軸 部	丸柱（粽）、台輪、貫、長押	組 物	〔外部〕出組（隅尾垂木／上層）、二手先（花肘木／下層）〔内部〕出組
中 備	〔外部〕本幕股（上層）、詰組（下層）、本幕股（下層）〔内部〕換束（上層）	軒	二軒繋垂木、板支輪
妻 飾	虹梁大瓶束	柱間裝置	組子障子。火灯窓、板壁（上層）桟唐戸、板壁冷蔵（下層）
幕・高欄・脇障子	切目縁、擬宝珠高欄	床	拭板
天 井	格天井（上層）、根太天井（下層）	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、極彩色（彫刻）	飾 金 物 等	なし
絵 画	天井画	材 質	檜
彫 刻	拳鼻（渦）、幕股（牡丹、菊、渦）、板支輪（瑞雲・鶴）、尾垂木（辰）		



写29-14 北東面



写29-15 1階軒下組物



写29-16 2階中備

勅使門（図29-5、表29-5、写29-17～29-19）

1間1戸、側面1間の向唐門、当初の屋根は茅葺である。正面を丸柱と盤壁、背面を角柱と切石基礎とし、柱の下端を粽付とする。組物は出三斗、正面中備に幕股を置き、妻飾りは虹梁大瓶束である。彫刻は正面木鼻が櫛素木の獅子と額の木鼻・極彩色の鳳凰の兎毛通しを付ける。全体に禅宗様が色濃くみられる。また、虹梁等の唐草紋様は、渦・若葉が一体化し簡素な形状である。19世紀前半の建造と推定する。近年、全面的に復原・修復が行われた。

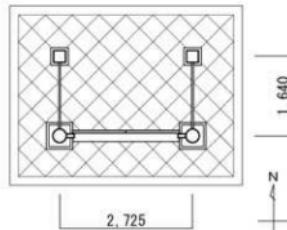


図29-5 平面図(勅使門)

表29-5 勅使門

建造年代／根拠	19世紀前期／建築様式	構造・形式	1間1戸向唐門(2.72m)、側面1間(1.64m)、銅板葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	切石基礎、礎盤
軸 部	正面丸柱(粽)、背面角柱(粽)、貫、虹梁	組 物	出三斗
中 備	本垂股	軒	一軒半繁垂木(茨垂木)
妻 飾	虹梁大瓶束(彫刻繪付)	柱 間 裝 置	棟唐戸(格狭間付)
縁・高欄・脇障子	なし	床	切石四半敷
天 井	鏡板天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、極彩色(彫刻)	飾 金 物 等	なし
絵 画	天井絵(鏡板、龍墨絵)	材 質	檜
彫 刻	拳鼻(満)、木鼻(獅子・観)、虹梁(満・若葉)、妻飾繪(波)、兎毛通(鳳凰)、幕股(松)		



写真29-17 北東より



写真29-18 正面見上げ



写真29-19 木鼻

まとめ

本堂棟札に記された彫工には棟梁武州熊谷小林源八正俊とある。花輪村石原吟八郎を継いだ2代石原吟八によるものである。花輪村石原吟八郎を継いだ2代石原吟八は師事した小林源八は正信を称しており棟札の記載違いが不明である。欄間彫刻の題材は中国神仙故事によるものが多い。本堂及び山門の天井画、障壁画の筆も確かなものであり、彫工や絵師の詳細調査に期待する。

最澄開山、山門の名胡桃城遺構説など伝承の多い名古刹である。累代の墓所とする白井長尾家は上野

国内の政治を研究する上で有力な系譜であり、長尾氏研究の核となる寺院でもある。

(岡田敦志・小池志津子・長井淳一)

【参考文献】

- 『子持村誌 補遺編 伝承と路傍の文化』子持村誌編さん室 昭和62年
- 『子持村の民家と社寺建築』上毛歴史建築研究所 子持村誌編纂室 昭和62年
- 『上州のお宮とお寺寺院編』近藤義雄 昭和53年
- 『群馬県の地名』平凡社 昭和62年

30 宗玄寺〔そうげんじ〕

表30-1

寺院名	快中山裏内院宗玄寺	所在地	渋川市赤城町勝保沢甲99
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 宗玄寺
主本尊	観音菩薩	仏事	修正会(1/1)、十一面觀音縁日(3/1)、施食会(4/2)、盂蘭盆会(8/15)
創立・沿革	創建については詳らかでなく、本村勝保沢の郷士斎藤加賀守、当地所有地全部を寄進し、別伝存策大和尚を開山として元和8年(1622)に創建と記されている(『勢多郡横野村誌』)。		
文化財指定	勝保沢の十一面觀音堂(市重文 昭和56年5月)		

位置・配置(図30-1、写30-1)

当寺院は渋川市の北東、赤城山西麓に位置する曹洞宗の寺院である。南道路より左右駐車場に挟まれたカツジや桜並木の参道を進むと、平成10年(1998)再建の楼門がある。潜ると、左に十一面觀音堂、さらに進むと正面に本堂、左に庫裏が配され、手入れの行き届いた樹木に囲まれている。本堂、庫裏北側に位牌堂と墓地、中央に勝保沢城主、斎藤加賀守の墓碑があり、境内地に勝保沢城址がある。

由来および沿革

『横野村誌』によると、本村勝保沢の郷士斎藤加賀守が、当寺所有地全部を寄進し、別伝存策大和尚

を開山として元和8年(1622)に創建したとある。天保年間に火災に遭い、堂宇や宝物を焼失し、嘉永4年(1851)第18世天海梵竜大和尚が、近郷の檀信徒の協力を得て現在の堂宇を再建した。董葺きであった本堂は昭和28年(1953)に瓦葺きにし、その後銅板葺きに改修され現在に至っている。

十一面觀音堂(図30-2、表30-2、写30-2～30-7)

当堂宇は、石本勝左衛門勝辰が勝保沢字寺内小字下りに造営したものを、勝左衛門百年忌(明治30年)に当たり、明治31年(1898)第22世加藤義全の時、現在地に移築した。星野家文書(建物契約書・寛政10年(1798))によると、大工は勝保沢の(星野)幸右衛門で、敷島村棚下の不動堂、(下南室)赤城神社、北橋村八崎の角谷戸薬師堂などを手掛けている。また、彫工名は無いが、勝保沢の角田家文書に金具、獅子、虹梁は江戸より送られ、その他の彫物は鼻輪(花輪か)彫物師に依ると記されている(『横野村誌』)。

堂宇は入母屋造鉄板葺妻入で、一間向拝唐破風付である。正面3間(4.81m)、側面4間(6.86m)、内部は外陣、内陣に二分し、内陣に須弥壇、厨子を置

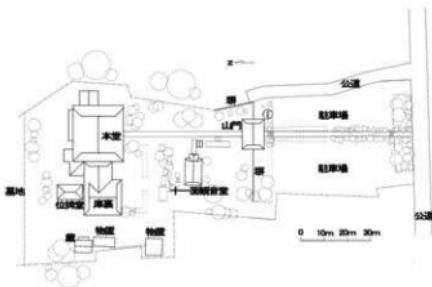


図30-1 配置図



写30-1 境内全景

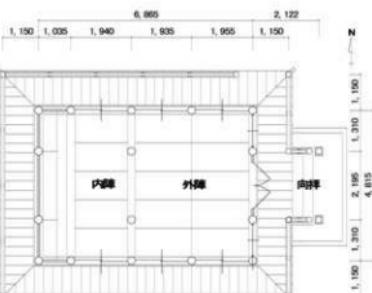


図30-2 平面図(十一面觀音堂)

写30-2 十一面觀音堂

建造年代／根拠	寛政11年(1799)／棟札	構造・形式	正面3間(4.81m)、側面4間(6.86m)、入母屋造、妻入、向拝1間唐破風付、鉄板葺
工 匠	[大工]星野幸右衛門(古文書)	基 础	[身合]基壇、切石布基礎 [向拝]礎石、礎盤
軸 部	[身合]丸柱(棕)、土台、縁長押、内法長押、頭貫、台輪、[向拝]角柱(棕、几帳面)、水引虹梁、海老虹梁、手挟(二対)	組 物	[身合外部]三手先、木鼻 [身合内部]出組 [向拝]二連・二重出三斗一体型積上変形
中 備	[身合]大瓶束 [向拝]彫刻	軒	[身合]二軒繫垂木、蛇腹支輪、板支輪(彫刻) [向拝]二軒繫垂木、輪垂木茨付
妻 節	二重虹梁大瓶束、鰐付懸魚、兎毛通	柱 間 装 置	両間側唐戸、舞良戸、火闌窓、板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、擬宝珠高欄、登高欄	床	[身合]景敷 [向拝]敷石
天 井	格天井、鏡天井	須弥壇・扇子・宮殿	扇子
塗 装	朱塗(柱、虹梁、組物)、黒漆(垂木、蛇腹支輪、台輪)、極彩色(彫刻、支輪、手挟)	飾 金 物 等	木口金具、釘隠(巻頭)、棟唐戸: 銅金具、丁金具、十文字金具
繪 画	[外陣]天井絵(花鳥風月、龍)、狩野梅笑(墨書) [内陣]天井絵(花鳥風月)	材 質	漆、檜
彫 刻	[身合外部]虹梁(渦・若葉)、木鼻(獅子)、欄間(花鳥、馬)、支輪(波・雲)、壁(鯉の滝登り)、火灯窓(花鳥) [身合内部]欄間に赤獅子、龍、青獅子) [向拝]虹梁(渦・若葉浮彫)、軒唐破風兎毛通(鳳凰)、木鼻(獅子、象)、中備(龍)、手挟(牡丹透彫)		



写30-2 正面



写30-3 向拝



写30-4 向拝左海老虹梁・手挟



写30-5 身合左欄間彫刻



写30-6 内部



写30-7 内部天井絵

く。身合柱は棕付丸柱、外部組物は三手先とし、内部は出組とする。向拝柱は棕付、几帳面の角柱、組物は二連・二重出三斗一体型積上変形、中備は彫刻を施す。軒は二軒繫垂木、妻飾りは二重虹梁大瓶束とする。

彫刻は、唐破風兎毛通に鳳凰、向拝木鼻に獅子と象、中備に龍、手挟に牡丹の透彫。外部身合木鼻に獅子が、欄間に花鳥と馬、壁に鯉の滝登り、支輪に波・雲、火灯窓に花鳥が施されている。内部、内外陣境欄間に赤獅子、青獅子と龍の極彩色の彫刻が嵌込まれ、内外陣格天井に花鳥絵、外陣鏡天井に龍が描かれ、絵師「狩野梅笑」の墨書がある。

まとめ

十一面觀音堂は、木鼻や中備、欄間、壁、支輪に至るまで彫刻で埋め尽くされている。細部意匠や特徴等から、棟札、古文書が示す寛政11年(1799)の建造は明らかである。華麗な天井絵や彫刻と調和のとれた木組の美しさは、18世紀後期の指標となる建物で、地方仏堂建築を理解する上で貴重である。

(難波伸男)

- 【参考文献】
- 「勢多郡横野村誌」群馬県勢多郡横野村誌編纂委員会 昭和31年
- 「赤城村誌」赤城村誌編纂委員会 平成元年
- 「赤城村の文化財」写真集「赤城村の文化財」発刊委員会 昭和55年
- 「星野光治家文書」群馬県立文書館蔵

31 如意寺【によいじ】

表31-1

寺院名	大慈山如意寺	所在地	渋川市村上3892
宗派	臨済宗永源寺派	所有者・管理者	宗教法人如意寺
主本尊	如意輪觀世音	仏事	
創立・沿革	親応元年(1350)12月藤原季長卿の開基、村上道林(松庵道林)の開山。季長は信仰心厚く如意輪觀音を信仰し、道林に帰依し土地建物を寄進して如意寺を創立した(『小野上村誌』)。		
文化財指定	なし		

位置・配置（図31-1、写31-1）

国道353号線を中之条方面に向かい小野子山登山口の標識を右折し、蛇行した山道を進むと寺入口がある。南面傾斜の広い土地にある当寺は入口に冠木門があり、木々に覆われ苔生した長い参道の階段を登り進むと正面に本堂がある。本堂南には鐘楼、西側は庫裏につながり、庫裏南には土蔵の倉がある。西側道路を登ると墓地がある。本堂の北・東側の斜面は杉林の山林で、本堂から南方に吾妻川、榛名山、伊香保温泉を眺望できる。

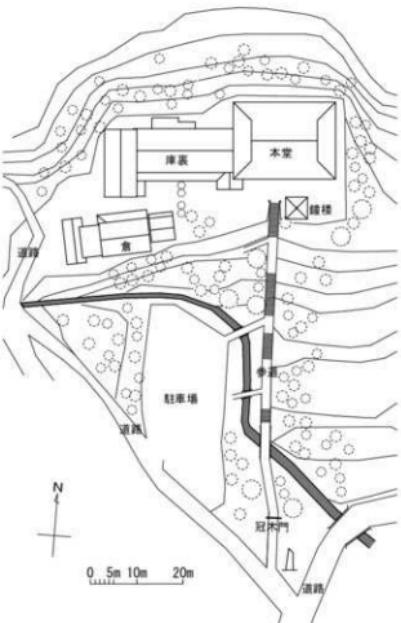


図31-1 配置図

由来および沿革

本寺は、親応元年(1350)12月藤原季長卿の開基で、村上道林(松庵道林)の開山である。季長は信仰心厚く如意輪觀音を信仰し、道林に帰依し、土地建物を寄進して如意寺を創立したと伝わる。延宝年間(1673)の第20世生山芸寅禪師の時に、臨済宗永源寺派に改派し、山号も大慈山と改め現在に至っている。



写31-1 全景

本堂（図31-2、表31-2、写31-2～31-7）

古文書（「如意寺之略記」）によると、本寺は文政5年(1822)11月17日と嘉永元年(1848)12月15日の火災により諸堂宇を焼失している。その後嘉永2年

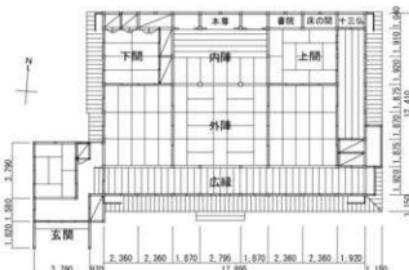


図31-2 平面図(本堂)

表31-2 本堂

建造年代／根拠	安政2年(1855)／古文書	構造・形式	正面17.89m、側面12.41m、入母屋造、平入、銅板葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	玉石、コンクリート
軸 部	[身舎]角柱、土台、貫、長押、台輪、丸柱(来迎柱、内外陣境柱)	組 物	[外部]平三斗 [内部](来迎柱上部・内外陣境柱上部)出組
中 備	[内部](来迎柱上部・内外陣境柱上部)木幕股	軒	二軒疊垂木
妻 飾	土壁	柱 間 装 置	ガラス戸、土壁、格子戸欄間
縁・高欄・脇障子	三方切目縁	床	疊敷 [内陣]拭板張
天 井	[内陣・外陣]格天井、板支輪(影刻) [他室] 竹縁	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(三連棚)
塗 裝	素木、虹梁彫刻一部金色	飾 金 物 等	釘隠
繪 画	なし	材 質	檜、杉
影 刻	虹梁(龍、波・鳥、波・亀)、天井支輪(雲)		



写真31-2 正面



写真31-3 軒廻木鼻



写真31-4 来迎柱正面



写真31-5 外陣正面



写真31-6 外陣虹梁彫刻



写真31-7 内部

(1849)春に庫裏を再建し、本堂は嘉永7年(1854)に起工し安政2年(1855)に再建している。寺には明治17年(1884)本堂造作の資金寄付の名簿が残っている。正面8間、側面6.5間、入母屋造。外観は内法上に2本の飛貫があり白壁が塗られ、二軒の深い庇下に三方の縁が廻っている。内部は北側三室、南側三室、三方に廊下が付いている。内陣は、丸柱の来迎柱、三連棚の須弥壇、龍の丸彫刻の虹梁、天井彫刻支輪に格天井である。外陣は、内陣外陣境にも丸柱を配し、虹梁には波と鳥、波と亀の彫刻を施し、簾欄間が付き、天井彫刻支輪に格天井である。各室とも天井が高く、彩色ではなく全体的に簡素な造りとなっている。虹梁に龍の丸彫刻を入れ、天井彫刻支輪など、棟札は不明であるが、古文書のとおりの江戸末期建築の特徴を良く現わしている。

まとめ

寺には、創立に關係する「藤原季長の寄進状」の古文書が残っている。また、御本尊如意輪觀世音・無量寿仏の立像・同座像・後醍醐帝御染筆短冊・後京極前開白筆短冊・在原業平筆色紙・如意寺失火につき訴状・如意輪觀音縁起之碑等、文化財指定はされていないが宝物や古文書が多数残っている。度重なる火災により再建していることが様々な記録に残されており、建造後に資金を集めては造作を施工していったことが窺える。本堂は江戸時代末期の指標となる建物である。

(林 美幸)

【参考文献】
『小野上村文化財要覧』小野上村教育委員会 平成5年
『小野上村誌』小野上村役場 昭和53年
『如意寺之略記』慶應2年(古文書、群馬県立文書館所蔵)

32 (如意寺) 岩井堂観世音御堂 ((によいじ)いわいどうかんぜおんみどう)

表32-1

寺院名	(如意寺) 岩井堂観世音御堂	所在地	渋川市村上13
宗派	臨済宗永源寺派	所有者・管理者	宗教法人 如意寺 管理: 塩川地区講中
主本尊	如意輪観世音菩薩	仏事	祭典(4/18)
創立・沿革	平安時代の延久5年(1073)3月、岩井堂城主山田太郎為村が創建。藤原季長が如意輪観音を信仰し觀応の頃(1350~1352)建立。天正年間(1573~92)に焼失し、享保年間(1716~36)に再建した(『小野上村誌』)。		
文化財指定	岩井堂観世音御堂(市重文 昭和51年5月)		

位置・配置 (図32-1、写32-1)

国道353号線を中之条方面に向かいJR吾妻線小野上温泉駅の先、沿道右側に位置する。背面に奇岩、前面に吾妻川の景勝の地に立地する。現在は背面崖には落石防止のネットが張られている。以前は道路反対側にドライブインがあり、利用する多くの観光客が参拝していたが、現在は国道の岩に沿うよう駐車場がある。御堂西側脇奥に洞窟があり、石

仏が多数安置されている。御堂西側には鳥居があり大鳥神社への参道になっている。

由来および沿革

平安時代の延久5年(1073)3月、岩井堂城主山田太郎為村が創建。藤原季長が如意輪観音を信仰し觀応の頃(1350~1352)建立。天正年間(1573~1592)に焼失し、享保年間(1716~1736)に再建されたと『小野上村誌』に記されている。古くは吾妻観音札所の第一番(時に二番)であった。4月18日に祭典が催される。昭和51年(1976)5月に渋川市(当時は小野上村)指定重要文化財に指定された。当御堂は同地区内の如意寺に属している。

御堂 (図32-2、表32-2、写32-2~32-7)

床下3.7mまでを柱と貫で高く組み、その上に岩を背にして建つ御堂は、背面側の軸体がなく、床・壁・屋根が岩に組み込まれ一体となった懸崖造である。古くは梯子を登って参拝したようであるが、現在は鉄骨の階段が両側に架けられている。内部は内陣・外陣の二間で、内陣正面には崖を掘り抜いて須弥壇が造られている。「小野上村文化財要覧」によると「内陣は建物が古く、天正年間に建立したものと思われる」と記載されているが詳細は確認できない。内外陣境には丸柱が建ち、外陣正面は頭貫に台輪が付き拳鼻付、平三斗の組物、中備も平三斗である。虹梁の唐草絵様は渦が円形に近く良く巻込み若葉が付いている。虹梁の下内側には、やはり良く巻込んだ渦の絵様の持送りが付いている。外部の虹梁絵様は内部と少し違うが、内部の虹梁絵様等から、建造年代は『小野上村誌』の通り享保年間(1716~1736)の18世紀前期と推定する。内外陣境壁等に多くの墨書きが見られるが参拝者の落書きと思われる。外陣右丸柱に「昭和元年(1926)12月25日落成、同2年2月18日大祭」の再建営縁の棟札と軒下には昭和

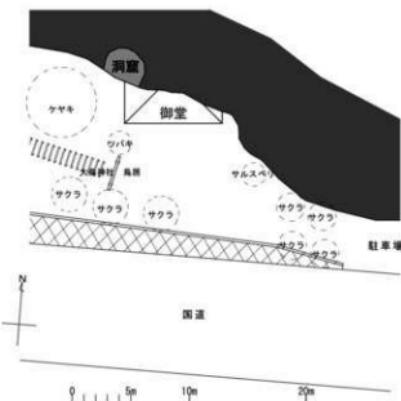


図32-1 配置図



写32-1 境内全景

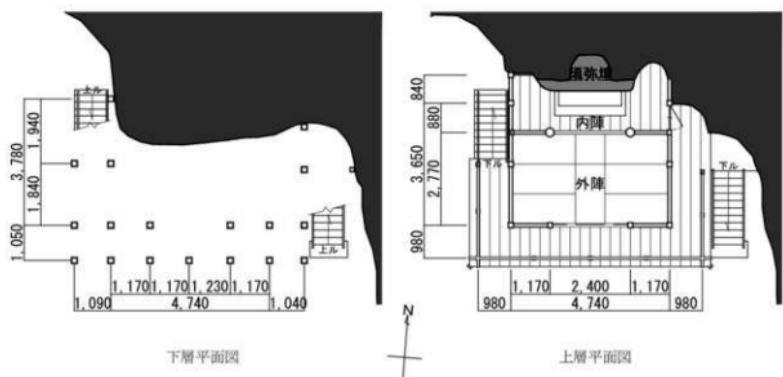


図32-2 平面図(御堂)

表32-2 御堂

建造年代／根拠	18世紀前期／建築様式	構造・形式	正面4.74m、側面3.65m、寄棟造、平入、鋼板葺(当初板葺)
工 匠	不明	基 础	石、一部コンクリート
軸 部	角柱、貫、台輪、長押丸柱(内外陣境柱)、持送	組 物	[外部](正面)平三斗、(側面)舟肘木 [内部外陣](正面)平三斗
中 備	[外陣](正面)平三斗	軒	二軒疊垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	蔀戸、板壁
縁・高欄、脇障子	三方縁、跳組高欄	床	[内陣]拭板張 [外陣]疊敷
天 井	竿縁	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(崖内)
塗 装	素木、朱塗(腰部柱・貫)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 质	不明
彫 刻	木鼻・虹梁(線刻)		



写32-2 正面



写32-3 崖と屋根



写32-4 軒と虹梁



写32-5 崖内の須弥壇



写32-6 外陣正面



写32-7 木鼻

2年の寄進者名の額があり、昭和52年(1977)改修・仏像新添の同様の額もある。風雨に曝される建物の状況から改修を重ねてきた建物であることが推察される。

まとめ

建物の内外全ての箇所に千社札が貼られ、多くの人々が参拝に訪れている様子がわかる。大慈山如意寺の景図にも観音堂の絵が描かれている。この御堂

は岩窟を利用して造られた懸崖造で県内でも大変珍しい建物であり、現在は地元の塩川講中の人々が大切に守っている。

(林 美幸)

【参考文献】

『小野上村文化財要覧』小野上村教育委員会 平成5年

『小野上村誌』小野上村役場 昭和53年

『群馬県文化財総合調査報告書 中毛地方の文化財』群馬県教育委員会 昭和53年

33 柳沢寺（りゅうたくじ）

表33-1

寺院名	船尾山等覺院柳沢寺	所在地	北群馬郡棟東村山子田2535
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 柳沢寺
主本尊	阿弥陀如来、千手千眼觀音	仏事	節分（2/3）、宇羅盆会（8/13）、除夜の鐘（12/31）
創立・沿革	当寺の起源は『神道集』と『船尾山縁起』など諸説が伝えられている。延宝4年（1678）に造られた梵鐘の銘文には「推古天皇（593～628）の御代、上野国司高光中将の建立、宝亀年間（770～780）に焼失し衰微したが、その後承和年間（834～847）に僧円俊が再興」とある。寛永20年（1643）寛永寺の天海僧正と高崎城主安藤右京進重長の尽力により、寺を再建した。明治維新の後、比叡山延暦寺の末寺に復した（寺伝より）。		
文化財指定	柳沢寺縁起二巻（村重文 昭和46年5月）		

位置・配置（図33-1、写33-1）

本寺院は櫛名山の裾野、村の中央を通る県道安中渋川線を北に向かい、山子田の交差点を左折、300m程進むと入口の看板がある。右折すると不動尊の祠があり、左手が脇参道となり境内に入る。広い駐車場の北に2層丹塗りの仁王門がある。これを潜り石段を登ると、右手に鐘楼を配し、正面に本堂がある。仁王門を左に進むと新造の五重塔、さらに進むと赤門、通用門がある。通用門左手に阿弥陀堂、その背後に位牌堂が建つ。通用門をくぐると正面に大玄関と客殿があり、書院に繋がる。大玄関脇から庫裏が続く。境内は北に墓地、南に貯水池がある。上州観音霊場33ヶ所の第25番札所、上州七福神・毘沙門尊天靈場であり、東国花の寺百ヶ寺でもある本寺は、春には桜色、秋には紅く染まり、名刹と呼ばれるに相応しい寺院である。



写33-1 構内全景

由来および沿革

当寺の起源は『神道集』の「上野国桃井郷上村八ヶ権現事」に記載されるものと、天文2年（1531）に書かれた『船尾山縁起』の千葉常将の妻の再建の話が伝えられている。ただ、延宝4年（1678）に造られた梵鐘の銘文に、「推古天皇（593～628）の御代、上野国司高光中将の建立、宝亀年間（770～780）に焼

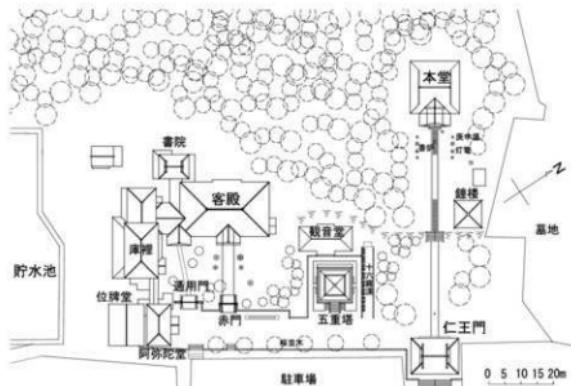


図33-1 配置図

失し、変徵したが、承和年間(834～847)に僧円俊が再興した」が刻まれている。大寺院ゆえ諸説あり確定していない。中世、延暦寺の末寺とし学僧も多く出現したが、戦国時代戦場となり總ての堂宇を消失した。寛永20年(1643)寛永寺の天海僧正と高崎城主安藤右京進長重の尽力により、朱印地30石を賜り、寺を再建した。このことは古書(書簡)が残っている。明治維新の後、江戸寛永寺の末寺から比叡山延

暦寺の末寺に復した。村内に檀家も多く、宇羅盆会の縁日は売り店も並び盛況で、地域の人々に敬愛されている寺院である。

本堂 (図33-2、表33-2、写33-2～33-7)

建物の規模は正面3間、側面4間、入母屋造、正面千鳥破風付、1間の向拝、軒唐破風付とする。東向きの本堂の屋根は、大正5年(1916)茅葺からカ

表33-2 本堂

建造年代／根据	享保6年(1721)/ 棟札	構造・形式	正面3間(9.39m)、側面4間(10.37m)、入母屋造、平入、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、銅板葺
工 匠	[大工]不明 [彫工]江戸両国殿町参丁め 宮物大工 小沢五右衛門/ 彫刻欄間に裏墨書き	基 础	[外周]置石基礎
軸 部	[身舎]丸柱、内法長押、頭貫 [向拝]角柱、 水引虹梁、海老虹梁、手扶1組	組 物	[向拝]連三斗、彫刻木鼻 [外部]二手先、彫刻尾垂木、拳鼻 [内部]出組、拳鼻(来迎柱・内陣)出組三斗、拳鼻、拳木鼻
中 備	[身舎外部]彫刻幕股 [身舎内部](外陣)虹梁 上化粧大斗束	軒	[向拝]打越二軒繁垂木 [身舎]二軒繁垂木
妻 鮒	[妻壁]二重虹梁大斗束、母屋受出三斗、妻股 [破風]猪目懸魚	柱間装飾	[正面]彫刻棟唐戸、郡格子、無双連戸窓 [側背面]棟唐戸、板壁
幕・高欄・船障子	四方切目縁、擬宝珠高欄、登高欄	床	拭板
天 井	[内外陣]格天井 [須弥壇裏]竿縁天井	須弥壇	須弥壇(禅宗様)、厨子
塗 装	朱塗(来迎柱)、組物、梁、黒塗(天井の格縁)、 極彩色塗(彫刻・欄間)	飾 金 物 等	正面棟唐戸金物
繪 画	天井画(梵字)	材 質	檜、杉
彫 刻	[向拝]木鼻(獅子、狛)、繁虹梁(梅唐草)、同上彫刻(扉)、海老虹梁(唐草絵様)、手扶(菊丸彫)、妻束(丸)、 妻魚(菊)、妻二重虹梁(唐草絵様) [身舎外部]幕股(梅・鳳凰、松・鷹、小鳥他)、板支輪(菊水)、尾垂木(蟹、 刻形)、棟唐戸(兔・月、地紋彫) [身舎内部]外陣虹梁(唐草絵様)、内外陣境欄間(中央龍・両脇天女) [厨子]木鼻(獅子、象)、彫刻尾垂木(龍、狛)、懸魚(葵・満)		



写33-2 正面及び左側面



写33-3 向拝正面



写33-4 海老虹梁、手扶



写33-5 内部外陣



写33-6 内陣・外陣境彫刻欄間



写33-7 須弥壇

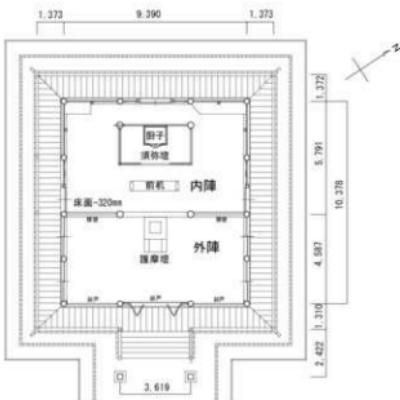


図33-2 平面図(本堂)

ラー鉄板葺、昭和55年(1980)に銅板葺きに改修した。基礎は切石基壇上に置石基礎を回す。向拝と身舎の組物、垂木などは朱塗り、彫刻木鼻、各部彫刻、海老虹梁、手挾は極彩色の造構残す華やかな建物である。向拝の唐破風妻壁の東跨端は鬼の彫刻であるのも特長である。身舎は丸柱で四方に縁を回し、二手先の組物、壇と八双金具模様の刻線彫の尾垂木、幕殿(一部欠損)、彫刻版支輪が置かれている。正面の唐戸には兎や月の彫刻も付いている。内部は外陣と内陣の2室で、内陣床が外陣より32cm低く造られているのは、県内でも珍しい。内外陣境に彫刻欄間があり、須弥壇上中央に江戸時代後期造

と視られる、極彩色の彫刻と絵画で飾られた厨子がある。両脇には何体か欠損した12神像が置かれている。天井は梵字画を配した格天井となっている。

本堂建築に関わる記録はなく、寺伝で享保2年(1717)第28世住職貞順の代とされていたが、調査により「享保6辛丑年(1721)正月吉祥日」と書かれた棟札を確認、虹梁の唐草絵様の渦と若葉から、同棟札の年造の建物と判断する。大工等の記録はないが、彫工は、内外陣境の彫刻裏の墨書「江戸两国米沢町虎立め ほり物大工 小沢五右衛門」を確認した。小沢五右衛門常信(1692~1760)は江戸彫りの祖であり、妻沼聖天宮奥殿(延享元年(1744))や妙義神社拝殿(宝暦6年(1756))に作品を残している。小沢家の門人には、信州・東海で活躍した立川流の祖、立川和四郎がいる。小沢五右衛門の作品は県内でも数少く、朱印寺の威光をもがたる。向拝は水引虹梁表面周りの装飾化などが進んでいるが、向拝裏の唐草絵様が室内繋虹梁と同様なので、身舎と同時期造と判断する。当寺院は宝暦、嘉永、慶應、大正、昭和と改修されているが、特に築造当初の遺構を多く残す建物である。

仁王門 (図33-3、表33-3、写33-8~33-13)

東向きの門は正面3間側面2間 12脚2層、入母屋造瓦葺、鬼瓦に代わり1対の鰐を置く。丸柱は各層で組まれている。下層柱脚は石端建、地覆を回す。正背面は腰貫上、内法貫に代り繋虹梁を配する。中央虹梁は彫刻持送(渦の籠彫)がある。両脇と中央通り脇壁には頭貫との間に板彫刻(菊水)が

表33-3 仁王門

建造年代／根据	寛延3年(1750)／棟札	構造・形式	3間1戸櫻門(8.38m)、側面2間(4.71m)、入母屋造、平入、瓦葺(1対の鰐)
工 匠	[大工] 棟梁 阿佐美幸助 門弟 峯岸武兵衛 他3名 [彫工] 花輪邑 新井孫四良 弟子福田銀八／棟札	基 础	切石
軸 部	丸柱、頭貫	組 物	[下層] 繋虹梁、木鼻、三手先[上層] 木鼻、三手先、尾垂木
中 備	[下層] 彫刻 [上層] なし	軒	二軒垂木
妻 飾	[妻壁] 虹梁大瓶束、母屋受出三斗、幕殿 [破風] 彫刻付猪目懸魚	柱 間 装 置	[下層] (正背面) なし (側面) 板壁 [上層] (正面) 桟唐戸、火塔連寺窓 (側面) 板壁 (背面) [側面] 板壁
縁・高欄・船椅子	四方切目縁、高欄	床	[下層] 切石 [上層] 拭板
天 井	[下層] 鏡板張格天井 [上層] 不明	須弥壇・屏子・宮殿	不明
塗 装	[本体] 丹塗 [彫刻] 極彩色塗	飾 金 物 等	正面桟唐戸金物
絵 画	不明	材 質	檜
彫 刻	[下層] 木鼻(獅子)、繋虹梁(波唐草)、刻線彫(菊水)、同上彫刻(菊水)、板支輪(龍・波) [上層] 木鼻(獅子)、尾垂木(蟹)、八双金物風刻線彫、妻壁虹梁(唐草絵様)、懸魚(菊水)		



写真33-8 正面



写真33-9 側面(北面)



写真33-10 正面組物



写真33-11 内部組物



写真33-12 尾垂木



写真33-13 下層天井

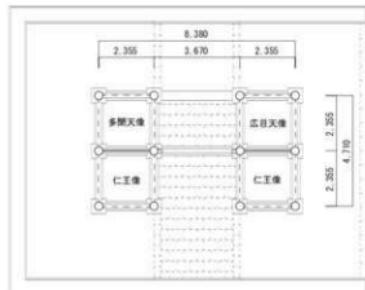


図33-3 平面図(仁王門) 下層

ある。本柱通中央の繫虹梁は、波型唐草絵様と刻線彫で飾られ、裏面は刻線彫に家紋を置いている。両側面は板壁であり、柱頭は頭貫を通し、四方に三手先、木鼻を置き、上層の縁を支える。中央柱間の中庸は三手先である。間は二段の小斗詰組、最上に彫刻版支輪を配する。内部天井は出組上に鏡板張格天井とする。上層は丸柱を四方共、下層より2尺内側に置く。身舎四方に切目縁を回し、組高欄を回す。柱間は正面中央に、4枚引きの棟唐戸、上に化粧虹梁、両脇に火灯窓、北側面に横繁桟板戸の入口を設ける。その他は板壁とし、内法長押を回す。柱頭に頭貫を回し、四方に木鼻（獅子）、三手先、彫刻尾垂木（息と八双金具風の刻線彫）を配する。中庸にも三手先を1又は2ヶ所置く。組物間は三段の小斗詰組、格子天井に小斗、蛇腹支輪を配する。軒は二

軒繁垂木とする。下層の正面両脇に阿吽の仁王像2体、裏の両脇に天目天と多門天の像2体を置く。

築造は棟札（村史）により、寛延3年（1750）3月である。大工棟梁は同村新井の阿佐美幸助、門弟4名、彫工は花輪の新井孫四郎である。阿佐美幸助は初代阿佐美出羽光命の父と言う説もある。新井孫四郎は高松又八郎の弟子で、成田山新勝寺の鎮守堂を造っている。仁王門は築造以来何度かの補修の後、大正5年（1916）に屋根を茅葺から瓦葺、昭和54～60年（1979～1980）は屋根修理と丹塗替の大改修を行っているが、壮大な規模と華麗な細工は当時と変わりなく、当寺院の顔となる建物である。

客殿（図33-4、表33-4、写33-14～33-19）

当建物は正面24.56m、側面15.08mの寄棟造、銅板葺で、唐破風向拝を1間付ける。屋根は、大正5年の改修で茅葺から瓦葺、昭和54～60年の改修時に銅板葺きとなった。軒は向拝を打越ニ軒疊垂木、他を一軒疊垂木とする。向拝は地紋彫と柱脚金物付角柱、組物は水引虹梁上に幕股や彫刻が無く、唐破風妻に懸魚はなく後設の金物が付く。寺宇は正面に切縁を設ける。外部角柱には地長押、内法長押を回し、舟肘木（溝付）置く。内部は六間取で、前方に廊下、奥中央に外陣、左に広間、右に毘沙門天堂場の18帖間がある。森田梅子の描いた杉戸画にちなみ、中央は孔雀の間、左は鶴の間とも呼ぶ。正面奥は内陣、左に奥の間、右に不動堂を配置する。内部

外周柱上に舟肘木を置く。廊下と外陣境中央には虹梁を配し、上に彫刻欄間を置く。両脇は簷欄間になっている。内外陣境中2本は丸柱で、金襴巻が残っている。黒漆塗の繫虹梁上に彫刻、黒漆塗頭貫上は出三斗と拳鼻、持送、中央にも出三斗を置き、中庸に彫刻幕股を置く。いずれの組物も横彩色に塗られている。内陣の来迎柱も丸柱で、金襴巻の遺構を残す。中央は変形した虹梁に渦と鳳凰が刻まれている。仏間両脇にも松と孔雀の彫刻がある。柱頭は

一手先三斗、拳鼻、持送を置き、中庸に彫刻幕股を置く。これらも横彩色に塗られている。天井は6室とともに鏡板張り格天井となっている。

殿築造に関わる記録はない。寺院では貞享3年(1686)第25世住職亮海の代とされて、寺院内最古の建物と伝わる。内外陣境の彫刻裏には寄贈者名と「嘉永五壬子年(1852)十二月」「三十六世豪賢代」と朱刻されている。同じく外陣と廊下境の簷欄間に前机扉にも同様な記載がある。外陣や広間を飾る鳳凰

表33-4 客殿

建造年代／根拠	[身舎]17世紀後期／建築様式 [大玄関・向拝]19世紀中期／建築様式	構造・形式	正面24.56m、側面8.0間(15.08m)、寄棟造、平入、向拝1.5間軒唐破風付、銅板葺
工 匠	[大工]不明	基 础	切石基礎 土台
軸 部	[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾1組 [大玄関]方柱、水引虹梁 [身舎]丸柱、内法長押、頭貫	組 物	[向拝]連三斗 [大玄関]出三斗 [外部] (正面)唐草付舟肘木 (側背面)舟肘木 [内部] (外周)舟肘木 (内外陣境)出組 (来迎柱)出組三斗
中 備	[身舎外部]中央入口上舟肘木と東 [身舎内部] (内外陣境)出組、幕股 (来迎柱周)彫刻幕股	軒	[向拝]打越二軒疊垂木 [身舎]一軒疊垂木
妻 飾	[向拝]虹梁束、束、桁隠 [大玄関]大瓶束、桁隠、彫刻懸魚	柱 間 裝 置	[正面]硝子戸、横繁桟戸 [側背面]塗壁
縁・高欄・脇障子	正面濡れ縁	床	[内陣、不動堂]拭板 [その他]畳敷
天 井	[内外陣、広間、不動堂、奥の間]鏡板張格天井 [物置、廊下]竿縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇 (禅宗様)
塗 装	素木、極彩色塗 (彫刻、欄間、内部組物)	飾 金 物 等	向拝柱根巻金物
繪 画	板戸 (詩人・松、鳳凰・牡丹、鶴、梅)	材 質	檜、杉
彫 刻	[向拝]柱 (刻線影)、木鼻 (獅子、猿)、繫虹梁 (梅唐草)、海老虹梁 (唐草絵様)、手挾 (松・小鳥籠形)、桁隠 (鶴) [大玄関]水引虹梁 (唐草絵様)、虹梁上彫刻 (波・亀)、懸魚 (鳳凰)、桁隠 (雲) [身舎内部]虹梁 (唐草絵様)、廊下境欄間 (松・鶴)、内外陣境欄間 (中央龍、両脇牡丹・獅子)、同幕股 (鷺鳶、沢鶴・渦、菊・梅・鶴) [来迎柱]彫刻 (中央鳳凰、両脇松・鳳凰)、幕股 (菊・りす・葡萄) [須弥壇]正面 (蓬・渦)		



写33-14 前面



写33-15 向拝正面



写33-16 鶴の間



写33-17 外陣



写33-18 内陣・外陣境彫刻欄間



写33-19 須弥壇

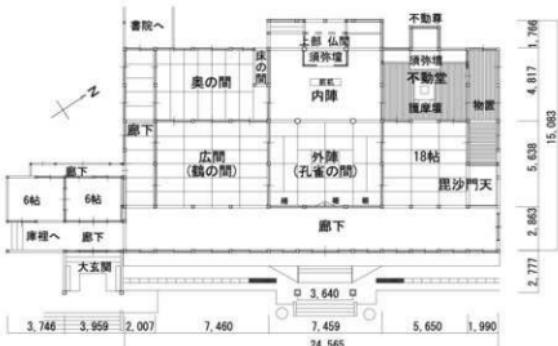


图33-4 平面图(客殿)

や鶴の杉戸には「嘉永六年(1853)十壹月」と「(森田)梅子藤原重謙(1811~1871)造画」が確認出来る。以上より嘉永5~6年(1852~1853)に大きな改修が行われている。なお杉戸画師梅子は当寺を菩提寺とする上野田の素封家「森田家」の当主であり、絵画は狩野了承の門下である。虹梁の唐草絵様の巻や内外陣境柱と来迎柱に残る金襴巻などから、寺宇は17世紀後期に造られたと判断する。向拝は水引虹梁の唐草絵様の違いから、後設であり、内部改修と同時期と考えられる。本建物は「本堂」と称されたこともあり、屋根の重厚さと飾りを抑えた趣深い建物である。

まとめ

柳沢寺は境内地2万m²と広大で、多くの建造物や石造物を配し、五重塔などを有する大伽藍の大寺である。今回、一部の建物を調査することができ、多

くの資料を確認出来たが、境内には享保時代の鐘楼、江戸後期に築造と視られる山王社社殿、仁王門より後の築造で、大工が阿佐美氏と伝わる赤門、通用門など、未調査の建造物が多くある。今後の調査で新たな歴史を解明できることを期待したい古刹である。

(見礎博子)

【参考文献】

- 『榛東村誌』榛東村 昭和63年
『榛東村の文化財』榛東村教育委員会 平成元年
『群馬の名刹 天台宗船尾山等覚院柳沢寺』柳沢寺 昭和58年
『上野国郡村誌 6 群馬郡（3）』群馬県文化事業振興会 昭和56年
『上野国寺院明細帳 2 群馬郡』群馬県文化事業振興会 平成7年
『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会 昭和53年

34 東光寺〔とうこうじ〕

表34-1

寺院名	神薬師山醫王院東光寺	所在地	北群馬郡棟東村長岡1247-1
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 東光寺
主本尊	阿彌陀如來、藥師如來	仏事	薬師如來縁日護摩供(10/7)
創立・沿革	文永元年甲子(1264)直覺法印が開建。元禄16年(1703)同郡山子田柳沢寺末寺に改められる。境内に薬師堂があり、本尊は薬師如來。薬師堂は治安元年(1021)平安時代後期に東光寺の住職良祐和尚が創建したと伝わる(「棟東村誌」)。		
文化財指定	東光寺薬師堂の厨子(村重文 昭和46年5月)		

位置・配置(図34-1、写34-1)

東光寺は北群馬郡棟東村の長岡に位置する天台宗寺院である。境内の東・北面は道路に接し、南は堂ノ入沢川、西に墓地がある。東道路より参道入口を進むと正面に長屋門がある。階段を上り長屋門をくぐると右手に改修塔納者名碑があり、正面に本堂が建つ。本堂より少し離れた左手に東向きに建つ薬師堂、本堂の北に庫裏がある。薬師堂の南に石造が並び、本堂と薬師堂の間に記念碑が立っている。本堂より西側一段上がった場所に墓地があり、墓地のさらに西側に歴代住職の墓が整備されている。

由来および沿革

東光寺の薬師堂では毎年10月7日の薬師如來縁日前日に宵祭りとして厨子が開かれ、五穀豊穣、諸病平癒の祈願を込めて護摩法要が行われる。薬師様の縁日は8日であるが、宵祭りが賑やかだったので7日午後に行う行事が残ったと伝わる。

本堂は間口7間、側面5間、入母屋造鉄板葺(当初茅葺)、平入、向拝1間が付く。外部組物は舟肘木、向拝は後補である。内部は6間取りで、組物は平三斗、長押上部は壁である。外陣と内陣境に欄間は入っていないが、欄間があったと思われる溝が残る。内陣の棊股は彫刻ではなく、紙に描かれている。須弥壇(禪宗様)に本尊である阿彌陀如來を安置する。本堂の小屋裏に2枚の改修棟札が確認できた。棟札より「南無本尊阿彌陀如來奉屋根改造本堂一字奥行五間間口七間並向拝成就 起工 大正11年(1922)8月1日、竣工 大正11年12月10日、大工棟梁 新瀉懸三嶋郡西越村字稲川産遠□□平 木挽職 群馬懸群馬郡明治村字上野田 清□□次」、「奉本堂屋根床下改修一字為天下泰平檀越施主他平等現当安樂也 大工 株式会社溝口 安藤建築 棟東工業 竣工 平成26年(2014)6月10日」とある。また寄付者芳名より、昭和45年(1970)に本堂屋根葺替工事を行っている。本堂の建造年代は唐草と若葉が離れていて、一体化しているのが混在することから、18世紀後期頃と推定する。庫裏は記念碑より平成9年(1997)8月新築竣工している。長屋門は間口10間、側面4間、寄棟造鉄板葺(当初茅葺)。中央が門になり、両側が部屋となっている。外周部に土

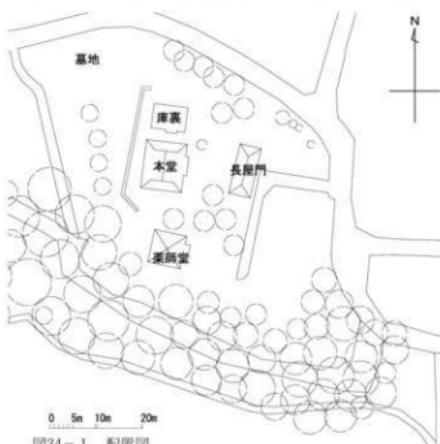


図34-1 配置図



写34-1 境内全景

台、内部は自然石基礎の上に東立てとする。入口は本堂側（西側）に開き、北側の部屋は土間、南側の部屋は一部床となっている。壁は土壁、下地は竹小舞、床下地にも竹が使用されている。

薬師堂（図34-2、表34-2、写34-2～34-7）

薬師堂は『棟東村誌』によると、宝暦6年（1756）に住職実榮法印が壇信徒の寄附を募り再建したという。今回の調査で小屋裏に棟札が確認できた。建造年代は棟札より、宝暦9年（1759）である。「奉新靈堂造立四間半四面一字成就所別當寺廿三世法印榮純」とあることから、薬師堂の棟札とみて間違いな

いであろう。「入佛供養導師同國同郡桃井庄山子田邑柳澤寺三十世柳沢寺堅者法印法山乘海 謹書」ともあり、柳沢寺との関係も深いことがわかる。大工棟梁の阿佐美幸助光武は柳沢寺の山門を手掛けている。また寄付者芳名より、平成24年（2012）に引戸修理を行っている。

薬師堂は正面3間（6.16m）、側面3間（6.16m）、方形造瓦葺屋根で向拝1間が付く。基壇は切石で石段3段と木階3段を設け、四方に切目縁を廻す。地域の寺社と比較すると木階の蹴上げが高い。正面右（北側中央）にも木階があり、北側（本堂側）からも薬師堂に入りしていたと伝わる。向拝

表34-2 薬師堂

建造年代／根拠	宝暦9年（1759）／棟札	構造・形式	正面3間（6.16m）、側面3間（6.16m）、方形造、向拝1間、瓦葺（当初茅葺）
工 匠	[大工] 大工棟梁 新井邑 阿佐美幸助光武 同苗 八良治光命 井門弟中 助力檀那當村 中十ヶ村	基 础	基壇、自然石基礎
軸 部	[身舎]丸柱、貫、長押 [向拝]角柱、水引虹梁、 繫虹梁、手挾	組 物	[身舎外部]三手先、尾垂木 [身舎内部]出三斗 [向拝]拳鼻付出組、持送
中 備	[身舎]臺板、嵌込彫刻。斗	軒 柱 間 装 置	二軒垂木、彫刻板支輪
妻 飾	なし	床	舞良戸、蔀戸、縦格子窓、落込板壁
緑・高欄・船椅子	四方切目縁、擬宝珠高欄	拭板	
天 井	[外陣]格天井 [内陣]格天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇（禅宗様）、厨子
塗 装	素木、極彩色（彫刻）、朱塗、黒塗、金欄巻	飾 金 物 等	垂木小口
繪 画	[外陣]天井画 [内陣]天井画	材 質	檜、杉
彫 刻	[身舎外部]木鼻（獅子頭、猿）、彫刻板支輪（波）、隅尾垂木（靈獸） [身舎内部]出三斗、間斗束、拳鼻 [向拝] 繫虹梁（唐草絵様）、手挾（唐草絵様）		



写34-2 全景



写34-3 向拝側面



写34-4 須弥壇



写34-5 外陣天井画



写34-6 棚間彫刻



写34-7 厨子

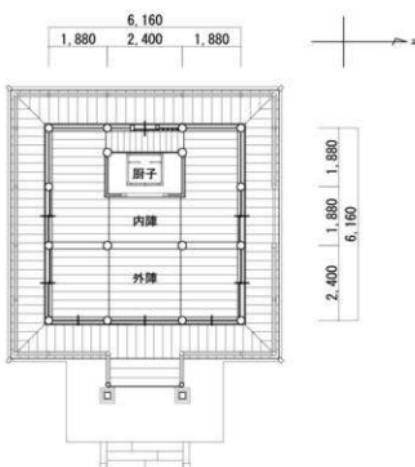


図34-2 平面図(薬師堂)

の木鼻は獅子と狛、組物は拳鼻付出組で側面の虹梁は水平である。身舎の組物は三手先で朱塗、尾垂木、拳鼻が付く。小天井と支輪に彫刻が施されている豪華な造りである。中備に斗を多用している。正面の極彩色の彫刻（龍・波）は後補である。上部に彫刻や彩色が施されているが壁や下部には装飾がない。内部は1室で手前1間が外陣、奥2間が内陣とし、内陣外陣ともに格天井で天井画がある。須弥壇の上部に厨子、その中に薬師如来を安置する。須弥壇は禪宗様で下部に波模様の彫刻が施されている。上部より下部が小さくなっているのが特徴で下部に

彫刻を施す。内陣と外陣境に欄間彫刻があり、柱は金襴巻を施す。

厨子は正面1間、側面1間、入母屋造板葺で唐破風が付く。柱は丸柱で組物は出組、軒は二軒重垂木とする。中備は正面中央に幕股を配する。木鼻は獅子と象であるが一部欠損している。塗装の剥離など傷みが激しい。作者は不明であるが、新造年代は17世紀末期～18世紀前期頃と推定する。薬師堂は内外部の彫刻、天井画、須弥壇、厨子は素晴らしいが破損が著しいため、保存のための修理工事が必要である。

まとめ

薬師堂の彫刻の工匠や天井画の作者は、今回の調査では確認できなかった。小屋裏に建造年代を示す宝暦9年(1759)の棟札があった。庫裏は平成9年に建替えられているが、本堂、長屋門は修理を行なながらも古い様式を残す建物である。薬師堂は中備に斗が並ぶなど1800年以降にみられる新しい様式を使っている。大工棟梁である阿佐美幸助は、一門を率いて柳沢寺の山門を建立している。その時の彫物師は勢多郡東村花輪の星野又八の弟子新井孫四郎であった。薬師堂の彫物師も新井孫四郎である可能性があるが確認できていない。今後の調査を待ちたい。

(森田万己子)

【参考文献】

『棟東村誌』 棟東村 昭和63年

『棟東村の文化財』 群馬県棟東村教育委員会 平成元年

『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』 群馬県教育委員会
昭和54年

36 (下野田) 華藏寺 ((しものだ)けぞうじ)

表36-1

寺院名	法雲山華藏寺	所在地	北群馬郡吉岡町下野田990-1
宗派	本山修験宗	所有者・管理者	宗教法人 華藏寺
主本尊	木彫明王、九曜童本地仏	仏事	節分会(厄除け星祭り、2/3)、不動様(毎月28日)
創立・沿革	華藏寺の開創は、藤原性狩野茂光15世の後裔狩野忠永が修験となり、元山と号し上野国勢多郡佃の里にあったが、永正16年(1519)車都桃井郷野田の里(吉岡町下野田)に古社稻荷社を再建し、別当寺を創建した。延宝年間以降(1673~)、国分村本山修験大藏坊に属してその同行となつたが、寛延元年(1748)7世亮親の代に大藏坊の推進により聖護院宮の直院となり、院室住心院の令下に属した。この時、山号稻荷山を改めて法雲山とした(『世系考』)。		
文化財指定	華藏寺の石像弁財天(町重文 平成13年10月)、華藏寺獅子囲書庫蔵書(町重文 平成12年11月)、華藏寺八世亮衍の墓(町史跡 平成12年11月)		

位置・配置 (図36-1、写36-1)

華藏寺は北群馬郡吉岡町の下野田に位置する本山修験宗の寺院である。県道高崎渋川線より東、吉岡町役場より北西の野田神社隣にある。南面、西面を道路、北面、東面を川に接する。子育て地蔵尊付近の変則丁字路を西に進むと境内に入る。南に石祠が祀られている弁天池があり、池の手前を北へ進むと

山門がある。山門手前の左手に馬頭観音、山門をくぐると本堂(護摩堂)、その北に客殿(如来堂)を配し、正面に会堂と庫裏がある。東に獅子囲書庫、書庫と本堂付近には樹齢500年と伝わる楠木がある。境内には土壇が廻る。弁天池の西に無幻道人書の百庚申が立つ。

由来および沿革

『世系考』によると華藏寺の開祖である狩野忠永は、藤原氏南家の藤原維景の末裔である。永正16年(1519)忠永は野田村に稻荷社を祀り稻荷山華藏寺を開山した。江戸初期には、出羽三山の東密(真言密教)系の湯殿山修験と台密(天台密教)の羽黒山修験の両派にも所属していた。寛延元年(1748)聖護院宮直院となり稻荷山華藏寺を法雲山華藏寺と改めた。

本堂(護摩堂)の棟札は確認できなかつたが、5枚の棟札写真や資料を残している。棟札の表に「維持宝曆第四甲戌歳 當院七世中興 新造立護摩堂一宇為業障消除也」、裏に「棟梁 當郡富岡邑 仁兵衛脇大工 矢原村 孫四郎 當所 南雲市郎右衛門経兵」とある。他に大正11年(1922)護摩堂修繕、昭和60年(1985)改修銅板葺屋根替、平成11年(1998)床下取替修繕、平成25年(2013)建物上半分全改修をしている。本堂(護摩堂)の棟札の他に11枚の祈願札、馬頭観音の棟札も残っている。本堂の建造年代は棟札より、宝曆4年(1754)である。上部や床は改修されているが、組物や虹梁に江戸時代の様式を示す絵様があることから棟札の年代で間違いないであろう。

本堂は正面3間、側面3間、方形造銅板葺で三方に切目縁を廻す。外部組物は船肘木、拳鼻が付く。自然石基礎で東立てとする。内部組物は出組、須弥壇はなく、不動明王を安置する室は後補である。



図36-1 配置図



写36-1 境内全景

山門は客殿(如来堂)と同じ頃の建築であると伝わる。「吉岡村誌」によると、明治末年、茅葺から板葺に、大正12年(1924)亜鉛板葺とし、昭和51年(1976)更に銅板葺に改められた。庫裏は昭和32年(1955)、獅子園書庫は昭和31年(1956)に建替えられている。

観音堂は安政5年(1858)武州上岡の馬頭観音を勧請したもので、初めは見城にあった。当寺に残る棟札より、建造年代は慶応2年(1866)2月であり、移築年代は大正2年(1913)4月である。移築時の棟梁は森田安五郎。森田安五郎は吉岡町の上八幡神社や下八幡宮の修繕も行っている。

客殿(图36-2、表36-2、写36-2~36-7)

客殿の建造年代は床の間の奥行が狭く、柱間2間の内法寸法が12.08尺であることから、18世紀末期

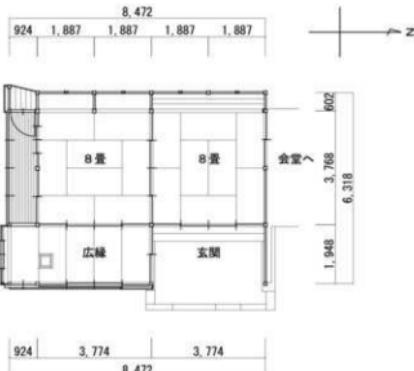


图36-2 平面图(客殿)

表36-2 客殿

建造年代／根拠	18世紀末期～19世紀初期／建築様式	構造・形式	正面8.47m、側面6.31m、寄棟造亜鉛板葺(当初茅葺)、東に玄関付
工 匠	不明	基 础	自然石
軸 部	[外部]角柱 [内部]二重長押	組 物	なし
中 備	[身舎]なし	軒	疊垂木、せがい造
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	桟唐戸、障子、漆喰壁
縁・高欄・船縁	なし	床	畳敷、板張
天 井	[内部]竿縁天井	須弥壇、扇子、宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	天井画 狩野探雲、壁画(波)	材 質	杉、松
彫 刻	なし		



写36-2 全景



写36-3 背面



写36-4 側面



写36-5 内部



写36-6 広縁



写36-7 二重長押

～19世紀初期と推定する。嘉永6年(1853)に大修理が行われている。

正面を東に開く客殿（如来堂）である。正面8.43m、側面6.60mの寄棟造垂鉛鉄板葺（当初茅葺）。玄間に屋根が付き、上部に木連格子がある。自然石基礎で東立てとする。背面の土台は後補である。小屋裏には藻が残る。内部は2室で玄間を入ると正面に8畳の和室、その奥に下段が地袋の棚が付く。8畳の和室の左手に8畳の和室があり、床の間と天袋付奥行500mmの床の間、付書院が付く。和室にはL字に広縁が廻り、南に向いて丸い飾窓がある。広縁には炉が設置されている。広縁はせり出して造られており、現在水は入っていないが広縁の周囲に池がある。天井画の作者は狩野派の画家である狩野探雲と伝わる。華藏寺の狩野亮観の子として生まれた書家・角田無幻(1742～1809)は、津久田村（現渋川市）の林徳寺角田広觀の養子となり、角田性となる。儒学や書道を学び京都で活躍している。（川島）甲波宿禰神社にある社名額と旧富士見村小暮にある赤城神社一の鳥居に掲げられている「赤城山」の扁額も無幻書である。

まとめ

華藏寺は書家・角田無幻を輩出しており、修驗宗として重要な役割を担っていた。明治5年(1872)の修驗道廃止令により多くの寺が廃寺となったが、昭和21年(1946)修驗宗が再興され華藏寺も属した。吉岡町では二戸正一氏が無幻道人書の石碑などを研究、修驗宗の歴史を広めている。当寺の客殿は内部隔壁上部が二重長押となっており、二重長押の間は紙に波絵が描かれている。広縁に炉があり、池にせり出しているのも特徴である。また庭園も手入れされており、素晴らしい。小規模であるが魅力的な要素の詰まった建物であり、修驗宗は宗教として貴重である。今後の調査に期待したい。

(森田万己子)

【参考文献】

- 『吉岡村誌』吉岡村教育委員会 昭和55年
- 『勢多郡誌』勢多郡誌編纂委員会 昭和33年
- 『群馬県史 通史編6 近世3』群馬県 平成4年
- 『世系考』二階堂俊良 平成6年
- 『獅子園書庫典籍並古文書目録』編著者 小澤賢二、監修 法雲山華藏寺 平成11年
- 『本山修驗宗・法雲山華藏寺 欽浦・無幻両人と妹（柳）』吉岡町・二戸正一 令和2年
- 『北群馬・渋川の歴史』北群馬渋川の歴史編纂委員会 昭和46年
- 『赤城村の文化財』写真集『赤城村の文化財』発行委員会 昭和55年

37 (漆原)長松寺 ((うるしばら)ちょうしょうじ)

表37-1

寺院名	威徳山常樂院良松寺	所在地	北群馬郡吉岡町漆原1284
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 長松寺
主本尊	阿彌陀如来(三尊)	仏事	初詣(1/1)、ざる観音縁日(1/14)、涅槃会(2/15)、左剣不動尊縁日(2/28)、春秋彼岸会、花まつり(4/8)、岩船地蔵尊縁日(7/15)、お盆・大施餓鬼会(8/13)、除夜の鐘(12/31)
創立・沿革	天台宗總本山、比叡山延暦寺の直末の古刹である。開山は遠く、後醍醐天皇の元享年間(1321~24)と伝えられ、僧舜海師によって漆原薬石の地に建立開基されたが、利根川洪水のため、その地は河川に変り、やむなく元屋敷に移転した。不運にも、次には火災に遭い、仏塔仏像を始め、什器、財宝、古記録を灰じんに帰してしまった。第29世法印謙盛及び第30世謙英法印が再建を図り享保19年(1734)12月、ようやく竣工をみるに至った(『吉岡村誌』)。		
文化財指定	なし		

位置・配置 (図37-1、写37-1)

長松寺は北群馬郡吉岡町の漆原に位置する天台宗の寺院である。村道1号線を駒寄小学校南側から東



図37-1 配置図



写37-1 境内全景

に向かい、踏切を渡った右手前方にある。南に仁王像が立ち、山門をくぐると境内に入る。左手に不動堂、その北に二尊堂、正面に本堂がある。本堂の右手に庫裏、東に檀信徒研修館を配する。二尊堂の西側小道を挟んで向かいが駐車場となっている。駐車場の北に石段を上ると正面に上州観音靈場33ヶ所第31番の矢落観音(通称ざる観音)、西に札所、東に鐘楼があり、その脇に初代群馬県令を務めた樹取素彦の篆額と作文の碑「宥順阿闍梨記功碑」が立つ。東下方に墓地がある。

由来および沿革

長松寺は比叡山延暦寺の直末である。開山は後醍醐天皇元享年間(1321~1324)と伝わる。僧舜海師によって坂東橋南方の薬石の地に建立されたが、利根川の氾濫で流され元屋敷に移った。その後火災に見舞われ現在の地に移った。本堂の東にある庫裏は昭和に建替えられている。境内には矢落観音があり、1月14日ざる観音縁日として露店が出て賑わう。庭園は現住職が在職30年の記念に造り替えている。

矢落観音は渋川市有馬にある神宮寺の本堂であったと伝わる。正面3間、側面3間、方形造瓦葺、唐破風、向拝1間が付く。自然石基礎で東立てとする。向拝の中備に彫刻(龍・獅子)、手挾は透形で木鼻(獅子・象)が付く。外部組物は二手先、尾垂木、彫刻板支輪。内部組物は出三斗、柱に金欄巻を施している。天井は格天井で天井画があったと伝わるが修繕されている。内部に安永2癸巳(1773)天間3月、明治41年(1908)5月、昭和41年(1966)3月の

棟札が残る。

本堂 (図37-2 表37-2 寫37-2 ≈ 37-7)

建造年代は寺伝によると享保19年(1734)である。第29世湛盛法印及び第30世湛英法印が再建し、湛英は記念碑を建てている。屋根裏に大正14年(1925)、昭和41年(1966)、昭和51年(1976)改修の棟札が確認できた。様式からみても18世紀中期で間違いないであろう。

本堂は正面17.95m、側面11.72m、寄棟造銅板葺（当初茅葺）、唐破風、向拝1間、正面に縁が付く。屋根裏には現在も茅葺が残る。壁は竹小舞下地、土壁の上に漆喰仕上とする。内部は6間取である。屋根の大きさの割に柱断面は比較的小さい。正面参拝所の両脇に廊下があり、外陣の脇に西ノ間、12畳、

表37-2 本管

建造年代／根据	18世紀中期／建築様式	構造・形式	正面17.95m、側面11.72m、寄棟造、平入、向拝1間唐破風星型、銅板葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	コンクリート
軸 部	[身舎]角柱、地長押 [向拝]角柱、虹梁	組 物	[身舎]拳鼻付組、二手先 [向拝]拳鼻付組 三斗 2段
中 備	蘿股、斗	軒	二軒繁唐木
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	[正面]アルミサッシ、漆喰壁 [側面]漆喰壁
縁・高欄・監障子	一方切目縁	床	[外陣]板張 [内陣]板張
天 井	[外陣]竿線天井 [内陣]格天井	須彌壇・扇子・宮殿 須弥壇(禪宗様)	
塗 装	素木、極彩色(欄間彫刻)	飾 金 物 等	素木小口
絵 画	[内陣]天井画	材 質	檜、杉
刻 刻	[身舎]欄間彫刻 [向拝]虹梁(絵様)		



写37-2 全景



写37-3 外障内部



写37-4 内部



37-5 外陣正面



写37-6 外陰癰間影細



写37-7 内附幕股

18畳西があり、内陣の西に西書院、東に東書院がある。東より庫裏に繋がる。西書院に十王像を安置する。外陣は疊敷で一部板張、両側面に篠欄間に入る。内陣は外陣より1段下がる。須弥壇と厨子を安置する。須弥壇は禅宗様で彫刻ではなく、一部絵様があるが簡素な造りである。長松寺建立より10年後に新造したと伝わる。厨子は彫刻も素晴らしい見事である。天井は外陣内陣とも格天井である。内部組物は出三斗、極彩色である。内陣の後面に廊下を挟んで2段下がった位牌堂がある。位牌堂は後補である。外陣と内陣境の欄間に極彩色の彫刻（迦陵頻伽）がある。花輪の彫刻師の作品に似ているが、欄間は改修で裏打ちされており、墨書きは確認できなかった。前机は彫刻（極彩色）嵌め込みで両側に地紋彫を施している。内側に享和3癸亥年（1803）9月3日の墨書きが残る。

不動堂（図37-3、表37-3、写37-8～37-10）

正面を東に向く。正面3間、側面3間、方形造鉄板葺。基礎は自然石、外部組物は船肘木とする。内部は一室とし、正面に須弥壇、厨子がある。須弥壇は間口3間とする。昭和に天井改修をしている。内部に組物はなく、護摩天井を残す。須弥壇下部は物入れだったが、現在は嵌め殺しとなっている。

表37-3 不動堂

建造年代／根拠	18世紀中期／建築様式	構造・形式	正面(3.93m)、側面(4.95m)、方形造、鉄板葺
工 匠	不明	基 礎	自然石基礎
軸 部	角柱、虹梁	組 物	舟肘木
中 備	なし	軒	一軒疎垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	【正面】アルミサッシ 【側面】漆喰壁
縁・高欄・脇障子	なし	床	板張
天 井	竿縁天井、護摩天井	須 弥 壇	須弥壇、厨子、宮殿
塗 装	素木	飾 金 物	須 弥 壇、厨子
絵 画	なし	材	垂木小口
彫 刻	舟肘木、虹梁(絵様)	質	栗



写37-8 全景



写37-9 内部



写37-10 船肘木

不動堂の建造年代は、虹梁の絵様などの建築様式から18世紀中期と推定する。

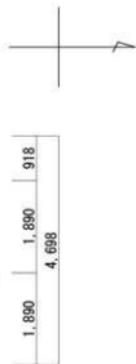
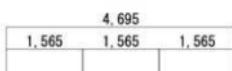


図37-3 平面図(不動堂)

1. 本調査：寺院建築

山門（図37-4、表37-4、写37-11～37-13）

正面を南に向く。四脚門、正面1間、側面1間、切妻造瓦葺、両開扉、拳鼻が付く。上部中備に彫刻があり、妻飾は笈形（彫刻）である。昭和40年（1965）に門扉を新調している。

建造年代は寺伝によると本堂と同じ頃と伝わるが、虹梁の渦と若葉が離れているなど建築様式からみても18世紀中期で間違いないであろう。

まとめ

当寺は本堂、不動堂、山門、二尊堂、矢落觀音（ざる觀音）など多くの建物が残っている。比叡山延暦寺の直寺を賜った文書や貴重な資料も残る。本堂の内陣と外陣境の欄間彫刻は見事であり、欄間彫刻は花輪の彫物師の彫刻に似ているため、関係があると考えられるが墨書き、刻銘などは今回の調査で確認できなかった。今後の調査を待ちたい。

（森田万己子）

【参考文献】

- 『吉岡村誌』吉岡村教育委員会 昭和55年
 『北群馬・渋川の歴史』北群馬渋川の歴史編纂委員会 昭和46年
 『群馬郡誌（上巻）』群馬郡教育会 昭和47年

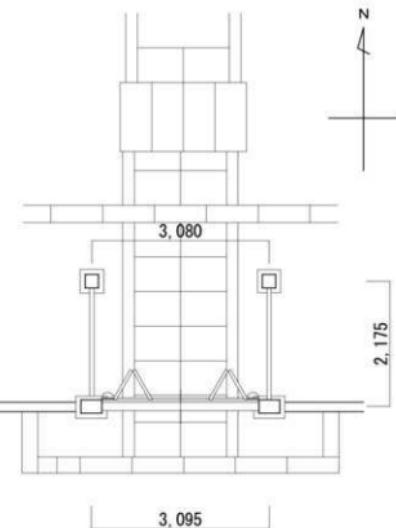


図37-4 平面図（山門）

表37-4 山門

建造年代／根据	18世紀中期／建築様式	構造・形式	1間1戸葉医門（3.09m）、側面1間（2.17m）、切妻造、平入、瓦葺
工 匠	不明	基 础	礎 自然石
軸 部	角柱	組 物	なし
中 備	なし	軒	一軒蹊垂木
妻 飾	笈型	柱 間 裝 置	桟唐戸
縁・高欄・脇障子	なし	床	コンクリート土間
天 井	野地板表	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	小口金物
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	虹梁（絵様）、笈型（絵様）、欄間彫刻（波・花）		



写37-11 全景



写37-12 上部妻側



写37-13 上部彫刻

38 (齊田)観音寺 ((さいだ)かんのんじ)

表38-1

寺院名	創立・斎田山觀音寺	所在地	佐波郡玉村町齊田435
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 天台宗
主本尊	本堂(阿弥陀如来)、觀音堂(千手觀音)	仏事	元旦、お盆
創立・沿革	茂木館主田口教親の次男後政が、永禄の初め頃(1560年代)に分家し(田口下屋敷)、後政の子俊親が寛永16年(1639)10月27日死去して子がなく茂木館主田口広忠に譲ろうとした。広忠は当時松本にいたので妻の陽光院が葬儀を行った後、屋敷内にあった觀音寺を現在のところに建立して、田口家の祈禱所としたのだという(『田口下屋敷跡』玉村町教育委員会・玉村町歴史調査会 平成12年3月)。		
文化財指定	なし		

位置・配置 (図38-1、写38-1)

玉村町の北西部に位置する。敷地東北には田口下屋敷跡が残る。境内へは南側前面道路から北へ参道が伸びる。敷地周辺には濠を巡らせた跡が残る。敷地中央東に本堂を置き、本堂南西に庫裏、同東南には觀音堂がある。参道から境内入り口手前の西に女人講の二十二夜様、東に南無阿弥陀仏と刻んだ石塔を、境内に入り東側に薬師瑠璃光如来(天保11年(1840))を置く。觀音堂の南には不動明王を祀る築山があり、その南には庚申塔が多くある。本堂北に墓地、その入り口には六地蔵がある。又境内入り口の東には黒松や赤松の樹木が多数あり、庫裏前にも多数の樹木が見られる。

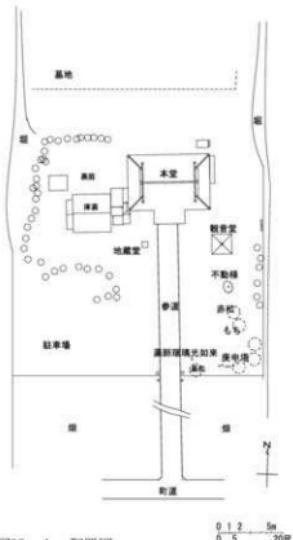


図38-1 配置図



写38-1 境内全景

由来および沿革

『田口下屋敷跡』によると、茂木館主田口教親の次男後政が、永禄の初め頃(1560年代)に分家し(田口下屋敷)、後政の子俊親が寛永16年(1639)10月27日死去して子がなく茂木館主田口広忠に譲ろうとした。広忠は当時松本にいたので妻の陽光院が葬儀を行った後、屋敷内にあった觀音寺を現在のところに建立して、田口家の祈禱所としたのだという。

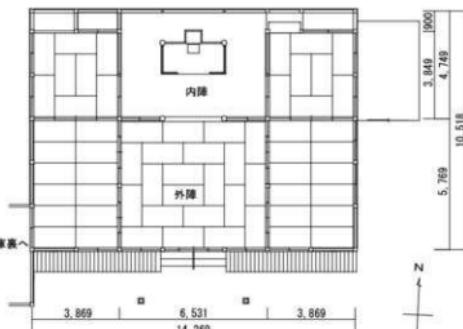


図38-2 平面図(本堂)

本堂（図38-2、表38-2、写38-2～38-7）

本建物は中規模の六間取りで入母屋造瓦葺、北面一間は下屋となっている。向拝は細部を見ると後補と思われる。屋根は昭和7年（1932）の改修で茅葺から瓦葺となった。母屋外部は四隅に舟肘木がかかる位で簡素な作りとなっている。内部を見ると内陣は来迎柱上部に金欄巻、頭貫より上に朱塗り、台輪に極彩色の模様が描かれている。内外陣境の欄間に極彩色の彫刻が嵌込まれており後補と思われるがいつ嵌込まれたかは不明である。上部組物は斜め材のある変形出組で珍しく、中備えは撥東に花肘木である。本建物には棟札が残されており建造年代は享保7年（1722）である。

7年（1722）である。木花の渦や虹梁の唐草絵様、全体的に簡素な作りとなっており建築当初の様式をよく表す建物である。

觀音堂（図38-3、表38-3、写38-8～38-10）

正面、側面共2間の小さな方形造瓦葺で、西を向いている。外部組物は平三斗、中備は正面板幕股、側面撥東となっている。内部は一室空間とし、正面奥に棚を据え上に千手觀音が置かれ、その右に不動様、前には護摩菱形がある。棚上の来迎柱は下部に礎盤、上部には金欄巻が施されている。台輪上の組物は変形出組となっており中備も変形出組である。

表38-2 本堂

建造年代／根据	享保7年（1722年）／棟札	構造・形式	正面14.18m、側面8.08m、入母屋造瓦葺平入、一間向拝（後補）
工 匠 久	[大工]西上州那波郡上福島村 中里源兵衛忠	基 础	コンクリート独立基礎（当初自然石玉石）
軸 部	[身舎外部]角柱、貫、長押 [身舎内部]角柱（外陣）、丸柱（内陣・来迎柱）、長押	組 物	[身舎外部]（四隅）舟肘木 [身舎内部]（内陣）拳鼻付組（外陣）変形出組 [向拝]肘木
中 備	[身舎内部]（来迎柱上部）板幕股、（外陣）板幕股、撥東に花肘木 [向拝]なし	軒	[身舎]三方せがい造 [向拝]一軒疊垂木
妻 飾	[身舎]東立	柱 間 装 置	[外部]アルミ引違戸、漆喰壁 [内部]簷欄間、漆喰壁、襖、格子戸
縁・高欄・脇障子	正面切目縁	床	疊（外陣）、拭板（内陣）
天 井	[外陣]竿縁 [内陣]竿縁	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇（禅宗様）、逗子（須弥壇上）、物龕
塗 裝	素木（軸部）、金欄巻（来迎柱上）、極彩色（欄間彫刻・来迎柱台輪）、朱塗（来迎柱頭貫より上、須弥壇）	飾 金 物 等	逆蓮頭（須弥壇高欄）
繪 画	なし	材 質	櫛（内部軸部）、杉（外部軸部）
彫 刻	[身舎外部]虹梁（唐草絵様）、四隅舟肘木（渦） [身舎内部]内陣木鼻（拳鼻）、須弥壇（波に兎）、外陣虹梁（唐草絵様）、外陣欄間中央（龍に波）、同左右（獅子に蓮と牡丹） [向拝]虹梁（唐草絵様）		



写38-2 外観



写38-3 外部聚意匠



写38-4 外陣



写38-5 外陣組物



写38-6 須弥壇



写38-7 内陣 金欄巻と組物

写38-3 観音堂

建造年代／根拠	正徳元年(1711年)／棟札	構造・形式	正面3間(3.65m)、側面2間(3.63m)、方形造瓦葺
工 匠	[大工]棟梁：中里口兵衛(棟札)	基 础	コンクリート基礎(当初自然石玉石)
軸 部	[身舎]角柱、貫、台輪、長押、土台なし [来迎柱]丸柱、貫、台輪	組 物	[身舎外部]隅柱上出三斗、(中柱上)拳鼻付平三斗 [来迎柱上部]拳鼻付変形出組
中 備	[身舎外部](正面)板幕敷、(側背面)撥束 [来迎柱上]変形出組	軒	一軒疊垂木
妻 飾	なし	柱 間 壁 置	[正面]半蔀戸、格子窓、舞良板 [側背面]板壁 [北面]アルミ戸
縁・高欄・脇障子	なし	床	拭板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	壇
塗 装	素木、朱塗(外部台輪より上)、金欄巻(来迎柱上部)、極彩色(来迎柱頭貫より上)	飾 金 物 等	小口金具、釘隠(六葉)
繪 画	なし	材 質	檜、杉
彫 刻	[外部]満(拳鼻)、唐草絵様(虹梁) [内部]満(拳鼻)		



写38-8 全景



写38-9 外部組物・木鼻



写38-10 内部正面

台輪から上に極彩色が施されている。これらの装飾は独特的の風があり、また出組の上に通常置かれる横架材がなく天井直付けとなっており、棚より上は後から据えられたものと考えられる。本建物にも棟札が残されており、建造年は正徳元年(1711)で玉村町最古の寺院建築である。全体的に簡素な作りで改造も少なく、建築当初の様式を残す建物として貴重である。

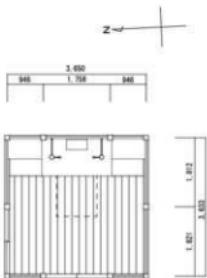


図38-3 平面図(観音堂)

まとめ

観音堂は玉村町最古の寺院建築として、また本堂は玉村町最古の本堂建築として、改修も少なく18世紀初期の建築様式をよく伝えており価値の高いものである。また本堂も観音堂に次ぐ古い寺院建築で建築当初の様式をよく表しており貴重である。内部の組物の肘木が斜めに架けられているのは大工の工夫ではないかと思われ注目すべき点である。平成30年(2018)に廃止された8月の例大祭は観音堂のご開帳、護摩炊が古くから行われていたもので地域の人々による観音様信仰がうかがえる。

(角倉ゆき枝)

【参考文献】

- 『玉村町誌 別巻III 玉村町の建造物』玉村町 平成3年
- 『田口下屋敷遺跡』玉村町教育委員会 玉村町遺跡調査会 平成12年
- 『観音寺棟札調査報告』玉村町教育委員会

41 達磨寺（だるまじ）

表41-1

寺院名	少林山達磨寺	所在地	高崎市鼻高町296
宗派	黄檗宗	所有者・管理者	宗教法人 達磨寺
主本尊	觀音菩薩北辰鎮宅靈符尊達磨大師	仏事	星祭大祈禱・大般若經六百卷の転読法要(1/7)、七草大祭だるま市(1/6、1/7)、達磨お焚き上げ供養(1/15)、花祭り(4/8)、達磨まつり(10/5)、煤払い(12月冬至前日曜)
創立・沿革	元禄10年(1697)、領主酒井雅楽頭忠拳が中国僧心越禪師の法嗣である天澈和尚を招き創建する(『高崎市史資料編14』)。		
文化財指定	洗心亭(県史跡 昭和26年10月)、達磨大師立像(市重文 昭和52年1月)		

位置・配置(図41-1、写41-1)

高崎市の市街から西に6km、観音山と親しまれる丘陵の端に位置し、通称少林山通りと呼ばれる県道49号線に面する。山の北斜面を切り開いてつくられた境内は広大で、総門は碓氷川側に面している。長



図41-1 配置図



写41-1 境内

い石段を上った鐘楼の先が水屋と放生池のある開けた中庭である。鐘楼の東には大講堂(昭和2年(1927)完成)、西には瑞雲閣(昭和50年(1975)竣工)がある。中庭には3つの石段があり、東から達磨堂(明治14年(1881)焼失、昭和61年(1986)再建)、本堂(靈符堂兼)、觀音堂へつながる。本堂裏となる境内の南側は大駐車場と古墳、西側は地域墓所がある。敷地東側には、ドイツ人建築家ブルーノ・タウトが昭和9年(1934)8月からの2年3ヶ月を過ごしたことでも知られる洗心亭、歴代墓所、稻荷大明神、薬師塚、庭園や散策路などがある。境内は比較的樹木が多く、四季を感じる豊かな自然が残されている。

由来および沿革

古来、觀音像を祀る觀音堂が中庭の放生池のところにあり、延宝8年(1680)靈夢によって訪れた一了居士が達磨大師坐禅像を彫り觀音堂にお祀りし、「達磨出現の靈地・少林山」として噂が広まった。その後、領主・酒井雅楽頭忠拳公は駿橋城(前橋城)の裏鬼門を護る寺として、徳川光圀公の力を借りて水戸から天澈和尚をよび、元禄10年(1697)少林山達磨寺(曹洞宗寿昌派)を開創したという。当初は、尊星板梓という北辰鎮宅の七十二符が刻まれた版本を本尊としていたが、後に、照山という僧が北辰鎮宅靈符尊の尊像を喜捨し、それが現在本堂に祀られている。福だるま発祥の寺として知られる当寺であるが、9代東獄和尚が考案したこの張り子のだるまは、天明の大飢饉(1782~1788)の後、飢饉に苦しむ農民救済を目的に考案されたものである。県民かるたに「縁起達磨の少林山」と詠まれ、親しまれている。明治期に同じ禅宗の黄檗宗に転派し、近年では外国人も多く訪問する寺院となっている。

本堂 (図41-2、表41-2、写41-2~41-7)

北極星を神格化した北辰鎮宅靈符尊を祀る本堂は、北を正面とし建てられ、正面7間、側面2間の外陣、その背後中央に側面3間の内陣、さらに後補の内外陣を備える。正面が幅広い形状の外陣は、本堂や祠堂前に設けた手拵・経堂の為の施設である昭堂のようにもみえる。屋根は入母屋造平入で正面に千鳥破風と唐破風がつく。内陣部分にも入母屋屋根をかけて外陣の大屋根とつなぐ。現在は銅板に葺き替えられているが、昭和41年(1966)頃までは瓦葺であった。

本堂は明治44年(1911)の建築であり、その再建記念碑には大工棟梁中島久吉および多くの寄進者名が刻まれている。明治初期からの靈符堂の建設設計画

表41-2 本堂

建造年代／根拠	明治44年(1911)／靈殿再建記念碑	構 造 ・ 形 式	正面7間(16.23m)、側面6間(11.81m)、入母屋造、平入、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、銅板葺(昭和41年(1966)頃まで瓦葺)
工 匠	[大工]大工棟梁 中島久吉	基 础	[外周部]コンクリート基礎 [内部]自然石基礎
軸 部	[身舎]土台、丸柱、長押、頭貫、台輪 [向拝]角柱、海老虹梁、手挾、水引虹梁	組 物	[外部正面]詰組 [内外陣境]詰組 [内陣内]軒
中 備	[外部正面]詰組 [内外陣境]詰組 [内陣内]軒	軒	[正面]飛燕垂木打越二軒繁垂木、板支輪 [背面]二軒繁垂木、板支輪
妻 飾	虹梁 間斗束、六葉(八角)、懸魚鰯付	柱 間 装 置	板戸、格子戸、火灯窓、板壁
縁・高欄・脇障子	四方縁、擬宝珠高欄、登高欄付	床	疊敷
天 井	[外陣]格天井 [内陣]大間格天井	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇、厨子、宮殿
塗 装	素木、朱塗(内部)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	檜、その他
彫 刻	[身舎]来迎柱上虹梁・外陣繁虹梁・木鼻・妻虹梁(絵様) [向拝]柱(地紋彫)、木鼻(獅子)、海老虹梁・手挾(絵様)と波の浮彫)、水引虹梁(絵様)に波と亀の浮彫)、手肘木(波と亀の電影)		



写41-2 全景



写41-3 背面・側面



写41-4 向拝



写41-5 正面組物



写41-6 内陣



写41-7 外陣

が、明治14年(1881)の境内建物の殆どを失う火災によって変更を迫られ、資金不足を乗り越えて本堂と靈符堂を兼ねる形で実現されたのである。少林山靈符堂百分之一図という権現造の立面図が描かれた絵図が大切に保管されている。大工棟梁として川越の「野本鉢三郎正信」および「上州 金井庄吉正勝神宮德三郎長光」と記されていて、予期せぬ火災によってか絵図通りに建築はなされなかった。唐破風付きの向拝や二手先尾垂木付の組物・海老虹梁などは図面に近似しており、再現されたものと思われるが、全体の規模は縮小されている。絵図では拳鼻であった向拝木鼻は、側面から正面に向かって顔を振り向く獅子鼻に変更され、明治期の建築意匠の特徴を示す。

かんのんどう
観音堂（表41-3、図41-3、写41-8～41-10）

正面3間を北に開き、側面は2間半、入母屋造平入茅葺、身舎正面に木階3段を設け四方に切目縁を廻す。向拝角柱は3面に異なる地紋彫が施され、水引虹梁は松の浮彫と地紋彫である。各虹梁に施された絵様は多様で、彫刻軒支輪や中備の幕股全体が彫刻となるなど装飾が進んでいるが、板手挟や身舎拳

鼻など古風な意匠もある。内部は一室で、明治44年(1911)に本堂が建築されるまで北辰鎮宅靈符尊を安置していたが、現在は観音菩薩を祀る。手前側6柱と来迎柱は丸柱である。後部半間の外部柱のみ角柱で、頭貫木鼻を壁内に塗り込めるなど不自然な納まりもあるが、柱背面に風化が見られない事から当初

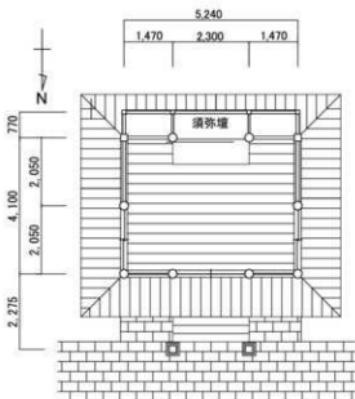


図41-3 平面図(観音堂)

表41-3 観音堂

建造年代／根拠	寛政4年(1792)/檜札	構造・形式	正面3間(5.24m)、側面3間(5.04m)、入母屋造平入茅葺、向拝1間付
工 匠	[大工]大工両棟梁 外所藏之助義和、岡田伊八郎重道	基礎	自然石基礎
輪 部	[身舎]丸柱(背部角柱)、長押、頭貫、台輪 [向拝]角柱、海老虹梁、水引虹梁、手挾	組 物	[外部]出組 [内部]出三斗 [向拝]出三斗
中 備	[外部]彫刻幕股 [向拝]本幕股	軒	二軒繁垂木、板支輪(彫刻)
妻 飾	燕懸魚	柱 間 装 置	舞良戸、板壁、格子
緑・高欄・脇障子	四方切目縁	床	拭板張
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇、扇子
塗 装	素木、朱塗(虹梁・内部)、黒(垂木)	飾 金 物 等	なし
絵 画	格間(花鳥動物の和紙絵画)、須弥壇(龍)	材 質	檜
彫 刻	[内部]組物(絵様) [外部]支輪(龍・波)、幕股(鳥・植物)、虹梁(絵様) [向拝]柱(麻の葉他地紋彫)、木鼻(獅子・象)、水引虹梁(松浮彫・刻線彫)、幕股(松・鳥・植物)、虹梁・手挾(絵様)		



写41-8 正面



写41-9 向拝木鼻・紅梁



写41-10 内部

材と推定される。来迎柱は金柱で背面に寄進者名（当村住人）と「無盡法藏兩金柱」の文字がみえる。観音堂は、享保元年(1716)9月に建てられた「無尽法藏」と名付けられた経蔵を、寛政4年(1792)に靈符堂へ改築したとされている。その際に、経蔵の古材が使われたという。寛政4年の棟札に「兩棟梁 外所藏之介義和 岡田伊八郎重道」とある。本寺東南約10kmにある「倉賀野神社」寛政元年(1789)の旧幣殿拝殿棟札に「引間村 外所内藏之介」とあり、同一人物の可能性もある。彫刻板支輪や水引虹梁の浮彫など建築意匠から棟札の示す寛政4年の建築と考える。

まとめ

福を呼ぶ縁起物「福だるま」発祥の地として現在でも多くの人が訪れる当寺院は、古来より方位除けの靈地とされ、前橋城の裏鬼門として元禄10年(1697)に開削した。徳川光圀公との関係も深く、享保11年(1726)には三葉葵の紋と丸に水の徽章を賜

り、永世の祈願所となっている。

本堂は明治期の建築であるが、江戸期の建築意匠に当時の新しい要素を取り入れたその建築手法は、江戸から明治への建築的変容を知る上で大変貴重である。18世紀初期に建てられた経蔵の古材を使用したと伝える観音堂は、今では珍しい茅葺のお堂で、定期的に茅を葺き替え、大切に受け継がれている。棟梁の一人は、観音堂建築の3年前に同市内の倉賀野神社幣殿拝殿建造に携わった大工とみられる。その社殿は倉賀野神社本殿の建替とともに江戸末期に解体されたが、その建築手法は匠の技として本観音堂に受け継がれたといえる。

(吉垣内英子)

【参考文献】

- 『碓氷郡志』群馬県碓氷郡役所 大正12年
- 『新編 高崎市史 資料編14 社寺』高崎市 平成15年
- 『少林山達磨寺寺誌』少林山達磨寺
- 『寺報 福 新緑号』広瀬正史 平成2年

44 (石原)清水寺 ((いしはら)きよみずてら)

表44-1

寺社名	華藏山弘誓院清水寺	所在地	高崎市石原町2401
宗派	真言宗豊山派	所有者・管理者	宗教法人 清水寺
主本尊	千手觀音	仏事なし	
創立・沿革	大同3年(808)開基。山僧法印裕清その後、天正11年(1584)、亥年11月、安藤対馬守繁治十万信者の寄付を以て再建(『寺院明細帳』)。		
文化財指定	清水寺の算額と絵馬(市重文 昭和44年3月)、芭蕉の雲句碑(市重文 昭和56年2月)		

位置・配置(図44-1、写44-1)

高崎市の市街地から、烏川にかかる聖石橋を渡り直進すれば、観音山丘陵にある参道に至る。石段下の芭蕉の句碑(市重文)を左手に見て520段を数える石段の登り始めより3分の1程のところに、仁王門(3間1戸、八脚門)屋根瓦葺、切妻。階段中程のところに馬頭觀音堂(正面1.96m、側面1.96m)、屋根銅板葺方形。上り詰めて楼門形式(5間1戸十二脚門、屋根・銅板葺入母屋)の山門(資料によつては舞台と呼んでいる)をくぐれば本堂正面に出る。本堂の右に田村堂(正面3.94m、側面4.03

m)元治元年(1864)の改築再建および旧の庫裏があり、左手には新しい庫裏がある。

由来および沿革

大同3年(808)開基。山僧法印裕清その後、天正11年(1584)「亥年11月、安藤対馬守繁治十万信者の寄付を以て再建……」と棟に記載有之(『寺院明細帳』)。寛文8年(1668)から貞享元年(1688)まで17年間、清水寺住職であった中興法印賀廣は、清水寺在位中、御堂再建、関門道前殿、仁王門、仁王尊を建立している。その後享保2年(1717)から弘化5年(1848)まで長い間無住であった。弘化5年高崎中紺屋町の玉田寺住職法印快音が清水寺へ入った時期もあったが、嘉永3年(1851)12月30日福島(現群馬町)の同じ真言宗豊山派の金剛寺から法印田村仙岳が転住した(『高崎市史資料編14』)。

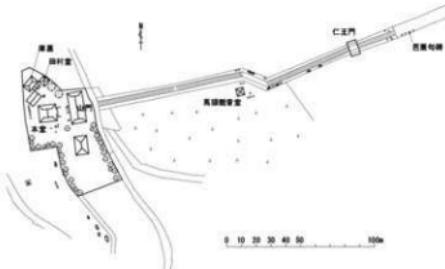


図44-1 配置図



写44-1 境内

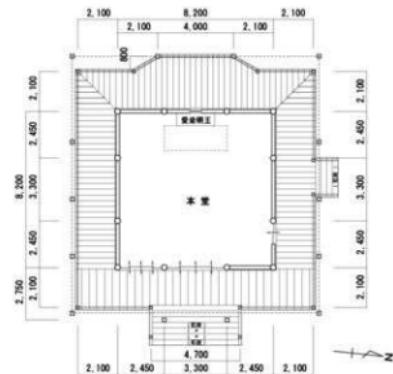


図44-2 平面図(本堂)

本堂 (図44-2、表44-2、写44-2~44-7)

天正11年(1583)と寛文11年(1671)の再建棟札があったと寺史に伝える。天正期のものは「和田兵衛大夫信業が馬頭堂を法印裕清の時に再建したもので、清水寺の所在地を「上野乃豊岡庄岩名長郷寺尾村」としているのが注目される」と高崎史にある。寛文の御堂再建の棟札は、藩主安藤対馬守重治、現住法印賢廣のもの。この時ともに仁王門も建築している。大工棟梁上州室田住、清水兵衛重治、清水三郎兵衛重長、柴田兵右衛門森長、以下9人となる(『高崎市史資料編14』)。

本堂の規模は正面3間、側面3間、屋根瓦葺入母屋造。平面は1室で、禅宗用の須弥壇のうえに厨

子、身舎のまわりを幅広の切目縁で回し、架木を束材で止めただけの実用的で簡素な高欄を回し、本堂背面に記されている愛染明王に参拝できるようになっている。室内は一室で拭板のうえに畳が一部置かれている天井は竿縁天井。向拝木鼻は方柱の側面のみで虹梁と同じような渦紋の彫刻。幕股は透かし幕股、内部に彫刻らしいものがみられる。手挾は向拝方形柱のうしろに大きく取り付いている。彫刻は渦紋である。海老虹梁がないのが特徴である。妻飾りとして妻虹梁は二重虹梁、大瓶束、貝殻懸魚。身舎の木鼻も渦紋の彫刻である。塗装は朱色。これらの建築様式から妻部分を含めた屋根全体及び向拝については、18世紀後半の後補と推察する。

表44-2 本堂

建造年代／根据	18世紀後半／建築様式	構造・形式	正面3間(8.20m)、側面3間(8.20m)、入母屋造、平入、向拝1間、瓦葺
工 匠	[大工]大工棟梁：清水市兵衛重次、清水三郎兵衛重長(『高崎市史』文中寛文の棟札より)	基 磐	切石基礎、コンクリート基礎
軸 部	「身舎」丸柱 「向拝」角柱	組 物	「身舎」出三斗 「向拝」木鼻、手挾
中 備	幕股	軒	二軒、半繁垂木
妻 飾	二重虹梁大瓶束、貝殻懸魚	柱 間 装 置	正面：板戸の引戸、側面：壁、板張り：板戸の引戸
縁・高欄・船脛子	縁：四方縁、(切れ目縁)高欄	床	拭板、畳
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	禅宗様
塗 装	朱塗	飾 金 物 等	なし
絵 画	絵馬と算額(市重文 1969年)	材 質	不明
彫 刻	木鼻、手挾、虹梁に渦紋		



写44-2 全体



写44-3 向拝 正面



写44-4 向拝 幕股



写44-5 向拝 手挾



写44-6 妻飾



写44-7 室内

まとめ

観音山とは本堂（資料によって観音堂または大悲閣と呼ぶ）にある本尊「千手観音」が元であり、白衣大観音があるから観音山ではない。階段下の（芭蕉花の雲碑）本堂内（絵馬）と（算額）はともに高崎市重要文化財。本堂以外の建物の建造年代は「清水寺觀世音に関する調べの原稿」による。

(城田富志夫)

【参考文献】

- 「清水寺觀世音に関する調べの原稿」清水寺住職 田村仙岳代 明治29年(高崎市教育委員会文化財保護課所蔵)
- 『新編高崎市史資料編14』平成15年
- 『上野国寺院明細帳2』平成7年
- 『群馬のお寺真言宗II』上毛新聞社 平成13年

46 成田山光徳寺 ((なりたさんこうとくじ)

表46-1

寺院名	成田山光徳寺	所在地	高崎市成田町23
宗派	真言宗智山派	所有者・管理者	宗教法人 成田山光徳寺
主本尊	天日如来、不動明王並びに阿彌陀	仏事	正月大護摩供養(1/1)、節分大護摩供養(2/3前日の日曜)、夏季大祭(5/28)、秋季大祭(9/28)、星祭(12月第1日曜)
創立・沿革	成田山光徳寺は、天正11年(1583)に北条の臣、八幡城主横地左近守監吉晴が建立し、開山は定実法印。天明3年(1783)に類焼にあり、古書類を焼失し、天明4年(1784)に再建したという。明治45年(1912)2月20日に埼玉県児玉郡児玉町大字児玉より移転した(上野国神社明細帳2)。		
文化財指定	成田山光徳寺所在元徳寺の内陣(市重文 昭和46年2月)		

位置・配置 (図46-1、写46-1)

高崎駅から徒歩圏内の繁華街を抜けた落ち着いた通りに面する。参道を入ると左に成徳寺内陣裏門を改修したと伝えられる手水舎がある。正面には本堂(1971年完成、鉄骨造)、西に太子会館、太子堂、東に元徳寺内陣が建つ。本堂手前に三つ葉葵紋付の石灯籠を備える。境内は樹木が少なく明るい印象である。

由来および沿革

成田山光徳寺は、千葉の成田山新勝寺の高崎分院で、明治9年(1876)に地元有志の力添えで不動明王が勧請され現在に至る。また、元徳寺内陣は、慈應山天休院成徳寺内にあったものである。『新編高崎市史 通史編3』によれば、成徳寺は、高崎城主松平輝貞(1665~1747)が城内南中門の外に宝永6年(1709)開基した寺で、徳川5代將軍綱吉とその寵臣であった輝貞およびその累代の靈牌を安置した寺で

ある。知恵伊豆の異名をもつ松平信綱の孫にあたる輝貞は、五代將軍綱吉に小姓として仕え、元禄8年(1695)高崎城主となった。綱吉が宝永6年1月に死去すると出家を願い出るが許されず、その生涯にわたり主君の冥福を祈り、上野寛永寺内の綱吉廟堂である常憲院御廟に参拝を続けたという。成徳寺が創建されたのは綱吉没年11月の事である。その翌年5



写46-1 境内全景



図46-1 配置図

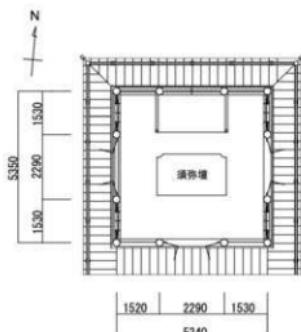


図46-2 平面図(元徳寺内陣)

月、輝眞は村上城（潟県村上市）へ所替えとなつてゐる。威徳寺は廃藩置県に伴い明治9年(1876)に廃寺となり、同年6月に内陣を光徳寺に移設したといふ。

元威徳寺内陣 (図46-2、表46-2、写46-2~46-7)

三間堂平面で、方形屋根中央に宝珠がのる。四方に縁を廻し、以前は正面に階があった。平面的には一室で、正面側面の中央に精巧な麻の葉の地紋彫と唐草模様の刻線彫金物で飾られた両折開戸を配置し、その両脇に正面では蔀戸、側面で火灯窓を備える。背面には後補と思われる開戸がつく。四方に開

口を持つ平面形状は、綱吉の靈を祀る事からも昭堂建築にもみえる。明治12年(1879)の寺院明細帳には「本堂 間口三間 奥行八間」とあり、現状とは建物奥行きが異なる。建物背面中央間両柱に大入れ舟差および縱横長方形の溝跡が残り、建物接続の可能性を示唆する。軸部は棕付の丸柱で、頭貫鼻は屈折をもつ刻線彫の絵様である。内外共組物は詰組の出組で、外部組物のうち数か所に極彩色の残る斗供を確認する。内部壁面および天井は護摩によって煤が付着しているが金箔が眩しく、頭貫より上部を極彩色の組物で飾られている。花頭窓下および正面端間板壁には、極楽に咲く花、蓮の彩色画が描かれてゐる。

表46-2 元威徳寺内陣

建造年代／根拠	18世紀前期／建築様式	構造・形式	正面3間(5.34m)、側面3間(5.35m)、方形造、瓦葺(以前檜皮葺)
工 匠	不明	基 础	[外周部]コンクリート基礎(1970年) [内部]切石
軸 部	土台、丸柱(棕)、長押、頭貫、台輪	組 物	[内・外部]出組 [腰組]二手先
中 備	[内・外部]詰組 [腰組]幕股	軒	二軒組垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	両折開戸、蔀戸、火灯窓、両開唐戸、板壁
緑・高欄・脇障子	四方縁切目緑、高欄	床	拭板張
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(禅宗様)
塗 装	朱塗、金箔塗(内部・両折開戸)、極彩色(内部組物)、白(垂木)	飾 金 物 等	扉: 產業金物、八双金物、ちらし金物 長押: 八双金物、天井: 十字金物
繪 影	蓮(火灯窓下・北側壁面)	材 質	檜
	刻組物(絵様)、扉(地紋彫・麻の葉)		



写46-2 全景



写46-3 背面・側面



写46-4 内部



写46-5 頭貫鼻



写46-6 内部組物



写46-7 両折開戸

高崎市提供の「高崎市指定重要文化財指定時資料」には、輝貞が寛永寺に納める為に建造させたが、誤算があつて叶わなかつた為、改修した上で威徳寺に納めた、と建築の経緯が説明されている。彫刻は木鼻の唐草絵様程度であるその細部意匠からも18世紀前期の建築と推定される。

まとめ

当造構は、装飾の少ない古風な18世紀前期の建築様式を今に伝える。寛永寺に納める為に輝貞が造らせたという伝承があり、最終的に綱吉の靈を祀る威徳寺へ納められた建築である。主君への忠義を表し

た建物でもあることから、当時の建築技術の粹を集めたものであろう。綱吉の靈廟である寛永寺内の常憲院御廟は第二次世界大戦でそのほとんどを焼失し、現存する勅額門は宝永6年(1709)11月の竣工、奥院唐門も同時期のもので、ともに国の重要文化財に指定されている。威徳寺内陣は、綱吉の靈を祀る同時期の建築として重要な意味を持っている。

(吉垣内英子)

【参考文献】

- 『上野国寺院明細帳2』群馬県文化事業振興会 平成7年
- 『新編 高崎市史 資料編14 社寺』高崎市 平成15年
- 『新編 高崎市史 通史編3 近世』高崎市 平成16年

47 長谷寺（ちょうこくじ）

表47-1

寺院名	長谷寺	所在地	高崎市白岩町448
宗派	金峯山修驗本宗	所有者・管理者	宗教法人 長谷寺
主本尊	十一面觀世音（菩薩）	仏事	初観音豆まき会（1月）、春彼岸会（3/18）、四万六千日誦（7月）、秋彼岸会（9/18）、七五三祈願会（11/15）、納め観音（12/18）
創立・沿革	人皇33代孝德天皇の御宇、役の行者がこの山を開き、人皇45代聖武天皇の勅を承けて徳道上人、行基菩薩の両聖人が道場を開き伽藍を建立したと傳える（『久留村誌』）。		
文化財指定	仏像（脇侍）、不動明王立像、毘沙門天立象、仁王門及び仁王像、棟札、大鋸、銅製納札、宝塔（市重文 昭和63年5月）、木造十一面觀音立像（本尊）、木造十一面觀音立像（前立）（県重文 昭和50年9月）		

位置・配置（図47-1、写47-1）

高崎市の北西、榛名山麓に位置する。近隣には白川や西明屋など中世の宿地名が残る。道路に沿って南北に長い境内は、北西が山側で少し小高くなっている。東に道路、北に墓地、西は白岩神社に接している。石疊の参道には手前から手水舎、仁王門、鐘楼、庫裏がならび、正面奥が旧観音堂（現存せず）である。境内は道路からも見通しがよく、若干の樹木があるだけで明るい雰囲気である。

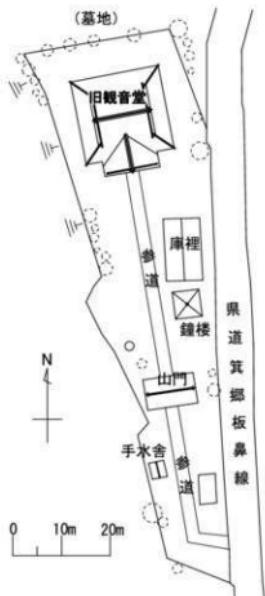


図47-1 配置図（調査時）



写47-1 境内全景

由来および沿革

伽藍建立後、源義家や頼朝、新田義貞、上杉憲政、長野業政ら名立たる武将の崇拝を受け、伽藍の修復がなされてきたという。三河の浜名湖辺に住んでいた浜名左兵衛門は、中興の祖ともいべき人物で修復に力を注いだ（『久留馬村誌』）。現和尚はその末裔である。永禄6年（1563）に武田信玄の箕輪城攻略時に兵火によって焼失するが、天正8年（1580）武田氏の上意を受けた世無道上人により再建されたのが旧観音堂と伝える。建築に際して使用されたといいう大鋸が大切に保管されている。また木造の十一面觀音立像本尊および前立像を安置しており、いずれも鎌倉期以前の造立とされ、県の重要文化財に指定されている。

当寺は平安時代に坂東三十三靈場の第十五番の札所に定められたといい、県内では他に第十六番水沢寺のみである。幕府のあった鎌倉から遠隔地となる上野国でありながら、坂東三十三靈場に加えられた背景に、幕府との強い関りがあったことを「榛名町誌 通史編上巻」では指摘している。旧観音堂外陣壁板には「元禄」の年号の入った落書きが複数確認

できた。靈場は全行程1,300kmにもおよび、極楽往生を願い巡礼した人々の祈りの記録でもある。

旧 観音堂（旧白岩観音本堂）（図47-2、表47-2、写47-2～47-7）

観音堂というと小ぶりな建物を想像するが、本建物は正面5間、側面4間の身舎中央に正面3間、側面2間の向拝がつく比較的大きなものである。身舎に比較して向拝部分が大きい為、前面からみると身舎屋根が殆ど見えず、水引虹梁から菖蒲桁までの広い空間全体に彫刻が充填されていて迫力がある。軸部は朱塗りであるが、効果的に白や黒の塗装を施し

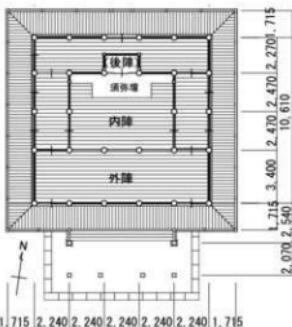


図47-2 平面図(旧観音堂)

表47-2 旧観音堂

建造年代／根据	17世紀後期／建築様式	構造・形式	正面5間(8.96m)、側面4間(10.61m)、入母屋造、平入、向拝3間唐破風屋根、銅板葺
工 匠	不明	基 础	礎自然石
軸 部	【身舎】丸柱、長押、貫、台輪 〔向拝〕角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	〔内陣・外陣〕出組 〔付唐破風柱上部〕連三斗 〔外部〕三手先尾垂木付、三ツ斗
中 備	【外陣】幕股 〔向拝〕平三斗・幕股	軒	二軒繁垂木、彫刻板支輪
妻 鮒	鋪懸魚鰭付	柱 間 裝 置	板戸、板壁、格子
締・高欄、船艤子	四方切目縁、凝宝珠高欄、登高欄付	床	拭板張
天 井	格天井	須弥壇	須弥壇・扇子・宮殿須弥壇(禪宗様)、厨子
塗 裝	素木、朱塗(向拝・柱・貫・組物・須弥壇)、極彩色(外部彫刻・外陣彫刻)、金欄巻(来迎柱)、白(向拝彫刻)	飾 金 物 等	後陣引違戸: 扇飾金物(出八双)、菊座付乳金物
繪 画	内陣支輪(波に菊)、外陣天井(花鳥風月)、向拝天井(天女)	材 質	質不明
彫 刻	〔内部〕彫刻板支輪(波・鯉・紅葉他)、彫刻幕股(花・動物)、拳鼻(絵様) 〔内部付唐破風〕虹梁・破風板(絵様)、木鼻(獅子・象) 〔身舎外部〕彫刻軒支輪(波・菊・他)、木鼻(獅子・牡丹)、幕股、尾垂木(絵様) 〔向拝〕虹梁・拳鼻(絵様)、唐破風嵌込彫刻(天女・雲・他)		



写47-2 全景



写47-3 背面・側面



写47-4 向拝虹梁



写47-5 内陣



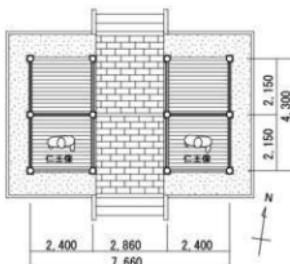
写47-6 厥子



写47-7 外陣幕股・彫刻・組物

て印象的な雰囲気を醸し出している。平面的には、建物の中央に正面3間側面2間の内陣、その手前に外陣があり、内陣を取り囲む三方向に外縁のような細長い室を配置している。外陣は、柱や台輪上組物に朱塗を施し、極彩色の彫刻板文支輪と彫刻幕板で飾られている。一方内陣は、木鼻に唐草絵様の刻線彫がある程度古風な意匠であるが、正面奥に設えられた須弥壇が目を引く。朱塗の来迎柱が須弥壇から立ち上がり、虹梁および柿葺唐破風の付屋根を支える。来迎柱は金襴巻きを備え、虹梁は中央に向かってせり上がり、刻まれた唐草絵様には金が施されている。極彩色の木鼻は、正面が獅子で側面が象である。須弥壇側面には、「延宝年中塗之 文政五年二月中旬再塗之」と朱書きがあり、延宝年間(1673～1681)及び文政5年(1822)に塗装されたことがわかる。後補の後陣を含めたこれら意匠が一体となって正面側面1間の厨子を形成しているのである。

元禄期の上野国を描いた「元禄上野国絵図」(1702)には、長谷寺として小さなお堂が描かれている。また、内陣の周囲に頭貫が廻ることからも、当初は3間2間の内陣部分のみの観音堂であったと推測できる。組物の絵様は多様であるが、内陣の頭貫鼻、外陣を含む外周部の組物鼻は、それぞれ同じ種類であった。当観音堂の建築に関する資料として



写47-3 平面図(仁王門)

は、天正8年の棟札、承応3年(1654)の銅製銘札、宝暦3年(1753)の棟札(屋根替)がある。他にも安永2年(1773)の奉修造十一面觀音堂成就所棟札があるという。それらの資料と木鼻の特徴などから、内陣は棟札の示す16世紀末、外陣および内陣を取り囲む3室は18世紀後期の建築と考えられるが、全体としては17世紀後期の建築とした。

仁王門 (写47-3、表47-3、写47-8～47-10)

朱塗の八脚門で、石積一重基壇の上に自然石の基礎を置き、粽付の丸柱を据え、貫で固め台輪を廻している。組物は三斗、中央間のみ幕板と裏束を備え

表47-3 仁王門

建造年代／根据	16世紀後期／建築様式	構造・形式	3間2戸八脚門(7.66m)、側面2間(4.30m)、切妻造、平入、銅板葺
工 匠	不明	基 磐	自然石
軸 部	丸柱、貫、台輪	組 物	平三斗
中 備	[本柱間]幕板、裏束	軒	一軒半繁重木
妻 鮒	虹梁大瓶束、蕉懸魚	柱 間 裝 置	板壁、格子
緑・高欄・脇障子	なし	床	拭板張
天 井	格天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、黒(天井格縁)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	櫛
彫 刻	木鼻・虹梁(絵様)、幕板(桃・五三桐)		



写47-8 正面



写47-9 通路部紅梁・幕板



写47-10 頭貫

る。臺股正面にあしらわれた桃には、不老不死や邪氣を払うなどの意味もあるという。背面は五三桐の紋である。建造年代については、頭貫木鼻の形状および溝文が旧観音堂内陣と酷似しており、同時期に建てられたと考えられる。

まとめ

白岩山長谷寺は、古来より坂東三十三番霊場第十五札所として人々の信仰をあつめてきた。周辺には歴史を物語る遺構や伝説も多い。関東域の観音信仰の対象であった旧観音堂は、天正8年(1580)の棟札を残し、その内陣部分は16世紀末の建築と推定されるが、令和2年の初春に解体された。須弥壇、外周部彫刻、向拝天井画(天女)は、建替後の本堂へ引き継がれている。しかしながら、旧観音堂が現存していれば、県内最古のお堂であった可能性もある。残る仁王門は、旧観音堂内陣と同時期に建てられた

ものと考えられ、建造年代は江戸前期を下らない。その当時の建築手法を今に伝える仁王門は、大変貴重である。数世紀を経て建築を維持する難しさや困難は、決して一団体や個人のみが負えるものではない。社会としてどう向き合うか、考える時期にきていくのであろう。

(吉垣内英子)

【参考文献】

- 『榛名町誌 通史編下巻』榛名町誌刊行委員会 平成24年
- 『榛名町誌 通史編上巻』榛名町誌刊行委員会 平成23年
- 『榛名町の文化財』榛名町役場 平成7年
- 『群馬県史資料編 8 中世4』群馬県 昭和63年
- 『群馬県白岩長谷寺の仏像4体について 構造と造像技法に関する基礎資料』群馬県立歴史博物館紀要 第4号』岡部央著 昭和58年
- 『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会 昭和54年
- 『白岩觀世音縁起』諸田政治 昭和41年

49 (大福寺) 漢不動尊堂 ((だいふくじ)たきふどうそんどう)

表49-1

寺院名	秀巌山龍水院(大福寺)漢木動尊堂	所在地	高崎市中室田町5558
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 大福寺
主本尊	大福寺：阿弥陀如来	仏事	毎年1月28日 護摩祈禱
創立・沿革	創立年は不明であるが、初め舟尾山寺の一末院であった。星雷を経て堂宇は荒廃したが、里見村光明寺より出た円覚上人が境内室田に移し、光明寺の末寺とした(寺伝による)。		
文化財指定	境外仏堂 漢不動尊堂(市重文 昭和52年12月22日)		

位置・配置 (配置図省略)

大福寺は高崎市の西に位置する天台宗寺院である。境外仏堂である漢不動尊堂はそこから更に西に約3km先にある。高崎市街地から向かうとおよそ17kmで、北西に位置し、長野原方面へ向かう国道406号線の途上にある入口には、細い参道があり、車両の進入は難しい様子がうかがえる。しかしその入口を通り過ぎ、更に少し進むと車両用の入り口があり、やや細い急坂となっている道を下ると駐車場がある。駐車場からは西側の入り口が近く、敷地に入ると左手に薬師堂を拝み、その先を進むと階段があり、本堂へと進む。敷地は東西に長く、南に烏川が敷地に平行するように流れている。

由来および沿革

『室田町誌』によれば、秀巌山大福寺は船尾山寺の1末院であった。阿弥陀如来像は、伝教大師の点



写49-1 境内全景

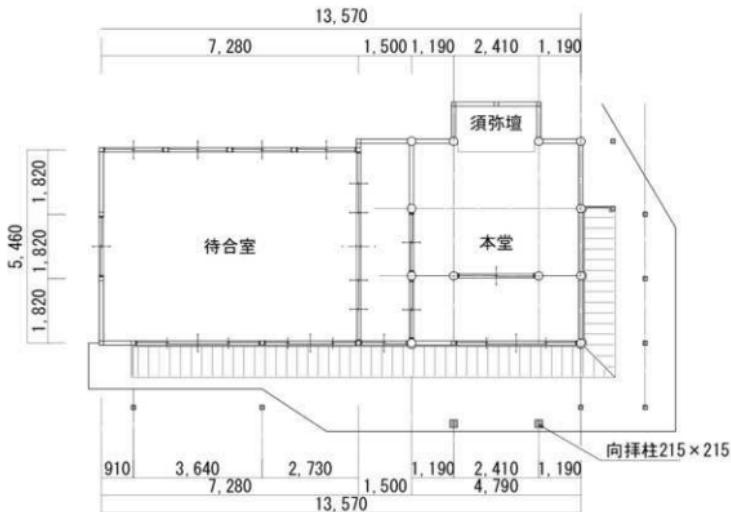


図49-1 平面図(本殿)

眼であるという。年月を経て荒廃した堂宇を光明寺より出た円覚上人が現在の地に移して光明寺末社にしたという。

境外仏堂である澄不動尊は、高崎市指定重要文化財で、かつて不動堂といわれ後に滝不動として遠近にしられるようになり、北関東三十六不動尊靈場の第三番札所となっている。文徳天皇の天安の頃(857年頃)、慈覺大師により創立されたという謂がある。その後の所有者が大福寺になったという。堂宇は南を正面にし、県道脇からせり出した断崖絶壁の岩にはめ込まれるように建つ。およそ文徳天皇の天安の頃(857~858年)慈覺大師により創立され、後に

大福寺で所有されたという記録が『室田町誌』でも紹介されている。更にその先の文書からは明和4年(1767)に建立された堂宇の規模も紹介されており、その記録によると、棟梁は『清水谷仁右衛門藤原貞宴で本堂三間、四間』と、現在の建物の規模とほぼ変わらないことがうかがわれる。この棟梁の名前が記載された棟札の画像資料なども保管されている。

澄不動尊堂 (図49-1、表49-2、写49-2~49-7)

本堂西側には事務室が隣接する。又、内部は南側正面に拝殿一室を設け、その奥に本堂がある。本堂は、奥に須弥壇があり、不動明王を安置している。

写49-2 澄不動尊堂

建造年代／根柢	18世紀中期／建築様式	構造・形式	正面3間(4.79m)、側面4間(5.70m)、入母屋造銅板葺
工 匠	大工棟梁 清水谷仁右衛門藤原貞宴	基 础	布基礎
輪 部	[身舎]丸柱 [向拝]角柱 [来迎柱]丸柱、内法長押(外)、頭貫上台輪(不明)	組 物	[身舎外部]出組 [身舎内部]出組 [向拝]出組、一手先 [来迎柱]出三斗
中 備	[身舎]外部 卷斗 [身舎]内部 卷斗	軒	正面二軒繁、打越、軒支輪
妻 飾	懸魚、笠型大瓶束、家又首、手扶	柱 間 装 置	引戸(格子戸)
縁・高欄・脇障子	大床 切目、浜床 無、高欄 無	床	拭板
天 井	[内部]折上格天井	須弥壇・扇子・宮殿	禪宗様
塗 装	木鼻、手扶、軒支輪	飾 金 物 等	長押飾り [柱]根巻金具
繪 画	格天井 草花、龍、鳥、天女 内陣壁 虎、材 下陣天井、絵	質	来迎柱 檻、床 桧、檜
彫 刻	[身舎外部]木鼻、獅子、軒支輪、波とボタン	[向拝]水引虹梁、梅、木鼻、正面獅子、側面 獣	



写49-2 全景



写49-3 侧面



写49-4 向拝



写49-5 亀の尾 絵図



写49-6 木鼻



写49-7 蔽殿

その前に祈祷の為の護摩壇が置かれている。

規模は正側3間、側面4間の入母屋造銅板葺きで、軒唐破風の向拝1間を付す小堂である。向拝柱は根巻金具を付けた角柱で、正面の水引虹梁には梅の花と枝が「レリーフ」と呼ばれる浮彫の彫刻で施されている。更に虹梁の端につく木鼻は、正面に獅子、側面に狛が施されている。また、向拝側面の海老虹梁には渦が波模様化している彫刻が描かれ、身舎正面丸柱に付す。正面から東側面には縁を廻し、丸柱は内法長押で固めている。身舎組物は出組で一手先。妻飾りは笈型大瓶束と懸魚が付す。

本堂内部の床は拭板で天井は折り上げ格天井で草花、鳥、天女等の絵が描かれている。壁にも寅の絵が描かれている。組物は出組で、幕股はややふっくらと特徴があるがシンプルな形状で、木鼻には若葉の文様が描かれている。

まとめ

大福寺境外瀧不動尊堂は、群馬県において北関東靈場として今なお御朱印巡りで人が後を絶たない。

市街地からは程遠く、県道からも分かりにくい場所を探し当ててようやく着いたこの瀧不動尊は、先に通った県道が、本堂から真上に見上げるようびえ立つ断崖絶壁の上にある事が分かる。自然の厳しさを感じさせる。更に、おそらく榛名より流れきたる水は、滝のように流れ落ち、その直下に不動尊が人々の病気平癒を祈るかのように置かれている。険しい山々と悠久と流れる川のせせらぎに触れるうちに、やっとの思いで来た気持ちも癒されてしまうほどである。靈験あらたかな聖地として何百年もの間、長く人々が癒しを求め、訪れていただろう。

(堤 雅之)

【参考文献】

『室田町誌』昭和41年

53 龍門寺（りゅうもんじ）

表53-1

寺院名	釋名山龍門寺	所在地	高崎市箕郷町東明屋甲22
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	龍門寺
主本尊	釈迦三尊	仏事	4月8日、12月8日、12月15日
創立・沿革	井伊直政が箕輪に入城後、城の鬼門除けに関東三利とまで言われた。大平山大中寺八世白庵秀闇を招き開山とした。天正18年(1590)井伊直正、箕輪城口入部ノ節新ニ創立セリ(『上野国寺院明細帳2』)		
文化財指定	龍門寺の山門(市重文 昭和49年10月)		

位置・配置 (図53-1、写53-1)

龍門寺の参道は県道26号線、東明屋の信号から柏木沢に向かう丁字路のところから始まる。山門はこの地点と本堂との中間点に位置する。山門から真正面に木立の間を透かして本堂が望める。山門から入りすぐ左が坐禪堂、右に書庫がある。坐禪堂は、極最近の建物であり、書庫も完成は最近のもの。境内は広く本堂の後は広い墓地になっていて、本堂の斜め後ろには池がある。本堂は曹洞宗寺院の特徴である土間の空間を前面に備え南面している。本堂と書院は玄関を挟んで連結していて、庫裏は書院の前に離れとしてある。境内地に接し、境内地の南東側には参拝者用の広い駐車場がある。

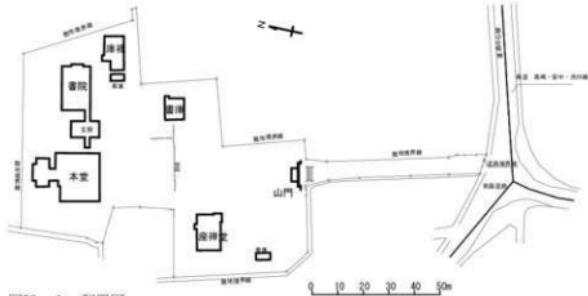


図53-1 配置図



由来および沿革

井伊直政が箕輪に入城後、城の鬼門除けに関東三利とまで言われた、大平山大中寺八世白庵秀闇を招き開山した。『上野国寺院明細帳2』によれば、天正18年(1590)「井伊直政箕輪城口入部ノ節新ニ創立セリ」とある。山門は寺より提示された資料(印刷物、表門棟札)によれば寛延3年(1750)再建、柏木沢棟梁 青山数馬貞寛、他門人12名の記載がある。

山門 (図53-2、表53-2、写53-2～53-7)

予備調査の段階で、住職からの聞き取りや本堂掲示板より昭和34年(1959)に基礎の全面改修(コンクリート基礎化)屋根の全面的改修、および建具の改

修が行われていることが分かり、今回の調査から本堂については除外することになり、調査は山門(高崎市指定重要文化財)になった。

山門は寺より提示された資料(印刷物、表門棟札)によれば寛延3年(1750)再建、柏木沢棟梁 青山数馬貞寛、門人として、以下の12名の記載がある。

下村 田子新蔵、柏木 青山勝藏、古市 黒崎甚造、生原 川浦

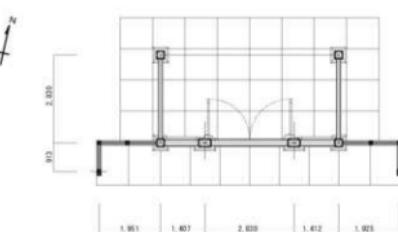


図53-2 平面図(山門)

表53-2 山門

建造年代／根拠	寛延3年(1750)／寺からのご提示資料文献の記事(棟札について)	構造・形式	3間1戸薬医門、切妻造、正面軒唐破風付、棟瓦葺
工 匠	[大工]棟梁：柏木沢邑。青山數馬貞宴 他12名（「龍門寺四百年誌」掲載「表門棟札」）	基 墓	礎 切石基礎
輪 部	3間1戸薬医門、頭貫、虹梁	組 物	出三斗
中 備	幕板	軒	正面：二軒繁垂木 背面：二軒繁垂木
妻 飾	妻側：虹梁、大瓶束、懸魚 正面：[唐破風] 虹梁大瓶束、懸魚兎の毛通	柱 間 裝 置	正面：開戸
縁・高欄・脇障子	なし	床	コンクリート土間
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	極彩色(彫刻)	飾 金 物 等	柱脚部分：頭貫木口
繪 画	なし	材	質 不明
彫 刻	[頭貫](地紋彫)、妻虹梁(満紋)、板戸(地紋彫)		



写53-2 山門正面



写53-3 山門正面 正面唐破風



写53-4 山門裏面 中央から右側



写53-5 山門より本堂を望む



写53-6 山門妻飾り(西面)

写53-7 山門正面 脊正面
井伊家家紋 橋

茂右衛門、柏木 青山忠蔵、柏木 青山源之助、惣社 中嶋庄五郎、惣社 吉澤富之助、柏木 青山源六、生原 大塚吉左衛門、当所 安藤亦右衛門、越後木挽乙七。門の正面唐破風中央の「棟名山」と記された名版があり、頭貫部分に井伊家の家紋である丸に橋が刻まれている。門の中ほど虹梁上に大瓶束、左右に彫刻、組物は出三斗、中備は本幕板（正面部分は山号の名版の裏に当たり見えないが門の裏側から確認できる）。屋根は棟瓦葺き、切妻・妻飾り虹梁の上に大瓶束、東の左、右は彫刻。軒は二間繁垂木。門の彫刻は門の表及び裏の上半分に井伊家の家紋が刻まれている。懸魚として唐破風に、兎の毛通、妻面は猪ノ目懸魚、天井は格天井、親柱の足元は銅板巻となっている。

まとめ

龍門寺の山門は3間1戸薬医門、切妻造、正面軒唐破風付き、棟瓦葺き、である。現在の山門は寛延3年(1750)のものと寺からの提示された印刷物に記載されている（住職の談話によれば棟札の写真は所蔵されている、と言われた）。

（城田富志夫）

【参考文献】

- 『龍門寺四百年史』龍門寺
- 『群馬県史－資料編10』群馬県史編纂委員会 昭和53年
- 『上野国西群馬郡寺院明細帳』平成7年

54 長純寺〔ちょうじゅんじ〕

表54-1

寺院名	実相院金富山真 ¹ 禪寺	所在地	高崎市箕郷町富岡852
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 長純寺
主本尊	般若半尼伝	仏事	不動尊例祭(3/28)、花まつり(4/8)、大晦日の鐘(12/31)
創立・沿革	明応6年(1497)に箕郷町上芝水草の地に室田鷹城主の長野信業(後に箕輪城主)により開基され、鬼石の水源寺から四世幻室伊蓬大和尚を招いて開山される。箕輪城主長野業政公の菩提寺である(寺伝)。		
文化財指定	長純寺の長野業政公の像(市重文 昭和48年7月)		

位置・配置(図54-1、写54-1)

榛名山南東麓に位置し、南には鳴沢湖があり、北西には箕郷梅林が広がっている。北側から車川と榛名白川が東流する。表参道は入口に石仏群と石門があり、緩やかな登り坂を進み階段を上ると山門がある。山門の東側には鎮守堂が祀られている。山門と本堂を結ぶ参道には階段が2箇所あり、1つめの階段を上ると東側に鐘楼、2つめの階段を上ると本堂があり、東側に庫裡、西側に書院がある。書院の西側から本堂の北側の傾斜地には墓地があり、その中の通路を北に上ると丘の上に出る。そこは開けており駐車場がある。その先は開基塚信濃山である



図54-1 配置図



写54-1 山門

り、長野業政公と令室の墓がある。周囲は縁で囲まれている。

由来および沿革

長野信業二男の業政が母の17回忌の供養のため、現境内地の北一段高い開基塚信濃山あたりに移転建立する。六世天庵玄貞禪師の代寛永年中(1624~1644)に現境内地に移転建立となる。現在の本堂は火災等で6回目の建立である。

本堂(図54-2、表54-2、写54-2~54-7)

建造年代は棟札により享保21年(1736)である。棟梁は室田中村の清水弥次兵衛尉重里。寺伝によると、昭和31年(1956)に薺葺きから瓦葺きとし、内外部を大改装した。建立時の棟梁の遠孫である清水一男棟梁による。昭和40年代に一部基礎コンクリートに改修し、昭和50年前後に木部を茶色に塗装した。平成18年(2006)に銅板平葺きに改修。古写真から現在の妻飾は瓦葺きにしたときと同じ構成である。

規模は正面20.11m、側面15.58mの入母屋造銅板平葺で背面の一部に納戸を増築している。内部は6間取で前面と側面に広縁を回し、前面には土間がある。背面の渡り廊下で開山堂と繋げ、西側の渡り廊

下で書院と繋ぐ。東側は庫裡と接続する。各部屋間には敷居と鴨居はあるが、建具設置は一部のみであり、屋内は広々としている。組物は外部正面と側面が大斗肘木で、一部に拳鼻が付く。屋内前面の土間は野地板表しで外部と同様の組物であり、外陣内側と来迎柱上部が拳鼻付組である。外陣内側組物の柱筋の通透木上部は斗を細かく並べ、一手目で天井枠を支える。中備は来迎柱部と外陣中央間が詰組である。その他はない。彫刻は絵様肘木や拳鼻に刻線彫の渦紋様があり、内部の虹梁や海老虹梁には刻

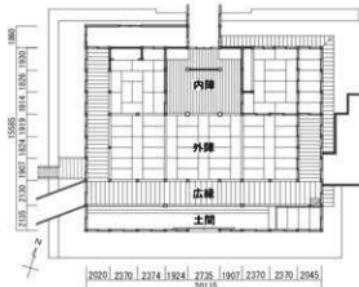


図54-2 平面図(本堂)

表54-2 本堂

建造年代／根柢	享保21年(1736)／棟札	構造・形式	正面20.11m、側面15.58m、入母屋造、平入、銅板平葺
工 匠	[大工] 棟梁 室田中村 清水弥次兵衛尉重里 ／棟札	基 础	基壇1段、外周部はコンクリート布基礎、内部は礎石(自然石)
軸 部	[外部] 角柱、土台、地貫、腰長押、差鴨居、 飛貫、頭貫 [内部] 角柱、丸柱(来迎柱)、内外 陣境柱)、内法長押	組 物	[外部正面、側面] 大斗肘木、一部拳鼻付 [外 陣内側、来迎柱上部] 拳鼻付組
中 備	[外陣] 詰組(中央間) [来迎柱部] 詰組(中央 間) [外部] なし	軒	二軒疊垂木
妻 飾	[壁] 二重虹梁、菱形付束、前包、須覆、出三 斗(母屋受)、拳鼻付平三斗(中備)、実肘木 [破 風] 反り破風(眉欠2段)、雲水繕付燕懸魚、六 葉、蝶口	柱 間 裝 置	[身合外部] ガラス戸、ガラス欄間 [内部] 鏡戸、 障子、欄間格子戸、欄間彫刻
幕・高欄・船脛子	切目線(北側、東側)	床	[外陣] 艶 [内陣] 拭板張
天 井	[外陣] 折上格天井 [土間] 野地板表 [他] 笈 緑天井	須弥壇・扇子・宮殿	[内陣] 神宗様須弥壇
塗 彫	極彩色(内外陣境欄間彫刻)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	[外部内部] 絵様肘木、拳鼻(刻線彫 湯紋様) [内部] 虹梁、広縁部海老虹梁(刻線彫 府草紋様) [外陣側面] 檻 間彫刻(透彫 菊水、桜・波) [内外陣境] 欄間彫刻(透彫 唐子・林和靖、唐子・黄安)		



写54-2 全景



写54-3 正面入口



写54-4 内観



写54-5 外陣天井



写54-6 虹梁 府草紋様



写54-7 外陣欄間彫刻

線彫の渦と若葉による唐草紋様がある。外陣には欄間彫刻があり、いずれも建造年代の様式をよく表している。木軸部や床や欄間彫刻（当初極彩色）などは茶色で塗装しているが、内外陣境の欄間彫刻のみ幕で隠れているためか極彩色が残る。

まとめ

本堂は改修や改装により姿を変えたところもあるが、建築当初の建築様式を伝えている。木鼻や肘木の形状と、刻線彫の渦紋様は、外部内部ともそれぞれ同じ形状のようである。木鼻の渦紋様は丸くなっていて、18世紀中期頃の特徴を示す。内部の虹梁の

唐草紋様も18世紀中期頃の特徴を示している。肘木の渦紋様は扁平であるが、虹梁の紋様の茨と同様の茨があるので、それらは同時期の建築といえる。本堂は建築当初の建築様式を伝えており、地域の建築様式の推移を知るうえで重要な建物である。

さらに、寺院は箕輪城主長野業政公と令室の菩提寺であり、歴史上も極めて重要である。

（島崎重徳）

【参考文献】

『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会

昭和54年

『金富山長純寺史』斎藤勲編集 平成元年

55 妙見寺（みょうけんじ）

表55-1

寺院名	妙見山普照院妙見寺	所在地	高崎市引間町213
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 妙見寺
主本尊	釈迦牟尼仏、文殊菩薩、普賢菩薩	仏事	妙見祭り(7/21)、水的行事(1/6)、ひき筒の行事(1/16)、ちまき祭(5/15)
創立・沿革	創立年代不明。「妙見寺明細帳」には、聖龜元年(715)から天平2年(730)に至り左京職忠明が大伽藍を建立したとある(『上州のお宮とお寺 寺院編』1978年初版)。		
文化財指定	妙見社本殿(市重文 昭和62年7月21日)		

位置・配置 (図55-1、写55-1)

高崎市街地より真北方面、県道127号線(通称 足門前橋道路)の塚田交差点を北に400mに位置する。付近には利根川水系の一級河川である染谷川があり、北北西には、榛名山の扇状地末端の湧水地帯で、古墳時代の首長居館跡の遺跡である北谷遺跡がある。境内へは県道127号線を北へ入る。正面を南西向きとし、敷地に入ると右手に駐車場、左手に階段があり、その先を参道とする。手水舎、拝殿、幣殿及び本殿が北にむかって一直線に並び建てている。本殿東側には本堂、客殿を備える。広い境内は美しく整備されており、周囲には樹木が生い茂り、地域の景観を形成している。



写55-1 境内全景

由来および沿革

かつては總社町の光嚴寺末派であったが、現在は比叡山延暦寺末社である。開創は「寺院明細帳」では「不詳」とあるが、「国府村誌」によれば、「妙見寺縁起である花園星神記に、妙見社の草創は元正天皇の和銅8年(715)の秋、上野大掾藤原忠明が妙見様に1宿し夜半の靈夢に、冷水村の小さな池から首が赤く甲羅が真っ白な亀があらわれたことにより、年号が靈亀と改元されたと伝えられている」とある。また、承平5年(935)平将門が上野国に攻め込んだとき、群馬郡の妙見大菩薩に戦捷祈願をしたとある。本尊は釈迦牟尼仏、文殊菩薩、普賢菩薩である。

7月21日には妙見祭りで人々がにぎわう。本殿は昭和62年(1987)に市指定重要文化財となった。

本殿 (図55-2、表55-2、写55-2～55-4)

建造年代は棟札より天保13年(1842)である。正面3間、側面3間の入母屋造、平入で、建物から少し離れて側面から屋根を見ると、前流れの屋根が長く曲線を描くようにの

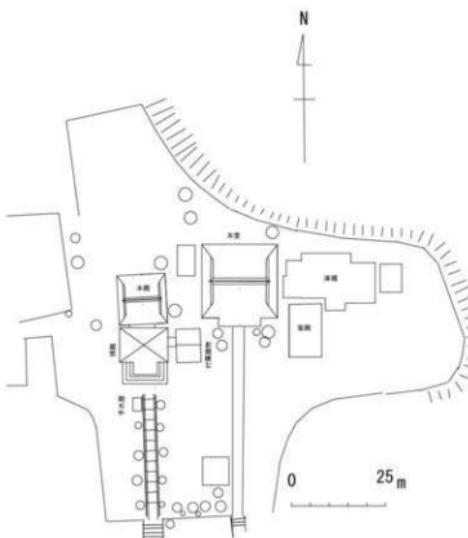


図55-1 配置図

表55-2 本殿

建造年代／根拠	天保13年(1842)／棟札	構造・形式	入母屋造(5.68m)、側面2間(5.49m)、向拝1間付、銅板葺
工 匠	大工: 関谷出雲守 彫刻: 長谷川源太郎(天保14年の作品)	基 础	基壇有、亀腹有、土台有、礎盤石有
軸 部	[身合柱]丸柱、下部六角 [向拝柱]方柱、地長押、差鴨居、頭貫、台輪	組 物	出三ツ斗、二手先、尾垂木 [向拝]三手先、海老虹梁
中 備	[身合]なし	軒	[正面]二軒繁垂木
妻 飾	蕉懸魚、二重虹梁大瓶束	柱 間 装 置	[身合正面]両折戻唐戸
縁・高欄・船障子	正面三方切目縁、擬宝珠高欄、背面端部脇障子	床	拭板
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇有、扇子有
塗 装	軒支輪、脇障子(檜彩色)	飾 金 物 等	雀金物、綠柄小口金物
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身合]内法長押: 地紋彫、軒支輪: 波、脚羽目: 桃園の聲い、藤原不比等と龍神、脇障子、軒下組物、軒下持造り [向拝]木鼻、手挟: 菊、柱: 地紋彫、水引虹梁: 絵様、裏: 若葉、海老虹梁が二重(西側: 鯉の滝登り、東側: 伊勢海老、棧戸戸)		



写55-2 正面



写55-3 側面



写55-4 組物 海老虹梁

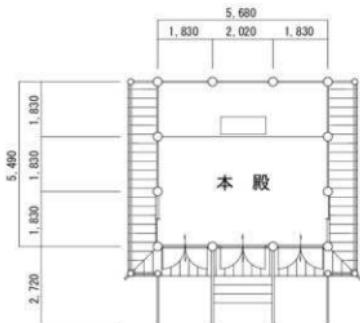


図55-2 平面図(本殿)

びていて、そのまま向拝の屋根となっている。向拝柱には地紋彫りがみられる。この地紋彫は、柱だけでなく、それ以外にも棧戸戸や、内法長押などにもそれぞれ別の模様で描かれている。向拝方柱の彫刻は絵様、裏目には若葉の模様が描かれている。透かし彫りの海老虹梁は二重とし、身合へ繋ぐ。内側の

虹梁は西側に鯉の滝登り、東側には伊勢海老がつく。身合正面には1間の棧戸戸がつく。組物には連続した卷斗がつく。棟札の建造年代を現わす特徴として、この透かし彫りの海老虹梁、及び連続した卷斗があげられる。また、彫刻は、手挟や絵様の繊細な彫刻は曲線美をうかがい知ることができる。その一方で、正面の軒支輪には高肉彫で優雅さを描き、木鼻には獅子や狛で莊厳な印象を受ける。更に腰組の先端(支輪)には渦文様が描かれ、更に組物最下段に透かし彫り彫刻がつく。屋根は銅板葺である。正面、側面を四方切目縁を廻らせ、更に高欄を廻し、端を擬宝珠高欄が立ち、階段からの登高欄と接続する。背部には脇障子が立つ。

拝殿(図55-3、表55-3、写55-5～55-7)

正面4間、側面3間の方形造、銅板葺である。2間の向拝を設け、木段4段に登高欄擬宝珠が付く。正面から側面には切目縁を廻す。身合角柱を地貫、差鴨居、頭貫で固め、地長押を廻らし、柱上部に台輪海老虹梁で向拝と繋ぐ。建物内部は1室で天井は

表55-3 拝殿

建造年代／根拠	18世紀後期	構造・形式	正面4間、側面3間、方形造、流造銅板葺1間、向拝付
工 匠	不明	基 础	基壇有、亀腹なし 基礎コンクリート造
軸 部	[身舎]角柱 [向拝]角柱	組 物	[身舎]大斗肘木 [向拝]拳鼻付出三ツ斗
中 備	[身舎]板、幕股	軒	一軒繁垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	引戸(板戸)
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、擬宝珠付登り高欄、高欄	床	板
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし、厨子有
塗 装	[身舎]内部北面、漆、板支輪	飾 金 物 等	[身舎]なし [擬宝珠]高欄
絵 画	格天井	材 質	桧、杉
彫 刻	[外部]虹梁(唐草絵様)、木鼻、板、幕股、支輪(波、貝)、軒	[内部]台輪上(松島) [向拝]水引虹梁(波)	



写55-5 正面



写55-6 海老虹梁 手鉄 木鼻



写55-7 格天井絵図

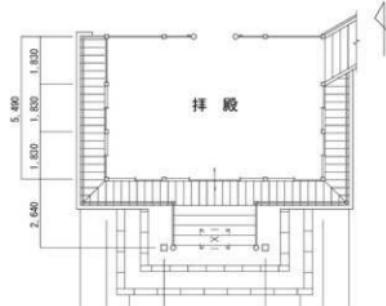


図55-3 平面図(拜殿)

格天井、阿形像・大黒天像を設置する。この格天井に描かれている104枚の絵は明治6年(1873)に地元壇信徒が奉納したとあり、板絵の中の1枚にその日付が記されている。拜殿は、北側に中央1間で、幣殿に接続し、そのまま本殿に続く。建造年を示唆する特徴として、正面水引虹梁のレリーフや海老虹梁の唐草絵様の文様などの彫刻があり、棟札が無く建造年を特定することは不可能であるが、18世紀後期と考えられる。

まとめ

日本三妙見の妙見寺はいくつもの創建伝記がある長い歴史を持つ寺である。また、「国府村誌」によると、「本殿の美事な彫刻は熊谷の人長谷川源太郎の天保14年(1843)の作(『国府村誌』p605 昭和43年)」であると書かれている。年代からすると、榛名神社の双龍門を手掛ける前の作品を見られる貴重な建築物であるといえる。全体的に彫刻が施され、組物下段の透かし彫りや本殿内部火打ち材の上にも鳥など透かし彫り彫刻が置かれている。

本殿内部は須弥壇があり、その奥に厨子があり、木彫り極彩色金泥立像の龜の上に乗った妙見菩薩がご本尊としておられる。足もとには蛇が巻き付いている。秘仏といわれ、北斗七星信仰に基づく菩薩様である。

(堤 雅之)

【参考文献】

- 『妙見寺誌』あさを社 平成16年
- 『群馬郡史帖』みやま文庫 平成8年
- 『ぐんまのお寺 天台宗2』上毛新聞社 平成12年
- 『上野国寺院明細帳2』群馬県文化事業振興会 平成7年
- 『上州のお宮とお寺 寺院篇』p244 新井哲夫 上毛新聞社 昭和53年

57 常行院〔じょうぎょういん〕

表57-1

寺院名	龜陀落山常行院	所在地	高崎市吉井町長根甲474
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 常行院(管理:吉井町恩行寺)
主本尊	秘仏千手觀世音菩薩	仏事	不明
創立・沿革	寺伝によると世良田長楽寺末寺とする。開祖は文保2年(1318)であるが、觀音堂の再建は寛延2年(1749)の棟札がある。堂内に康暦2年(1380)作という秘仏千手觀世音が安置されており、昔より袂觀音として人々に親しまれて来た。		
文化財指定	常行院觀音堂(市重文 平成7年5月)、常行院のラカンマキ(県天記 平成7年3月)		

位置・配置(図57-1、写57-1)

常行院觀音堂は吉井町市街から南、小高い丘を登った、南東斜面に建つ。斜面に沿って南に本堂、続いて護摩堂、その北に觀音堂が建つ。

由来および沿革

寺伝によると世良田長楽寺末寺とする。開祖は文保2年(1318)であるが、觀音堂の再建は寛延2年(1749)の棟札がある。堂内に康暦2年(1380)作という秘仏千手觀世音が安置されており、昔より袂觀音として人々に親しまれていた。この觀音堂は平成7年(1995)5月24日に高崎市指定重要文化財となっている。



図57-1 配置図



写57-1 境内

かんのんどう 觀音堂(図57-2、表57-2、写57-2～57-6)

この觀音堂は寛延2年(1749)建築の棟札がある。正面3間、側面3間、藻縁の上に銅板で覆う寄棟屋根とし、軒は二軒半繁垂木としている。正側面及び背面の四方に博縁を廻らし、脇障子は無い。組物は尾垂木を付けた三手先で中備は彫刻付の幕股、三手先の丸桁の間は彫刻された支輪と、小斗の詰組としている。

基礎は自然石の石場建で、柱は丸柱とし、柱間は舞良戸を模した建具で、側面は正面寄の2カ所は板戸、残りの1カ所は下見板張である。背面両側は下見板張で中央は板戸が付く。切目長押、内法長押を設け、柱上部は棕形で台輪を受け、頭貫で繋ぐ。台輪の柱先は化粧加工され、下に渦の彫られた木鼻が付く。

内部は大きく一室空間で、正面入口側に24枚の板

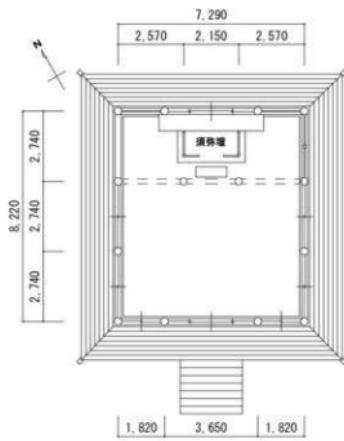


図57-2 平面図(本堂)

張りの室があり、奥を奥行2.74m、巾7.29m、12畳の仏間とし、2本の来迎柱で仕切られており、本尊を安置する。両室間の来迎柱は径280mmの円柱とし、柱頭で台輪、頭貫で繋ぎ、出三斗の組物で丸桁を受ける。中備は幕股と撥東で、上に連組と蛇腹支輪で受け、天井は格天井で間に植物画が描かれている。

来迎柱は金襴巻とし、柱上部、頭貫、台輪、幕股すべてに縹緥彩色されている。虹梁は唐草絵様で彫られ、黒と朱の漆で塗られており、その上に天女の描かれた欄間が掛けられている。

奥の仏間に正面に須弥壇が置かれ、その上の厨子の中に本尊の千手観音が安置されている。仏間の組物は出三斗で、中備は撥東と連組となる。天井は竿縁天井でそれらは朱に塗られた痕跡がある。

まとめ

この観音堂は、外部は中備の幕股内の彫刻、丸桁上の小斗の連続、彫刻支輪との混在、柱上部の大斗など大らかな造りとなっている。また内部は柱の金襴巻や、虹梁の縹緥彩色、格天井の絵図などきらびやかに彩色されて豪華な造りとなっている。建造年については寛延2年(1749)の棟札がある。中備の幕股形状、幕股内部の彫刻が出ていないこと、石場建ての柱脚で土台は無いこと、外部の木鼻の唐草模様などからほぼ棟札通り18世紀中期の建築とみて良い。また外部の組物、内部の彩色など建築的価値は高い。

(羽鳥 悟)

【参考文献】

『多野郡誌』多野郡教育会 昭和2年

写57-2 観音堂

建造年代／根据	寛延2年(1749)／棟札	構造・形式	正面3間(7.29m)、側面3間(8.22m)、寄棟造、妻入、銅板葺
工 匠	不明	基 础	自然石基礎
軸 部	〔身舎〕丸柱、切目長押、内法長押	組 物	〔身舎〕尾垂木付三手先 〔内部〕二手先
中 備	〔身舎〕幕股 〔内部〕撥東	軒	二軒半繁重木、彫刻板支輪
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	正面舞良戸、側面板戸
縁・高欄・脇障子	四方博縁	床	板張
天 井	蛇腹支輪、折上格天井	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇・厨子あり
塗 装	〔身舎〕朱塗(外部柱) 〔内部〕朱塗全体、極彩色(頭貫台輪幕股)、縹緥彩色(来迎柱)、金襴巻(来迎柱)、漆塗(虹梁朱、黒、格子黒)	飾 金 物 等	なし
絵 画	天井画(植物)、欄間(天女)	材 質	檜、楡
彫 刻	〔身舎外部〕木鼻、支輪彫刻 〔内部〕本幕股		



写57-2 正面



写57-3 組物



写57-4 内部



写57-5 彫刻



写57-6 天井絵



写57-7 棟札

58 仁叟寺 [じんそうじ]

表58-1

寺院名	美祐山公田院仁叟寺	所在地	高崎市吉井町神保1295
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 仁叟寺
主本尊	執事弘尼佛	仏事	年賀題り(1月元旦)、大節分会(2月3日)他 多数
創立・沿革	寺伝に奥平城主の奥平貞訓によって、下奥平九台に、室町時代の応永元年より正長元年(1394~1428)にかけて創建されたと伝える(『天祐山仁叟寺誌』平成19年(2007))。		
文化財指定	天祐山公田院仁叟寺(市重文 平成17年3月)、仁叟寺のカヤ(県天記 昭和27年11月)、仁叟寺のムク(市天記 昭和52年3月)、石造薬師如来座像(神保)(市重文 平成元年2月)		

位置・配置(図58-1、写58-1)

国道254号線を富岡方面に向かい、吉井市街地から高崎神流秩父線を南に折れ800mほどにある。

南懸門をくぐり北に向かうと右に手水舎、左に座禪堂を見ながら2層建ての山門をくぐる。

左に鐘楼、右に六角の古照堂を見、正面に本堂となる。本堂奥は開山堂で右は檀信徒会館「欣光閣」がある。右の高台に文殊堂、薬師堂、延寿堂などが並び堂々たる伽藍配置である。



図58-1 配置図



写58-1 境内

由来および沿革

曹洞宗雙林寺(渋川市)4世の高僧商正禪師を請して開山、もとは奥平貞訓が下奥平公田に創建し大永2年(1522)に現在の神保に寺を移し開祖。開山以来、長根城主、宮崎城主奥平、吉井城主菅沼、地頭溝口氏、長谷川氏などの帰依と手厚い保護を受け、三代將軍家光の代に朱印25石を賜る。明治24年(1891)、内務省より県内宗派の中から長楽寺と仁叟寺が古社寺保存の指定を受けている。市指定として関係文書ならびに寺宝は多いが、伝承物として参考になる。また寺内に奥平の開祖塔、長谷川淡路守、讚岐守、溝口豊前守、などの江戸初、中期の地頭の石塔がある。

本堂(図58-2、表58-2、写58-2~58-7)

正面11間側面6間の入母屋瓦葺きの大伽藍で、向拝は無く平入、南面する。以前は草葺きであったが、昭和31年(1956)、現在の瓦葺きに替えられた。

軒はせがい造でその先に二軒半繁垂木で、草葺きの名残とみられる。縁は西面のみにあるが、後補である。軸部は角柱で、足固貫、腰貫、頭貫を通し、柱上に大斗さらに肘木で桁を受ける。中備は無く漆

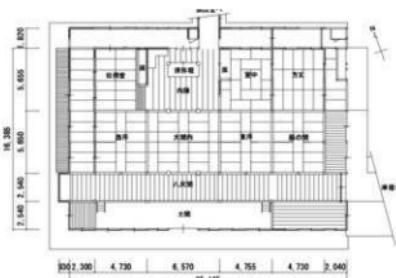


図58-2 平面図(本堂)

表58-2 本堂

建造年代／根拠	18世紀前期／建築様式	構造・形式	正面(25.13m)、側面(16.39m)、入母屋造、平入、瓦葺
工 匠	[大工]不明 [彫師]群馬郡室田 清水谷仁右衛門貞辰	基 础	切石基礎
輪 部	[身舎]角柱、切目長押、内法長押	組 物	[外部]大斗肘木 [内陣]二手先
中 備 なし		軒	二軒半繁垂木
妻 飾	二重虹梁大瓶束	柱 間 装 置	正面板戸、両側面ガラス戸
縁・高欄・脇障子	西面のみ縁	床	内陣板張。他疊敷
天 井	[内陣他]竿縁天井 [外陣]折上格天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇
塗 裝	[内陣]素木、極彩色(板支輪彫刻) [外陣]極彩色(彫刻欄間)、朱(斗、虹梁)、黒(台輪、格)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[内陣]板支輪彫刻 [外陣]欄間彫刻、虹梁(唐草絵様)		



写58-2 全景



写58-3 内部 土間・広縁



写58-4 外陣・内陣



写58-5 虹梁・彫刻



写58-6 欄間彫刻



写58-7 欄間彫刻裏墨書

喰壁とする。中備は正面に火灯窓様の連続窓とし、側面は硝子戸である。

平面は基本6間取で、さらに東に脇の間が付、庫裡につながる。南正面土間を上ると、広縁となり大間内、奥に内陣、左に西序、右に東序、さらに脇の間となり、それぞれに縁を持つ(室名は「仁叟寺誌」内本堂平面表記に倣った)。

内部床は正面八尺間廊下を板張り、他は疊敷、天井は外陣のみ折り上げ格天井とし、他は竿縁天井であるが彩色はされていない。組み物は外陣及び内陣の正面のみ出組としている。中備を幕股とし、その上に彫刻板支輪を置く。内陣と外陣の境に在る丸柱を繋ぐ虹梁には、唐草絵様が彫られているが、卷若葉は二葉で、渦も一重と簡素である。正面丸柱上には、龍の欄間彫刻が嵌め込まれて、彩色されてい

る。その裏に「寛政九年(1797)群馬郡室田 大工 清水谷仁右衛門貞辰彫之」とある。この龍の欄間彫刻の作者と、年代と思われるが、本堂の建設より新しく後補とみるのが妥当である。

本堂の建造年代を示す棟札等は発見されていないが、虹梁の唐草、渦の巻き具合などから、18世紀前期の建造とみられる。

山門 (図58-3、表58-3、写58-8~58-10)

山門は3間3戸の楼門建築である。屋根は瓦葺きで、軒を二軒疊垂木とする。組み物は下層、上層共二手先とし、中備は下層、上層共幕股で、内側は間斗束とする。妻飾りは二重虹梁の大瓶束とする。彫刻は幕股内部と木鼻、虹梁の唐草絵様と上層の軒支柱に見られる。

表58-3 山門

建造年代／根拠	明和元年(1764)／棟札	構造・形式	3間3戸楼門、正面(7.30m)、奥行3間(6.10m)、入母屋造、平入、瓦葺
工 匠	[大工]吾妻郡大坂村 田村傳兵衛	基 础	切石基礎
軸 部	丸柱、虹梁	組 物	出三斗
中 備	幕板	軒	二軒疊垂木
妻 飾	大瓶束	柱 間 裝 置	【上層】正面棟唐戸、両脇火灯窓、側面舞良戸、両側面背面板張
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、擬宝珠高欄	床	【上層】板張
天 井	井 [下層]鏡天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗	飾 金 物 等	なし
絵 画	井 [下層]天井画(絵模様)	材 質	檜
彫 刻	井 [下層]木鼻・虹梁(唐草絵様) 〔上層〕木鼻・虹梁(唐草絵様)		



写真58-8 全景



写真58-9 外部



写真58-10 内部

当建物の建造年として、明和元年(1764)の棟札が残っている。また建造前に信者に寄進を募ったと考えられる「山門建立勧化牒」(宝曆11年(1761)) が

残っていること、また唐草の渦巻具合などから、明和元年の建築とみてよい。

惣門 (図58-4、表58-4、写58-11~58-12)

惣門は基本的に左右の本柱の内側に控え柱を建てて

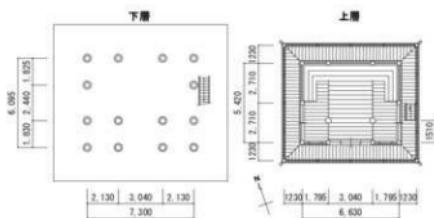


図58-3 平面図(山門)

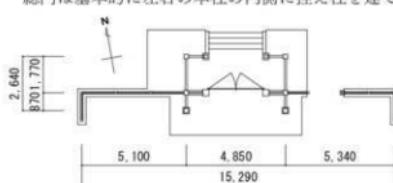


図58-4 平面図(惣門)

表58-4 惣門

建造年代／根拠	寛文3年(1663)／棟札	構造・形式	1間1戸榮医門、正面(4.85m)、側面(2.64m)、切妻造、平入、瓦葺
工 匠	不明	基 础	自然石基礎
軸 部	[身舎]丸柱、切目長押、内法長押	組 物	なし
中 備	なし	軒	一軒疊垂木
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	正面板戸、側面板張
縁・高欄・脇障子	なし	床	なし
天 井	井 なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	刻 蕪懸魚		



写58-11 全景



写58-12 小屋組



写58-13 棟札

た「薬医門」であるが、南側に3本の柱を建てて強度と扉の横を確保した形状をし、両袖に漆喰の壁で固めている。屋根は瓦葺きで少し照っている。切石基壇の上に、切石礎石を置き、その上に柱が建つ。全体に装飾は無く質素な造りとなっている。

この門には寛文3年(1663)年の棟札を残している。全体の造りから棟札通り17世紀中期の建造とみてよい。

まとめ

仁叟寺は数多くの堂、塔を配する大伽藍である。また数々の文書、宝物を保存する古刹である。

山門の建造年代は明和元年(1764)示す棟札が残っており、また建築の寄進を募った「山門建立勸化牒」宝暦11年(1762)が残っている。また唐草の渦の

巻具合や若葉の様子、臺股の形状などから山門の建造年代は明和元年とみてよい。本堂の建造年代を示す棟札等は現存していない。しかし山門が明和元年の建築とすると、本堂の唐草絵様は少し古い形状を示しており、本堂は18世紀前期の建築の可能性が高い。

惣門には寛文3年(1663)の棟札が確認されており、年代を特定する彫刻等は無く簡素な造りで、全体の意匠から17世紀中期の建築も妥当であろう。また山門西に建つ鐘楼も古く、唐草絵様の状況などから19世紀前期の建造とみられる。

(羽鳥 悟)

【参考文献】

『天祐山仁叟寺誌』仁叟寺誌編集委員会 平成19年

59 (岡之郷)観音寺 ((おかのごう)かんのんじ)

表59-1

寺院名	白草山真如院觀音寺	所在地	藤岡市岡之郷甲439
宗派	真言宗	所有者・管理者	宗教法人 観音寺
主本尊	千手觀音菩薩、如意輪觀世音菩薩	仏事	不明
創立・沿革	正治2年(1200)に法印快存された。当時は現在地より東方の神流川に近い大門に在った。しかし天正10年(1582)の神流川合戦において伽藍は島友に帰した。その後文禄3年(1594)に、法印盛長によって現在地へ移されたとされる(藤岡市の民家と寺社洋風建築)藤岡市教育委員会 昭和55年。		
文化財指定	なし		

位置・配置 (図59-1、写59-1)

観音寺は藤岡市北部、高崎市新町との境で、関越自動車道の側道から西に向かって100m程に位置する。当寺の伽藍は東から仁王門、中門、楼門(円通閣)、観音堂の順に西に向かって直線状に配置されている。本堂はその軸から外れ北側に位置してい

る。観音堂は当初、地元の有力者である新井氏の鬼門除けとして建てられたといわれている。平成24年の関越自動車道のバス事故の現場に近いこともあり、その供養塔が本堂脇に建てられている。

由来および沿革

社伝によると正治2年(1200)に法印快存により創建され、山号を白草山真如院という。当初、観音寺は現在地より東方の神流川に近い大門に在った。しかし天正10年(1582)の神流川合戦において伽藍は島友に帰した。その後、寺地は文禄3年(1594)に法印盛長によって現在地へ移されたと伝える。

仁王門 (図59-2、表59-2、写59-2~59-4)

3間1戸單層切妻棟瓦葺で、軒は二軒疊垂木である。屋根の棟瓦は平成23年(2011)東日本大震災の際に瓦が落ち、棟瓦に改修されたものである。

軒は二軒疊垂木とし、軸部は円柱で、足固貫、腰貫、頭貫を通し、頭貫端には木鼻を付ける。柱間は正面両脇が格子で、中に一対の仁王像が納められている。両側面背面は組込の板張とする。組物は身舎を出三斗で、中備は正面、側面共間斗東で、上に板幕股で桁を支える。妻飾は二重虹梁を板幕股で受け



図59-1 配置図



写59-1 境内

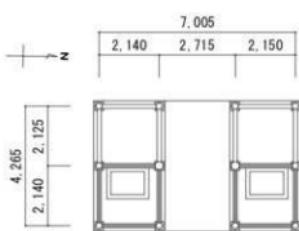


図59-2 平面図(仁王門)

表59-2 仁王門

建造年代／根拠	17世紀後期／建築様式	構造・形式	3間1戸四脚門、正面(7.01m)、側面(4.27m)、側妻造、平入、棟瓦葺
工 匠	不明	基 础	切石基礎
軸 部	丸柱、貫	組 物	〔身舎〕出三斗
中 備	〔身舎〕棊股	軒	二軒疊垂木
妻 飾	二重虹梁、板棊股、大瓶束	柱 間 裝 置	正面格子、両側面背面厚板嵌込
縁・高欄・脇障子	なし	床	なし
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	〔身舎〕素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	〔身舎〕木鼻、懸魚		



写真59-2 全景



写真59-3 小屋組



写真59-4 組物 虹梁

上に間斗束とする。彫刻は特になく、木鼻と棊股内に花びらの彫刻がある。虹梁の彫刻は風化が進んでいるが判別はでき、また妻の二重虹梁に残る唐草絵様から、建造年代は元禄8年(1695)と伝えられている。その理由は、大正13年(1924)に仁王像の修理を行った時、像の体内から発見された文書によることがある。その文書によると、仁王門は栗須村の山下善右衛門正周により寄進建立されたもので、仁王像は元禄8年(1695)に京七条の大仏師運慶派清水運仁により、制作されたものであるという。妻飾の二重虹梁を受けている板棊股や妻飾、全体に質素で

簡素な意匠等から17世紀後期の建立と推定する。

樓門 円通閣 (図59-3、表59-3、写59-5～59-7)

樓門は3戸1間樓門造、瓦葺入母屋屋根で二軒繁垂木とする。組物は下層、上層とも二手先とし中備は初層、上層共詰組。間を彫刻で埋める。妻飾りは虹梁、大瓶束である。彫刻は軒支輪、上層獅子鼻、虹梁などに見られる。虹梁の唐草絵様は刻線彫で巻きは緩い。

建造年代は7世舜誉代の天明年間(1781～1789)に建立されたものであると伝えられている。虹梁に見

表59-3 樓門(円通閣)

建造年代／根拠	18世紀後期／建築様式	構造・形式	3間1戸楼門、正面(7.53m)、側面(4.43m)、入母屋造、平入、瓦葺
工 匠	不明	基 础	切石基礎
軸 部	丸柱、切目長押、内法長押	組 物	〔下層〕二手先 〔上層〕二手先
中 備	〔下層〕詰組 〔上層〕詰組	軒	二軒繁垂木
妻 飾	虹梁、大瓶束	柱 間 裝 置	〔上層正面〕板戸 〔上層両側面背面〕板戸・板張
縁・高欄・脇障子	〔上層〕四方大床、跳高欄	床	板張
天 井	〔下層〕なし 〔上層〕なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	〔下層〕朱塗、支輪(極彩色) 〔上層〕朱塗、極彩色(支輪・獅子鼻)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	〔下層〕木鼻、支輪彫刻 〔上層〕獅子鼻、支輪彫刻		



写59-5 全景



写59-6 組物 虹梁 彫刻



写59-7 組物 彫刻

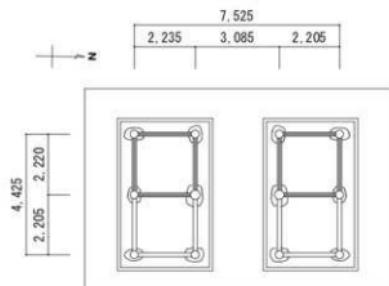


図59-3 平面図(楼門円通閣下層)

る唐草絵様の巻き具合、まだ籠彫になっていない木鼻などに江戸中期の特徴を窺うことが出来る。正面の虹梁に文化6年(1809)の鰐口をかけている。以上のことから18世紀後期の建立と推定する。

まとめ

境内は参道から仁王門、中門、楼門（円通閣）、その奥に観音堂と直線的につながり、その奥に墓地となっている。南に鐘楼、北に新築された本堂、庫裡、関越バス事故の供養塔などが並ぶ、広大な伽藍である。

正面の仁王門が最も古く、17世紀後期の建造と推定され、続いて楼門の18世紀後期の建造と推定されるなど、古くからこの地区の鎮守とされるにふさわしい、形態と品格を保っている。

(羽鳥 悟)

【参考文献】

『藤岡市の民家と社寺洋風建築』藤岡市教育委員会 昭和55年

『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会 昭和54年

60 龍源寺（りゅうげんじ）

表60-1

寺院名	嶺嶽山龍源寺	所在地	藤岡市藤岡甲317
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 龍源寺
主本尊	勢至菩薩	仏事なし	
創立・沿革	龍源寺は山号を嶺嶽山といい、信州佐久郡内山村正安寺の末寺である（『藤岡市の民家と社寺洋風建築』藤岡市教育委員会）。		
文化財指定	なし		

位置・配置（図60-1、写60-1）

龍源寺は藤岡市内の八高線藤岡駅西方500m程、市街地前橋長瀬線に接し鬼石方面に向かい、右手に位置している。境内地は正面南向きに勢至堂（現在は本堂として使われている）があり、その右手奥に客殿があり、勢至堂左奥に庫裏、その南に御堂がある。

由来および沿革

龍源寺は信州佐久郡内山村正安寺の末寺である。龍源寺の山号は依田（芦田）康國（依田康貞の兄）の戒名、康國寺殿嶺巖良雪大居士より嶺巖とされる。勢至堂の名称は芦田康貞の持仏である勢至菩薩を安置したことによる。また三夜堂（三夜様）とも呼ばれており、かつては毎月23日を縁日にして

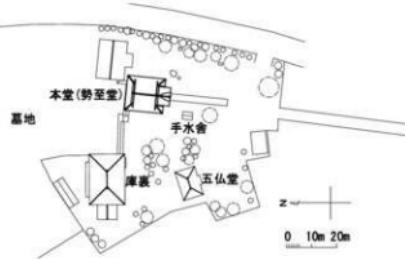


図60-1 配置図



写60-1 境内

いた。当寺は14世諱聞大和尚の執筆した寛政6年（1794）の「靈簿」を残していると伝える。その中に勢至堂は天明6年（1786）に建立されたと記されている。

勢至堂（図60-2、表60-2、写60-2～60-7）

境内正面に勢至堂は位置し南面する。平面は正面3間、側面2間の外陣があり、その奥に左右1間ずつ広がった5間の間口で、奥行2間の内陣が付く。瓦葺入母屋屋根で妻入、正面には1間の向拝が付き、銅板瓦棒葺の唐破風とする。軒は二軒疊垂木で、手鉄を一対付ける。正面側面2間に大床を廻らし、登高欄とともに擬宝珠高欄とし脇障子は無い。身舎は内陣柱のみ円柱で他は角柱で向拝柱も角柱とし、基礎は石組基壇の上に石場建とする。柱間は正面を硝子入の板戸で両脇を舞良戸とし、他は漆喰壁とする。組物は身舎は出組とし、向拝は連三斗とする。水引虹梁は二重虹梁で上に彫刻が嵌込まれている。向拝と身舎を結ぶ繋虹梁の上に小さく海老虹梁

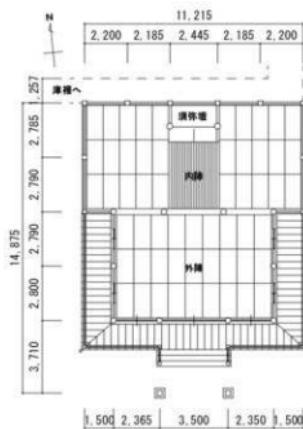


図60-2 平面図(本堂「勢至堂」)

表60-2 勢至堂

建造年代／根拠	18世紀後期／建築様式	構造・形式	正面3間(8.21m)、側面3間(12.42m)、背面5間(11.21m)、入母屋造、妻入、向拝1間廻 破風付、銅板葺
工 匠	[大工]越後國三島郡常樂寺村の産 當山勢至 堂棟梁生田塗之頭 大工傳吉／墓石	基 础	石積基礎、切石基礎
軸 部	[身舎]丸柱、方柱、虹梁、土台付 [向拝]方柱、 水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]出三斗 [向拝]連三斗
中 備	[身舎]幕股 [向拝]彫刻	軒	二軒疊垂木
妻 飾	虹梁、大瓶束(笈形付)	柱 間 裝 置	正面板戸、両脇舞良戸、側面背面漆喰壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、登高欄	床	疊敷一部板張
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇、扇子
塗 装	[身舎]墨木 [向拝]墨木	飾 金 物 等	なし
繪 画	[内部格天井内]植物絵	材 質	桼、檜
影 刻	[身舎]木鼻、本幕股、内部支輪、欄間、虹梁(唐草絵様) [向拝]木鼻、象鼻、幕股内彫刻、虹梁(唐草絵様)		



写60-2 全景



写60-3 虹梁 木鼻



写60-4 海老虹梁



写60-5 内陣



写60-6 天井絵 組物



写60-7 欄間彫刻

がある。海老虹梁は反りが大きく、端を笈形付の大瓶束が支えている。

身舎の中備は正面を彫刻付の幕股で、他の面は漆喰壁とする。入母屋の妻飾は虹梁に笈形付の大瓶束とする。繫虹梁、海老虹梁とも唐草絵様が彫られている。水引虹梁、海老虹梁とも唐草絵様は浮かし彫で波模様が彫られている。

彫刻は身舎には無く、向拝には獅子鼻と狛、幕股の中、水引虹梁の上、手綴とする。内部は欄間彫刻と支輪に彫刻がみられる。内部外部とも素木で内部格天井に花鳥の絵柄が嵌め込まれている。

まとめ

勢至堂は正面一室の外陣があり、両脇に縁が付

き、奥に縁の巾分の内陣が付く。この形態は西本願寺大師堂などに見られる浄土真宗の本堂に近い。また向拝も出が大きく繫虹梁で、中間に間斗束、そこから本堂に海老虹梁に繋がるなど、近隣の曹洞宗の寺院には見られない形態を持つ。

勢至堂の建造年代については、虹梁の溝の浮かし彫、手綻、笈形の彫刻、幕股の浮かし彫刻など、18世紀中期以前には遡らず、靈薄にある天明6年(1786)の建築が妥当とする。

(羽鳥 悟)

【参考文献】

『藤岡市の民家と社寺洋風建築』藤岡市教育委員会 昭和55年

61 広沢寺（こうたくじ）

表61-1

寺社名	高見山廣沢寺	所在地	藤岡市矢場甲1148
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 广沢寺
主本尊	観音半跏佛	仏事	不明
創立・沿革	信州佐久郡平原村正順寺の末寺である。天正2年(1574)の創建で開基は甲州の黒沢兵部丞、開山は誘翁教訓和尚である。(「藤岡市の民家と社寺洋風建築」藤岡市教育委員会)		
文化財指定	なし		

位置・配置 (図61-1、写61-1)

広沢寺は藤岡市南部、三名湖に近い矢場池に隣接している。参道から正面に本堂があり南面し、右に庫裏、裏に墓地と続く。

由来および沿革

広沢寺は信州佐久郡平原村正順寺の末寺である。天正2年(1574)の創建で、開基は甲州の黒沢兵部丞、開山は誘翁教訓和尚である。

本堂 (図61-2、表61-2、写61-2~61-6)

本堂は境内正面に位置し南面する。平面は正面7間、側面6間、瓦葺き寄棟屋根で平入、正面に向拝は無い。軒は二軒疎垂木で、縁は無い。身舎は角柱で基礎は自然石に石場建とする。柱間は改修による硝子入のアルミサッシで他はサイディング壁とする。

平面は南出入口を入ると、土間その先に広縁、更に17.5疊の外陣、14疊の内陣と続く。両側に10疊の脇陣を持つ6間取の形態で、奥には後補の位牌堂が続く。

外部は向拝も無く、組物も無く、柱頂部の船肘木としている。内部は出三斗の組物、幕殿、格天井、渦巻絵様入の虹梁が在る。欄間は簾欄間で全体的に簡素な造りである。

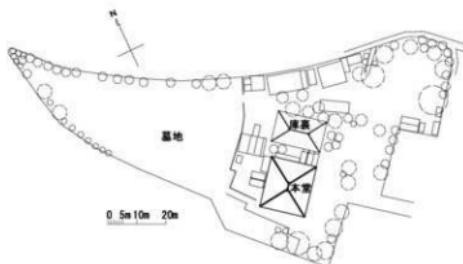


図61-1 配置図



写61-1 境内

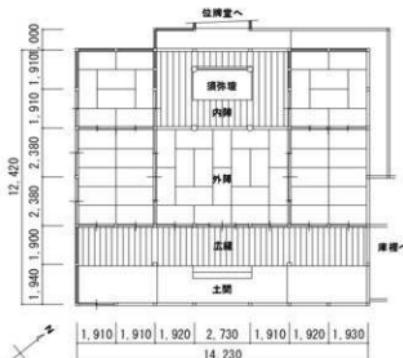


図61-2 平面図(本堂)

写61-2 本堂

建造年代／根拠	寛政5年(1793)／棟札	構造・形式	正面7間(14.23m)、側面6間(12.42m)、寄棟造、平入、瓦葺
工 匠	[大工]群馬郡新井の住人 浅見出羽藤原光命 ／棟札	基 础	自然石石場建
輪 部	[身舎]角柱、舟肘木	組 物	[身舎内部]舟肘木
中 備	[身舎]漆喰壁	軒	二軒疊垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	正面アルミサッシ、側面アルミサッシ
縁・高欄・脇障子	なし	床	畳敷一部板張
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇
塗 裝	[身舎]素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜、楡
彫 刻	[身舎内部]虹梁(唐草絵様)		



写61-2 全景



写61-3 土間 幸縁



写61-4 外陣 内陣



写61-5 内部



写61-6 天井



写61-7 横間

まとめ

本堂の建造年代については、寛政5年(1793)の棟札がある。棟札は群馬郡新井の住人紀伊殿御棟梁門派に属する浅見出羽藤原光命で、木挽きは水戸の住人長谷川国右衛門義忠と記されている。

正面の虹梁の渦の巻き具合、唐草模様の形態、石場建の基礎などから、棟札通り寛政5年とみて良い。

(羽鳥 悟)

【参考文献】

『藤岡市の民家と社寺洋風建築』 藤岡市教育委員会 昭和55年

64 浄法寺 [じょうぽうじ]

表64-1

寺社名	廣巖山般若淨土院淨法寺	所在地	藤岡市浄法寺甲1094
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 淨法寺
主本尊	阿彌陀如來	仏事	花まつり(4月第1日曜日)、伝教大師報恩法要(8/18)他
創立・沿革	聖徳太子草創の古刹で、聖武天皇の勅願により鑑真和尚の高弟、道忠禪師の開祖といわれる。天台宗の開祖である伝教太師(最澄)が弘仁8年(817)には、東國布教のためこの寺を訪れ、民衆に教えを説いたといわれる、名刹である(『多野郡誌』多野郡教育委員会 1980年)。		
文化財指定	浄法寺相輪櫓(市重文 昭和59年4月)、道忠禪師供養塔(市重文 昭和60年11月)		

位置・配置 (図64-1、写64-1)

浄法寺は、藤岡市南方、鬼石町浄法寺に位置している。県道13号線前橋長瀬線を南に向かって鬼石町の入口、西側に所在する。廣巖山般若淨土院と号し、または縁野寺と称し、天台宗で本尊は阿彌陀如來である。

境内は前橋長瀬線に沿い西側にあり、門、本堂は東に向いている。当寺はかつて、東の神流川、西は300m先の山裾まで境内地とされていた。道路脇に山門と通用門が並び、山門をくぐり石段を登り参道

を進むと正面に本堂、左に玄関、さらに左に庫裏となっている。本堂右に伝教大師御廟堂拝殿、奥に伝教大師御廟堂がある。その右奥に高さ7m伝教大師の銅像が建っている。それらの建つ境内右、道路を挟んで墓地があり、そこに市指定重要文化財の相輪櫓(昭和59年4月1日指定)、道忠禪師供養塔(昭和60年11月1日指定)がある。さらに長瀬線の東に八功德池と呼ばれる40m四方ほどの池があり、畔に弁天堂がある。

由来および沿革

聖徳太子草創の古刹で、聖武天皇の勅願により鑑真和尚の高弟、道忠禪師の開祖と言われる。一切経の經典を所蔵する寺として全国にも知られた寺である。比叡山延暦寺の直末で、天台宗の東國布教の中心道場であった。開祖である伝教大師(最澄)が弘仁8年(817)には、東國布教のためこの寺を訪れ、民衆に教えを説いたといわれる。その後して境内に、全国6カ所(最澄坐命中に建てられたのはこの他2カ所)の法華經納經の所在地に「法華經」を納めた宝塔を建てた。現在の相輪櫓は寛文12年(1672)に改造されたもので、青銅製で高さ5.3mである。

戦国時代、上杉、北条の戦いに巻き込まれ、天文21年(1552)2月21日、山門を残し宝塔伽藍ごとく焼き払われた。その後弘治2年(1556)舜祐和尚により再建されたといわれる。

歴史のある古刹の当寺には、数多くの貴重な物品が保存されている。また群馬県内の天台宗256寺の代表寺として数々の大師関連の行事が現在も行われている。



図64-1 配置図



写64-1 境内

本堂 (図64-2、表64-2、写64-2~64-6)

本堂は、棟札により文化元年(1804)に、17世懶大僧都法印勇雄により造営されたとされる。

棟梁は江戸谷中天王寺五重塔(昭和32年(1957)放火により焼失)、などを建てた近江高島出身大工八田清兵衛である(清兵衛は後に幸田露伴の小説『五重塔』のモデルとなった大工とされる)。脇棟梁は主に細工を担当した駒井半四郎、同じく脇棟梁として同様に天王寺五重塔造営に携わった清兵衛の弟、八田助四郎である。

正面5間(13.42m)、側面5間半(11.51m)の寄棟桟瓦葺で一軒疊垂木とし、正面に銅板葺の唐破風を乗せた向拝を付す。身舎柱は六寸角で面取が大

きく、長押と貫で固め、上部桁を絵模様の彫られた船肘木で受ける。基礎は切石基礎で土台が廻る。開口上部は漆喰塗で、腰は下見板張である。向拝柱は角柱、九寸三分で礎石上1m程加工銅板で覆う。唐草絵模様付の水引虹梁と海老虹梁が付く。組物は出三斗で同じものが中備に2組となる。彫刻正面は獅子鼻で横は狹鼻、手鉄は各組物毎に4カ所付く。中備は斗組間に龍の彫刻その上に二重虹梁と笈形付の大瓶束で、唐破風に兎毛通が付く。縁は南面にのみに在り、高欄脇障子は無い。

平面は正面に巾2.75mの板敷きの広縁で、奥に左右に巾3.83m16疊の室と、中央に巾5.76m24疊の室が並ぶ。各室中間に仕切は無く、全体は四間取であ

表64-2 本堂

建造年代／根拠	文化元年(1804)／棟札	構 造 ・ 形 式	正面5間(13.42m)、側面6間(11.51m)、背面8間、寄棟造、平入、瓦葺、向拝1間唐破風付、銅板葺
工 匠	[大工] 棟梁 八田清兵衛、脇棟梁 駒井半四郎、八田助四郎／棟札	基 础	切石基礎
軸 部	[身舎] 角柱、切目長押、内法長押 [向拝] 角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎] 舟肘木 [向拝] 連三斗、出三斗
中 備	[身舎] 漆喰塗 [向拝] 彫刻	軒	二軒疊垂木
妻 館	なし	柱 間 装 置	正面硝子戸、両側面硝子窓
縁・高欄・船脛子	南面のみ	床	板張、疊敷
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇・扇子
塗 装	[身舎] 素木 [向拝] 素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材	質 檜
彫 刻	[身舎] 虹梁(唐草絵様) [向拝] 水引虹梁・海老虹梁・手挾(唐草絵様)・獅子鼻		



写64-2 全景



写64-3 虹梁 木鼻



写64-4 内陣



写64-5 内部虹梁 組物



写64-6 脇間彫刻



写64-7 玄関正面

る。奥三室共床は中央を板敷きとし、周りを疊敷とする。各室の奥四尺は仏壇となっており、中央の室にはその前に須弥壇を置く。

天井は各室とも竿縁天井である。各室の仕切は敷居、鶴居はあるが建具は入っていない。欄間は広縁と中央の室の塀は彫刻欄間で、両側の室の塀は簾欄間としている。また両側の室と中央の室との塀は簾欄間を嵌める。正面広縁表側の柱間装置は両側に舞良戸を嵌め、中央は引分けの硝子戸さらにな側に引分障子となる。両袖は3本溝で外が雨戸、硝子窓、障子となる。北面は正面脇と同じ雨戸、硝子窓、障子である。南面のみ外の切目縁に出る雨戸、硝子戸、障子が付く。向拝の水引虹梁の彫刻も本堂と酷似するため、本堂と同時期の建造とみて良い。

本堂全体に質素であるが、工匠の高度な手技の判断通りである。また後世の改変も最小限で、建立時の状態をよく留めている貴重な遺構である。建造年代は唐草の巻具合、若葉の形状などから19世紀初期の建造で良いと判断する。

（図64-2、表64-3、写64-7）

正面12.23m、側面3.78mで、正面に間口4.72mの式台形式の玄関が付く。棧瓦葺入母屋妻入形式で両側に切妻屋根付で一軒疊垂木とする。入口の硝子戸の奥は10畳、左に8畳、右に八疊でここは奥行一尺五寸の床の間を持ち、接客に使用されている。奥は吹廻しの廊下で本堂と繋がっている。屋根は瓦葺妻入の入母屋屋根で、正面唐草絵様を彫られた水引虹梁がかかり組物は出三斗となっている。中備は詰組で天井は竿縁天井、妻飾りは二重虹梁に結綿付きの大瓶束、破風に繪付の錦懸魚が付く。

表64-3 玄関

建造年代／根拠	19世紀初期／建築様式(本堂と類似)	構造・形式	正面(12.23m)、側面(3.78m)、切妻造、平入、式台1間入母屋付、瓦葺
工 匠	不明	基 础	切石基礎
軸 部	[身舎]方柱、内法長押 [式台]方柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]不明 [式台]出三斗
中 備	[身舎]無 [式台]斗詰組	軒	一軒疊垂木
妻 餘	虹梁、大瓶束	柱 間 裝 置	正面硝子戸、両側面硝子窓
縁、高欄、脇障子	西面縁有	床	疊敷、板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	[身舎]素木 [向拝]素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[式台]水引虹梁(唐草絵様)		

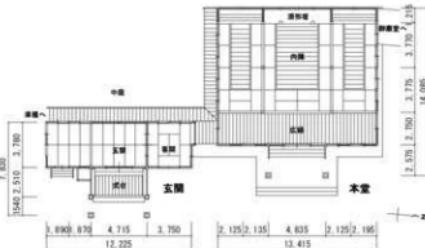


图64-2 平面图(本堂·玄關)

建造年代は、文化元年(1804)建造の本堂と似た水引虹梁の絵模様などから、19世紀初期とみて良い。

伝教大師御廟堂拝殿(図64-3、表64-4、写64-8~64-10)

この建物は本堂より北方に位置し、奥に在る伝教大師御廟堂の拝殿として建てられている。寺伝では、寛延3年(1750)の建造となっているが、水引虹梁の絵模様が本堂より装飾的であること、獅子鼻が横から出て正面に向く形などから見ると、本堂の文化元年(1804)よりは後の建造で、江戸末期、19世紀前期であると推定する。

桁行6.56m、梁間4.77mの入母屋平井入棟瓦葺で、二軒疎垂木とし、正面に流向拌を付す。身合柱は六寸角で面取が大きく、三方を長押と貫で固め、正面に絵模様が彫られた虹梁とする。正面に4本引の硝子入棟唐戸とし、両脇は引違の舞良戸で、両側侧面の正面通りのみ舞良戸で他は貫現しの漆喰塗である。切目縁は正面と側面の正面寄1間に付き、高

欄、障子は無い。妻飾は出三斗で支える二重虹梁で結綴付大瓶束とする。

向拝柱は角柱、六寸六分で自然石に載る。唐草絵模様付の水引虹梁と海老虹梁が付く。組物は出三斗で中備は無い。彫刻は横から正面を向く獅子鼻で、手鉄は各組物毎に2カ所付く。

平面は南北6.56m、東西4.77mの板敷の一室で、西面伝教大師御廟堂を望む奥に祭壇があり、両脇に仏壇が祀られる。天井は竿縁天井で壁は漆喰塗とする。内部は床壁天井共、後世に改修が施されているが、全体は建設当時の形状を留めている。

伝教大師御廟堂 (図64-3、表64-5、写64-11~64-13)

この建物は伝教大師の木像が安置されており、本堂西北に位置し、50年に一度御開扉の法要が常される。寺伝では寛延3年(1750)の建設とされる。木鼻模様、幕股の肩の張り具合などを見ると、18世紀中期の建造の可能性が高い。

桁行、梁間共2.12mで、方形桟瓦葺、二軒繁垂木とする。高さ1.2m程の多胡石の基壇の上に建つ。柱は六寸六分の円柱で土台、地長押、内法長押を廻す。柱頭は台輪で押えその下に頭貫を廻し、柱から

先に延長し木鼻が付く。柱間は正面に棧唐戸で両側面に舞良戸の引戸が付き、他は横板張とする。縁は無く脇障子も無い。中備は幕股で組物は出三斗と



図64-3 平面図(伝教大師御廟堂拝殿・御廟堂)

表64-4 伝教大師御廟堂拝殿

建造年代／根柢	19世紀前期／建築様式	構造・形式	正面3間(6.56m)、側面3間(4.77m)、入母屋造、平入、1間向拝、瓦葺
工 匠	不明	基 础	自然石基礎
軸 部	[身舎]丸柱、切目長押、内法長押	組 物	[身舎]出三斗 [向拝]出三斗
中 備	[身舎]幕股	軒	二軒繁垂木
妻 飾	虹梁、大瓶束	柱 間 装 置	正面板戸、側面板戸・漆喰
締・高欄・脇障子	なし	床	板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[身舎]素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎]舟肘木 [向拝]獅子鼻		



写64-8 正面



写64-9 海老虹梁



写64-10 内部

表64-5 伝教大師御廟堂

建造年代／根据	寛延3年(1750)／寺伝、建築様式	構造・形式	正面1間(2.12m)、側面1間(2.12m)、方形瓦葺
工 匠	不明	基 础	基壇多胡石切石
軸 部	丸柱、切目長押、内法長押、頭貫、台輪	組 物	出三斗
中 備	幕股	軒	二軒繁垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	正面棟唐戸、側面舞良戸、背面板張
縁・高欄・脇障子	なし	床	不明
天 井	井 不明	須弥壇・扇子・宮殿	不明
塗 裝	黒塗(柱、長押) 他朱塗 白色(支輪・斗供)	飾 金 物 等	引目、内法長押金具
繪 画	不明	材 質	不明
彫 刻	幕股、板支輪		



写真64-11 全景



写真64-12 組物 彫刻



写真64-13 側面

し、大斗で三方の肘木を受けさらに、隅木を受けている。丸桁と支輪が一体となり波型の彫物となる。幕股内も松の彫刻がされて、台輪小口、頭貫、さらに棟唐戸にも細かい地紋彫が施されている。塗装は柱、長押は黒、建具、板壁、木鼻、垂木は朱、支輪、丸桁、垂木小口は白く塗られている。小さなお堂であるがバランスの良い建物である。

山門（図64-4、表64-6、写64-14～64-16）

天文21年(1552)2月21日、山門を残し宝塔伽藍ごとごと焼き払われたとされ、残った山門がこの遺構であるかは不明である。町誌によると、故藤島亥治郎博士が当地を訪れた際に「懸魚、幕股、象鼻などにその特色を示している。桃山時代か江戸初期建立であろう。」と語ったとされる。棟札「元禄二年(1689)修理・墨書」があったとされるが、今回確認できなかった。木鼻の形状、板幕股などから16世紀後期から17世紀初期の建造の可能性がある。

1間1戸、四脚門で切妻、棟瓦葺である。二軒繁垂木とし、棟木を大きな幕股形状の板で支える。柱は円柱で頂部は粧形にすぼまり大斗が乗り、その上に平三斗と卷斗で桁を支えている。控え卷斗で両方向の桁を支える。桁先には渦紋を彫った拳鼻が付

く。中央に松と竹の透かし彫りの幕股と「緑野教寺」の額がかかる。本柱間に観音開の板扉が付き、控柱と本柱は桁で繋がる他、腰の位置に貫で繋がっている。破風には鰐付燕懸魚が付く。

まとめ

境内には二つの山門、本堂、玄関、庫裏、御廟堂拝殿、伝教大師御廟堂のほかに伝教大師尊像、道忠禪師供養塔など数多くの建物や供養塔などが並ぶ歴史ある大伽藍である。

本堂の建造年代は残された棟札に文化元年(1804)

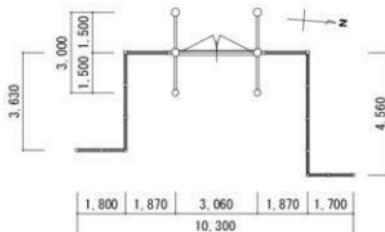


写真64-4 平面図(山門)

表64-6 山門

建造年代／根据	16世紀後期から17世紀初期／建築様式	構造・形式	1間1戸四脚門、正面(3.06m)、側面(3.00m)、切妻造、平入、瓦葺
工 匠	不明	基 础	自然石
軸 部	丸柱、頭貫、腰長押	組 物	出三斗
中 備	幕股	軒	二軒繁垂木
妻 飾	板幕股	柱 間 裝 置	正面板戸
縁・高欄・船障子	なし	床	なし
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	素木	飾 金 物 等	丁番金具
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	懸魚、幕股		



写真64-14 西面



写真64-15 小屋組



写真64-16 懸魚

とあり、大工は八田清兵衛とされ谷中天王寺の五重塔の大工として知られ、他の研究からもこの年代の建築であることが確認されている。

本堂脇に建つ玄関も虹梁の唐草絵様の形状など本堂に近い。玄関の棟札は見つかっていないが建造年代は本堂と同じ19世紀初期の建造とみて良い。

伝教大師御廟堂拝殿の建造年代は寺伝では寛延3年(1750)とされるが、虹梁の唐草絵様の彫刻が波の浮かし彫りであること、獅子鼻が横から正面に向き返しているなど、もう少し新しい形態を示している。本堂と近似の19世紀前期の建造とみて良い。

伝教大師御廟堂の建造年は寺伝では寛延3年(1750)とされている。比較的肩の張った幕股や幕股内に収まった彫刻、素朴な木鼻などから18世紀中期建築の可能性が高い。

山門の建造年代は元禄時代(1688~1704)に改修とした棟札が有ったとされるが、今回は確認できなかった。木鼻の形状、板幕股の形状などから、町誌、故藤島亥治郎博士の言葉通り16世紀後期から17世紀初期の可能性が高い。

(羽鳥 悟)

【参考文献】

『多野郡誌』多野郡教育会 昭和2年

『群馬県近世寺社建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会

昭和55年

『日本建築学会大会学術講演梗概集(九州)』平成元年

森田徹也他 谷中五重塔をたてた大工八田清兵衛の系譜について

67 最興寺〔さいこうじ〕

表67-1

寺院名	大徳山最興寺	所在地	富岡市南蛇井1133-1
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 最興寺
主本尊	総迦牟尼仏	仏事	三元般若祈禱(1月)、ねほん会(2/15)、春秋彼岸会、降誕祭(4/8)、両大師(高祖・大祖)征忌(9/20)、達磨忌(10/5)、開山忌(11/14)、他施餽鬼、成道会
創立・沿革	寺の創建は、延元元年(1336)天台宗の晃栄権僧都、当地に一寺を建立し妙徳山最興寺と称した。文明5年(1473)国峯城主尾張守平憲重、寺の衰退をなげき自ら開基となって堂宇を一新し、曹洞宗に改め、山号を大徳山とする。白井の雙林寺の二世、一州正伊禪師を迎えて開山した(『甘楽野古寺巡参』)。		
文化財指定	最興寺山門(市重文 平成7年4月)		

位置・配置(図67-1、写67-1)

富岡市の南西に位置し、市街から国道254号線を下仁田方面に向かって市立吉田小学校前の南蛇井交差点を直進し、まもなく右折し上信電鉄の踏切を渡

ると、山を背にする最興寺に至る。境内地は南の道路より車で坂を進むと西側に駐車場、東に山門、山門より北の階段を上ると正面に本堂、右側に庫裏が見え、又本堂左手前に四阿が位置する。墓地は西、北側の山際にあり、境内は山門より高いので明るい雰囲気である。

由来および沿革

寺の「縁起記」によれば当寺の創建は、延元元年(1336)天台宗の晃栄権僧都、当地に一寺を建立し妙徳山最興寺と称した。文明5年(1473)国峯城主尾張守平憲重、寺の衰退をなげき自ら開基となって堂宇を一新し、曹洞宗に改め、山号を大徳山とする。白井の雙林寺の二世、一州正伊禪師を迎えて開山した。

開創当時は、この寺付近を伏見の里、吉田の郷と言われた。

山門(図67-2、表67-2、写67-2~67-7)

建造に関する資料として「棟札」「三門図鉄額禪師題詞」があり、「棟札」には、弘化5年(1848)細工始め、文久3年(1863)上棟と記されている。この他に、豊前櫓、石田房之進昭房、矢崎善司昭恭と、



図67-1 配置図



写67-1 境内全景

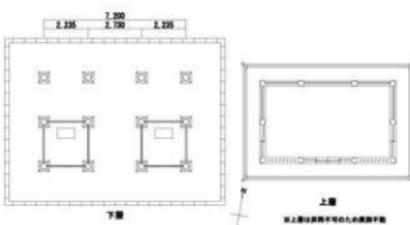


図67-2 平面図(山門)

棟梁名を記した棟札がもう1枚存在したとされるが、今回の調査では確認できなかった。大隅流棟梁矢寄善司矩慶と銘のある設計図「三門図鉄額禪師題詞」が保存されており、設計図は縮尺1/20立面図に最興寺三十二世鉄額禪師が明治28年(1895)に山門の再建と三門図の出處の経緯を書いた題詞を張り付けたものである。これらは、大隅流棟梁の関与と建造年代確定ができる重要なものである。

規模は3間1戸側面2間、素木造の二重門で、屋根は入母屋造棟瓦葺である。軸部は礎石の上に丸柱をたてて、下層を腰貫、虹梁、内法貫、頭貫、台輪固め、上層を縁長押、地貫、腰貫、内法長押、頭

貫、台輪で固めている。組物は下層を拳鼻付二手先、上層は拳鼻付三手先尾垂木付、中備は下・上層とともに正・背面に幕股、側面に撥束をもちいる。妻飾りは大瓶東、板張りである。彫刻で目立つのは、下層中央間の台輪上部、龍の彫刻、木鼻に獅子・象、幕股、軒支輪、上層台輪上部、木鼻の花、幕股、二重軒支輪などである。下層の柱間装置は板張、縱格子、上層は板張、縱格子、引違板戸とする。

軒は上・下層とも二軒繁垂木である。下層の天井は格天井、中央間の鏡天井には、「碧山」の号を記した龍の墨絵が描かれている。

表67-2 山門

建造年代／根据	文久3年(1863)／棟札	構 造 ・ 形 式	3間1戸二重門(7.20m)、側面2間(4.46m)、入母屋造、平入、瓦葺
工 匠	[大工]石田房之進昭房	基 础	切石基礎
軸 部	[上層]丸柱、縁長押、地貫、腰貫、内法長押、頭貫、台輪 [下層]丸柱、地貫、腰貫、虹梁、内法貫、頭貫、台輪	組 物	[上層]拳鼻付三手先 [下層]拳鼻付二手先
中 備	[上層]正・背面幕股 側面撥束 [下層]正・背面幕股 側面撥束	軒	[上層]二軒繁垂木、板支輪 [下層]二軒繁垂木、板支輪
妻 飾	大瓶東 板張、懸魚	柱 間 裝 置	[上層]板張、板戸引違、縱格子 [下層]板張、縱格子
縁・高欄・脇障子	[上層]四方擬宝珠高欄	床	[上層]板張 [下層]土間コンクリート
天 井	[上層]不明 [下層]板張、格子天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	[下層]鏡天井龍の墨絵	材 質	檜
彫 刻	[上層]彫刻軒支輪(波、他)、木鼻(花)、拳鼻、虹梁、幕股 [下層]彫刻軒支輪(波、他)、木鼻(獅子・象)、拳鼻、虹梁(龍)、幕股		



写67-2 全景



写67-3 下層正面



写67-4 下層正面



写67-5 下層正面・側面



写67-6 上層正面・側面



写67-7 背面

まとめ

江戸時代中頃に長野県諏訪地方で確立した建築彫刻に重点を置く大隅流様式の素木造二重門である。

上層の木鼻が透彫（花）、支輪の板彫刻、正・背面に臺股、側面に撥束を使用している。

石段下から見上げる建物は、高くそびえ立っていて雄壮に見える。組物や虹梁は素木で簡素であり装飾されてなく、落着いた造りであり幕末の大隅流の特徴をよく表している。

（久保喜由）

【参考文献】

『群馬縣北甘楽郡史』本田亀三著 昭和3年

『上野国寺院明細帳3』群馬県文化事業振興会 平成7年

『富岡市史近代・現代通史編・宗教編』富岡市 平成3年

『富岡市の文化財』富岡市教育委員会 平成28年

『甘楽野古寺巡參』深澤武著 昭和57年

『大隅流の建築 荘宮長左衛門矩重伝』矢崎秀彦・伊藤富

夫著 平成6年

68 (光厳寺) 薬師堂 ((こうごんじ) やくしどう)

表68-1

寺社名	(光厳寺) 薬師堂	所在地	富岡市上高瀬1675
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 光厳寺
主本尊	薬師如来	仏事	ねはん会(2月)、花祭り・大般若・施餽鬼(4月)、成道会(12月)
創立・沿革	(縁起帳より光厳寺について) 寺の縁起は正平4年(1350)、九十六代光嚴天皇をご開創とし、御法号を光嚴院量仁禅定法皇と申し上げ、尊牌をお祀りし、大本山永平寺八世鷹林喜純禪師を御開山としている。		
文化財指定	薬師堂(市重文 平成7年4月)		

位置・配置 (図68-1、写68-1)

光厳寺は富岡ICから西へ1.0kmほどのある富岡市下高瀬の北側傾斜地に位置する。また、薬師堂は光厳寺からさらに1.5kmほど西へ離れた上高瀬に位置し、200mほど南に上信越自動車道が走り、周囲には田園地帯が広がっている。南道路より薬師堂境内に入ると正面に薬師堂が見え、西に庫裏が並ぶ。庫裏は西の一部が2階建となっていて、薬師堂とは東側の廊下で接続されている。薬師堂と庫裏の裏には、墓地と広場が広がっている。境内は周囲をブロック塀で囲われているが明るい雰囲気である。



写68-1 境内全景

由来および沿革

光嚴寺は鳳翔ヶ谷鳳来山光嚴寺と号し、大本山永平寺直末の曹洞宗寺院である。寺の縁起は正平4年(1350)、室町時代の人皇九十六代光嚴天皇をご開創とし、御法号を光嚴院量仁禅定法皇と申し上げ、尊牌をお祀りし、大本山永平寺八世鷹林喜純禪師を御開山としている。

また、江戸時代の天文・正保・安永間に火災により重宝類は焼失し、寺歴には不明な点がある。鳳翔ヶ谷という寺山の恵まれた自然環境と地形を生かした伽藍配置は、静寂莊嚴なるものである。

薬師堂 (図68-2、表68-2、写68-2～68-7)

薬師堂の創建は明らかでないが、現在の建物は文献によると天保3年(1832)の再建である。棟札等の資料は確認できないが、工匠は矢崎二代善司、後見矢崎善司昭方と伝えられている。

規模は正面3間、側面3間、入母屋造瓦葺で、正面に唐破風の向拝1間を備える。正側面三方縁を廻らし、木階二級を付す。軸部は、縁長押、内法長押、頭貫、台輪で固めている。向拝は礎石の上に方柱を立てて水引虹梁を渡し、身舎とは透影繫虹梁でつながっている。組物は、身舎では出組、向拝は出三斗とし、中備は身舎では幕股、向拝は彫刻嵌込とする。

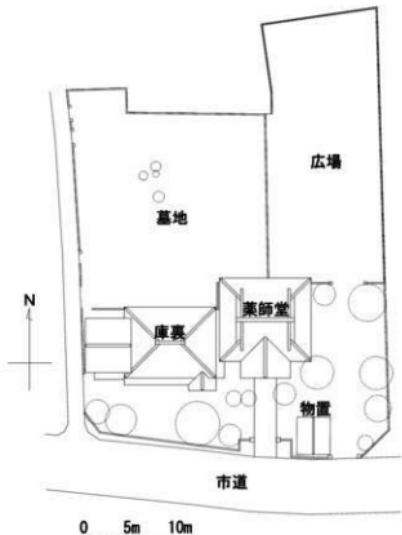


図68-1 配置図

る。柱間装置は、身舎正面中央1間を両開戸唐戸、それ以外の2間及び側面をガラス戸とする。軒は正面が二軒繋垂木・板支輪で、背面は二軒繋垂木とし、妻飾は虹梁大瓶束で、向拝唐破風に兎毛通を飾る。彫刻は身舎では木鼻に鳥、向拝では柱に地紋彫、木鼻に獅子・狛、水引虹梁、中備彫刻に龍と松、透彫繋虹梁、手挾、兎毛通に松が彫られている。

内部は疊敷の外陣と板張りの内陣とはねだした内々陣からなり、天井は外陣が格天井、内陣が棹縁天井とする。組物は内外陣とも出三斗、中備は幕股としている。

昭和51年(1976)に背面の張出し部(内々陣)の増築、背面・側面後方の切目縁の解体、脇障子の新設、階段の改修、塗装、瓦葺替の改修が行われ、令

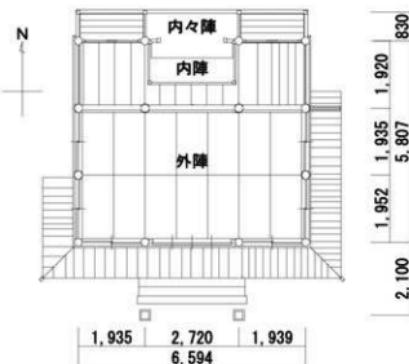


図68-2 平面図(薬師堂)

表68-2 薬師堂

建造年代／根据	19世紀中期／建築様式	構造・形式	正面3間(6.59m)、側面3間(5.80m)、入母屋造、平入、向拝1間軒唐破風屋根、瓦葺
工 匠	[大工]矢崎二代善司(専司)	基 础	自然石基礎
軸 部	[身舎]丸柱、縁長押、内法長押、頭貫、台輪 [向拝]角柱、虹梁形頭貫、繋虹梁	組 物	[身舎]出組 [内外陣]出組、出三斗 [向拝]出三斗
中 備	[身舎]幕股 [内外陣]幕股 [向拝]彫刻嵌込	軒	[正面]二軒繋垂木、板支輪 [背面]二軒繋垂木
妻 飾	虹梁大瓶束	柱間装置	[正面]両開戸唐戸、ガラス引戸 [背面]ガラス引戸
縁・高欄・脇障子	正側面三方縁、脇障子	床	[外陣]疊敷 [内陣]板張
天 井	[外陣]格天井 [内陣]竿縁天井	須弥壇、扇子・宮殿	須弥壇(禅宗様)
塗 装	素木、朱塗(頭貫、虹梁、隅木、木負、茅負、破風)	飾 金 物 等	内法長押、戸唐戸
繪 画	なし	材 質	檜(向拝柱)
彫 刻	[身舎]木鼻(鳥)、幕股、板支輪 [向拝]柱(地紋彫)、木鼻(獅子、狛)、水引虹梁、中備彫刻(龍、松)、繋虹梁、手挾、兎毛通(松)		



写真68-2 外観：正面



写真68-3 外観：側面・背面



写真68-4 向拝：透かし彫り繋虹梁・手挾



写真68-5 側面：妻飾り



写真68-6 内観：須弥壇



写真68-7 内観：外陣・組物・幕股

和元年に唐破風屋根及び谷樋葺替え改修を行っている。

まとめ

江戸時代中頃に長野県諏訪地方で確立した大隅流様式の仏堂である。向拝廻りの彫刻、繫虹梁・手挟の透彫、身舎の板支輪の彫刻は見事なものである。また、木鼻は外部・内部ともに鳥をモチーフとした珍しいものである。各部分を飾る彫刻は大隅流の特色を良く表している。富岡市内に現存する大隅流の

3棟（諏訪神社旧本殿、光嚴寺薬師堂、最興寺山門）の内の貴重な建造物の一つである。

(野口忠男)

【参考文献】

- 『群馬縣北甘楽郡史』本田亀三著 昭和3年
- 『上野国寺院明細帳3』群馬県文化事業振興会 平成7年
- 『雲のながれに』富岡市観光協会 平成7年
- 『富岡市の文化財』富岡市教育委員会 平成28年
- 『甘楽野古寺巡跡』深澤武著 昭和57年
- 『大隅流の建築 薬師堂・左衛門町重伝』矢崎秀彦・伊藤富夫著 平成6年

69 (壽福寺)成田山不動堂 ((じゅふくじ)なりたさんふどうどう)

表69-1

寺院名	(壽福寺)成田山不動堂	所在地	富岡市富岡1219
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 壽福寺
主本尊	木彫明王	仏事	節分祭(2/3)
創立・沿革	享保元年(1716年)の創建といわれ、福寿坊第23代多治見賢友師が不動尊を勧請したのが始まりと伝えられている。その後、神仏分離令(廢仏毀釈)等により明治5年(1872)に福寿坊が廃坊となつたため、明治17年(1884)下總国植生郡成田村成田山新勝寺において不動尊を再開眼して奉安し、成田山分靈所として公称することを同年3月に許可されたといわれる(『上野国寺院明細帳3』)。		
文化財指定	なし		

位置・配置 (図69-1、写69-1)

成田山不動堂は富岡警察署通りを東側に向かい、道路の北側でしののめ信用金庫富岡東支店の東隣に位置する。南北に細長い境内は、南に道路、東に民家、西、北にしののめ信用金庫東支店に接している。道路から見通した境内は、正面にお堂が見える。境内には若干の樹木があるだけで明るい雰囲気である。建物全体が覆屋に覆われている。

由来および沿革

この不動堂(不動明王を本尊とする仏教寺院の建物)は、この地に古くからあった修験者、多治見福寿坊の内仏堂(個人の仏堂)であった。多治見家は鎌倉期から続く家系であり、当時、瀬下郷の小舟神

社の別当職にもあり、また秩父の三峰神社の重要な役職にもあったという。このお堂は、享保元年(1716)の創建といわれ、福寿坊第23代多治見賢友師が不動尊を勧請したのが始まりと伝えられている。その後、神仏分離令(廢仏毀釈)等により明治5年(1872)に福寿坊が廃坊となつたため、明治17年(1884)下總国植生郡成田村成田山新勝寺において不動尊を再開眼して奉安し、成田山分靈所として公称することを同年3月に許可された。



写69-1 境内全景

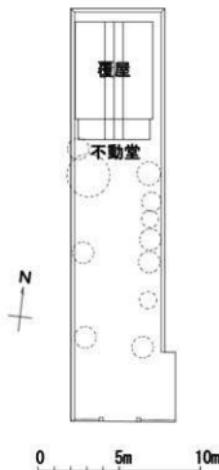


図69-1 配置図

不動堂 (図69-2、表69-2、写69-2～69-7)

規模は正面3間、側面3間、南向きで土蔵造の小さなお堂である。切妻造妻入瓦葺の建物で、正面に軒唐破風の向拝1間が設けられている。堂の背面を除き内外のほとんどの壁に立体的な漆喰彫刻が施され、鮮やかに彩色されている。基礎は礎石で、軸部は堂柱を角柱、丸柱とし、内法長押、丸桁で固め柱上部には舟肘木を設ける。仏壇脇丸柱上部には台輪がまわる。上部に三斗組、向拝は角柱で平虹梁の上に三斗をのせて虹梁を廻している。中備は幕板を施している。天井は向拝、お堂とともに、漆喰天井である。創建時は普通のお堂であり、漆喰彫刻は新潟

県出身の宮峯吉という左官職人が明治初期に製作したと伝えられている。明治17年(1885)に成田山分靈所として許可されたとあるが、漆喰彫刻はこの頃に製作されたと推測する。昭和4年(1929)に大がかりな修理がされたが、彫刻の剥落・崩壊が著しく、昭和58年(1983)に覆屋がかけられ保護されている。

お堂の外部周囲には中国の故事にならったと思われる二十四孝等の数多くの漆喰彫刻が見られる。向拝の柱・虹梁・斗組まで全て漆喰塗りで、そこには龍が巻き付いている。内部の壁周囲には龍や鶴などたくさんの極彩色の漆喰彫刻がほどこされていて、天井には損傷が激しいため保存撤去されたというが、天井いっぱいに龍がかけめぐる漆喰彫刻があつたという。

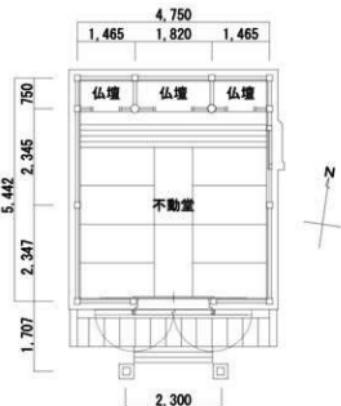


図69-2 平面図(不動堂)

表69-2 不動堂

建造年代／根拠	江戸末期／建築様式	構造・形式	正面3間(4.75m)、側面3間(5.44m)、切妻造、瓦葺(土蔵造)、妻入、向拝1間軒唐破風付
工 匠	不明	基 础	礎石
軸 部	[身舎]角柱、内法長押、台輪 [向拝]角柱、水引虹梁、繫虹梁	組 物	[身舎]欅様肘木、三斗組 [向拝]三斗組
中 備	[身舎]漆喰装飾 [向拝]三斗組、幕板	軒	[身舎]不明 [向拝]疊垂木
妻 飾	[身舎]不明	柱 間 装 置	[正面]引分格子板戸、漆喰壁
縁・高欄・監障子	正面切目縁	床	[身舎]疊敷、一部板張
天 井	[身舎]漆喰 [向拝]漆喰	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[身舎]極彩色(漆喰彫刻) [向拝]極彩色(漆喰彫刻)	飾 金 物 等	[身舎]隠金物
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎外部]虹梁、肘木、漆喰彫刻(中国故事二十四孝) [向拝]虹梁、幕板、漆喰彫刻(龍) [身舎内部]漆喰彫刻(龍、鶴)		



写真69-2 外観侧面



写真69-3 外観正面・向拝



写真69-4 外壁側面



写真69-5 外壁側面



写真69-6 内観



写真69-7 内観

まとめ

向拝の柱・虹梁の龍は迫力があり見事である。左官職人が壁土と漆喰を材料に、コテ一丁で造りあげる日本独特の漆喰彫刻は、現存するものは多くない。関東から北にはこれ程の漆喰彫刻はないともいわれており、大変貴重な彫刻である。

(久保喜由)

【参考文献】

- 『上野国寺院明細帳3』群馬県文化事業振興会 平成7年
- 『富岡市史近代・現代通史編・宗教編』富岡市 平成3年
- 『雲のながれに』富岡市観光協会 平成7年
- 『成田山不動堂』富岡市

72 桂昌寺〔けいしょうじ〕

表72-1

寺院名	熊野山(秋葉山清光院)桂昌寺	所在地	安中市下秋間112
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 桂昌寺
主本尊	般若半尼仏	仏事	修正会(1/1~3)、积尊涅槃会(2/15)、春彼岸会(3/18~24)、积尊降誕会(4/8)、報恩会供養(4/22)、お盆供養(8/13~15)、こども修養会(8/20~21)、秋彼岸会(9/20~26)、积尊成道会(12/8)、除夜の鐘(12/31)
創立・沿革	開山: 天隱玄鏡大和尚 永正元年(1504)、開基: 当松井田小屋城主安中出羽守忠親。一説には新田氏が一寺を建立、歳月を経て安中忠親が創建したとある。五代將軍綱吉の時代に桂昌院から桂昌寺と称するようになった。享和3年(1803)二十一世金毛慧胤和尚本堂再建。嘉永3年(1850)二十五世大棟龍雲和尚が梵鐘を改鋸。		
文化財指定	桂昌寺の鐘(市重文 昭和48年12月)		

位置・配置(図72-1、写72-1)

桂昌寺は安中市下秋間に位置し、安中城の良の角にある。現在の国道18号より北に位置し、九十九川と秋間川の合流付近、寺前橋を渡った山裾にある。北は斜面地で山林である。駐車場より正面の石段を上ると丹塗りの山門(楼門)があり平地となる。山門を潜った右前に池があり、さらに正面の石段を上ると正面に本堂、本堂東に庫裏が繋がる。本堂西に鐘楼堂と墓地がある。



写72-1 境内全景

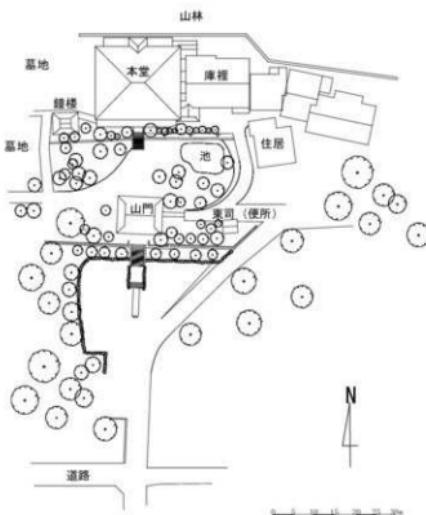


図72-1 配置図

由来および沿革

桂昌寺は天隱玄鏡大和尚により開かれた。開基は当松井田小屋城主安中出羽守忠親で、当初は桂昌院と呼ばれていた。

篠ノ井にある末寺の記録によると元禄(1688~1704年)の頃十四世天光乾海和尚の時、五代將軍綱吉の生母が桂昌院を名乗ったため、改名を求められ、「清光院」の名を与えられたが、時の住職がこれを良しとせず、桂昌院から桂昌寺と称するようになった。現本堂は享和3年(1803)二十一世金毛慧胤和尚が再建。嘉永3年(1850)二十五世大棟龍雲和尚が梵鐘を改鋸。

本堂(図72-2、表72-2、写72-2~72-7)

建造年は八尺間の虹梁下に刻銘がある〔享和三年癸亥之冬上梁日幻住慧胤記〕〔佛殿祖堂方丈衆寮門屋寶庫並鼎新之〕の通り、享和3年(1803)の上棟である。

平面は向拝が無く、八尺間、6間取りで北側に開山堂、位牌堂を配し、その規模は、正面5間、側面

6間、寄せ棟造 平入 銅板葺である。軒は二軒疎垂木で、組物は身舎外部、大斗肘木、廊下、外陣、内陣来迎柱上、出組である。

内部は、外陣内陣とも格天井で極彩色の龍と波と紅葉を題材とした彫刻の天井支輪が付く、外陣には極彩色の龍と波の欄間彫刻、その上に小壁があり、彫刻の天井支輪が付く、その脇間に（東序、西序）と廊下外陣境にも極彩色の欄間彫刻がはめ込まれている。

材料は、土台が栗、柱は櫻で内部は茶褐色（拭漆又は透漆）で仕上げられている。

昭和38年(1963)に茅から瓦へ葺替、平成17年(2005)に瓦から銅板に葺替鶴尾を付ける。同時に北側に開山堂、位牌堂の増築、コンクリート基礎、疊み下改修、疊替え、排煙窓、格天井の板替など大改修をした。

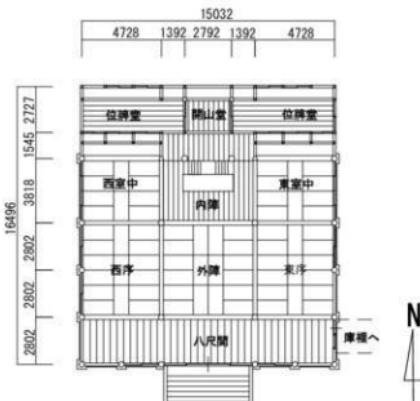


图72-2 平面图(本堂)

表72-2 本堂

建造年代／根柢	享和3年(1803)／本堂八尺間梁下刻銘	構造・形式	正面5間(15.03m)、側面6間(16.49m)、寄せ棟造平入銅板葺
工 匠	[大工]不明 [彫工]彫櫛欄、彫匠 新田郡 山之神郡 二代岸亦八義福 同作伴 [彩色] 高崎住鉢木孫系俊久、太田町中村正輔年雄	基 礎	切石基礎(外周)、コンクリート基礎(内部)
軸 部	[身舎]丸柱 台輪(外周、来迎柱上) [木鼻] 身舎正面:拳・側面:拳	組 物	[身舎]外部:大斗肘木 来迎柱:出組 内外 障境柱:出組 外陣廊下塊柱:出組
中 備	[来迎柱上部]詰組 [内外障境]詰組	軒	二軒疊垂木
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	正面建具入り口:棧唐戸 岡端:火灯窓 側 面:アルミサッシ正面壁:塗喰仕上げ 側面 壁:塗喰仕上げ
縁・高欄・脇障子		床	内陣:板張 外陣:疊敷 廊下:櫻板張
天 井	格天井(内陣、外陣、八尺間) 彫刻板支輪(内 陣、外陣)	須弥壇・扇子・宮殿	[内陣]須弥壇
塗 装	[身舎]極彩色(内外陣天井支輪、外陣他室影刻 欄間)、茶褐色(内陣柱、虹梁)、漆塗(天井格子)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	土台:栗 身支柱:櫻 来迎柱:櫻
彫 刻	外陣欄間影刻(龍、雲、波)、東序欄間影刻(牛若丸と弁慶、おとぎ話)、内陣支輪(龍、波)、外陣天井支輪(波、 紅葉)、内外障境虹梁(植物様)、内陣・外陣虹梁(唐草絵様)		



寫72-2 全國



写72-3 外墙·内墙



写72-4 外滩王井，古船



写72-5 内部全景



写72-6 西序天井・欄間彫刻



写72-7 東序天井・欄間彫刻

山門 (图72-3、表72-3、写72-8～72-10)

建造年は本堂の説明の通り、本堂八尺間虹梁下の刻銘により、本堂と同年享和3年(1803)の上棟である。

その規模は、3間1戸楼門(6.41m)、側面(4.48m)、入母屋造、平入、銅板葺、二軒吹寄垂木の楼門で、垂木は黒塗り、他外部は丹塗りで仕上げられている。

組物は、1階外側は三手先、内側は出三斗、2

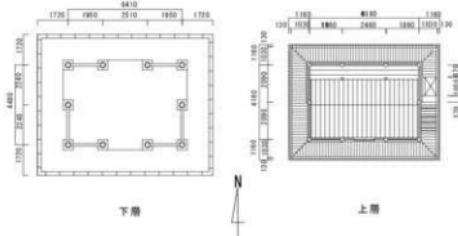


图72-3 平面图(山门)

表72-3 山門(楼門)

建造年代／根拠	享和3年(1803)／本堂八尺間梁下刻銘	構造・形式	正面3間1戸(6.41m)、楼門、側面2間(4.48m)、入母屋造、平入、銅板葺
工 匠	不明	基 础	礎石、礎盤、地覆
軸 部	本柱：丸柱 台輪有り(上層外周) [長押] 下層なし [木鼻] 下層正面：獅子・拳 側面：拳 [長押] 上層地長押、内法長押 [木鼻] 身 合正面：拳 側面：拳	組 物	下層外側：三手先・内側：出三斗、上層外側：拳鼻付二手先(尾垂木付)・内側：拳鼻付出組
中 備	下層：幕板、詰組(斗)、上層：詰組(斗)	軒	二軒 吹寄せ垂木
妻 飾	豕又首、蕉懸魚鰐付き	柱 間 裝 置	下層腰板、貫 上層正面入り口：棧唐戸 両端：火灯窓、はめ役戸 側面、背面：板
緑・高欄・脇障子	四方切目縁 握宝珠高欄	床	上層内部：板張
天 井	下層：繪入り格天井、中央部：繪入り鏡天井(龍)、上層：竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	扇子
塗 装	朱塗、極彩色(彫刻支輪)、黒塗(垂木)、素木(上層内部)	飾 金 物 等	なし
絵 画	下層天井画(龍)、その他 上層天井(お経)	材 質	地覆：不明、柱：櫛、虹梁：櫛、高欄：櫛
彫 刻	下層正面虹梁(梅)、背面虹梁(松)、上層軒支輪(牡丹、波)、台輪(地紋)、拳(植物紋)、四隅尾垂木(蟹)、内部虹梁(結綿)、正面虹梁上(力神)		



写72-8 全景



写72-9 正面組物三手先・力神・獅子・虹梁



写72-10 2階組物・木鼻・軒支輪・尾垂木

階外側は拳鼻付二手先（四隅はの蟹の尾垂木付）、内側は拳鼻付出組で、1階正面虹梁上に力神を備え、その両脇柱頂部に獅子の木鼻を付ける。身舎四隅頭貫木鼻は拳で、中備は飛び出した彫刻の蔓股である。1階天井は両脇が絵入り格天井で中央が喫入り鏡天井となっている。彩色画はかなり薄くなり題材の確認が難しいが、両脇は草花、中央は龍と推察する。

2階は頭貫木鼻は拳で台輪を廻し、中備を詰組とし、極彩色の波と菊を題材とした彫刻がされた支輪を備える。内部は正面に祭壇を備え、十六羅漢が祀られている。床は板敷で天井は竿縁天井、天井板にはお経が書かれている。

まとめ

桂昌寺は創建当初、安中氏の外護を受けていたが、以来代々領主との関わりが深かった。境内には、安中出羽守忠親の墓、井伊兵部少輔直好室の墓があり、桂昌寺の鐘は安中市の重要文化財である。当地は安中城の艮の方角にあり、鬼門除けとして建てられ、前に川、後ろには崖を控えた要害の地であり、元本堂（現本堂の東隣に位置し、平成19年（2007）まで庫裏として使用していた）には床の間の掛け軸裏の抜け穴や、吊り梯子や隠れ2階があった。

現本堂、山門の建造年は、虹梁下刻銘の通り、享和3年（1803）の上棟で、本堂の極彩色の彫刻は見応

えがある。西序の欄間裏に、「維皆慶應三丁卯 祀夷則成就冥・惣欄間新刻 當山廿五葉大棟代・彫匠新田郡山之神郡 二代岸亦八義福 同幸作・彩色高崎住 鈴木孫司俊久 太田町 中村正輔年雄」と銘があり、支輪の波と紅葉の題材は岸亦八の特徴をよく表している。外陣の虹梁上に欄間彫刻があり、その上に小壁、彫刻支輪となっており、内外陣及び脇間との境には建具は無く一室空間となっている。また、曹洞宗で八尺間が土間ではなく板敷であることも特筆すべきである。

本堂上棟は享和3年（1803）、彫刻は慶應3年（1867）と年代に差があるが、本堂入り口虹梁の唐草絵様、来迎柱虹梁の唐草絵様は18世紀末から19世紀初めの特徴をよく表している。

山門の保存状態はやや悪い。ほとんど消えて見えないが、1階鏡天井の龍の天井絵や2階の天井板に書かれたお経など、興味深い。蟹の尾垂木や金物では無く彫刻による八双、頭貫の地紋彫などは建造年代の特徴を表している。

本堂、山門の建造年もはっきりしており、細部の造り、その特徴など19世紀初めの建築様式を知ることが出来る貴重な建築物である。

（久保田和人）

【参考文献】

『安中市史 第一巻』安中市 平成12年

73 長傳寺（ちょうでんじ）

表73-1

寺社名	八幡山長傳寺	所在地	安中市板鼻2-5-21
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 長傳寺
主本尊	阿彌陀如來	仏事	彼岸会(3月)、大般若会 1部・施食会 2部(4月)、お盆(8月)、彼岸会(9月)、弁財天大祭(10月)
創立・沿革	天文元年(1532)本寺長源寺九世為景清春和尚が現高崎市八幡町八幡宮境内に長傳庵として開基した。天正18年(1590)小田原攻めの時八幡宮と共に焼失、当時の板鼻城主里見讚岐守忠重公の招致により、慶長9年(1604)現在地に移転再建された(『長傳寺縁起』より)。		
文化財指定	なし		

位置・配置(図73-1、写73-1)

長傳寺は安中市板鼻、旧中山道より南に入った、碓氷川の北に位置する。境内は平地で、西と北と南に墓地を置き、周辺は東、北、西は住宅が建ち並び、南は碓氷川に向かって開いている。敷地中央南に位置する南向き山門(薬医門)を潜ると正面に本堂、本堂西に土蔵造りの開山堂、本堂東に庫裏がある。



図73-1 配置図



写73-1 境内全景

由来および沿革

『長傳寺縁起』によれば、天文元年(1532)本寺長源寺九世行為景清春和尚が現高崎市八幡町八幡宮境内に長傳庵として開基、その後天正の末期までこの称号であった。天正18年(1590)小田原の北条攻めの時、八幡宮付近の戦闘の折、八幡八幡宮と共に焼失、慶長5年(1600)中山道の路線が決定され、当時の板鼻城主里見讚岐守忠重公に招致されたことにより、慶長9年(1604)現在地に移転再建された。慶長13年(1608)里見公より寺領二十石の寄進があった。

本堂 (図73-2、表73-2、写73-2~73-7)

『長傳寺縁起』によれば、現本堂建設は嘉永6年(1853)に建築が始まってから(嘉永6年(1853)本堂再建工事の資金の借用証文があり、同年11月に松井田の大工棟梁、友吉と手間請負の契約を結ぶ)慶応4年(1868)まで足掛け16年におよぶ、この年に彫刻の作業が停止されたと考えると寺に伝わる口碑と一緒に



図73-2 平面図(本殿)

表73-2 本堂

建造年代／根据	慶應4年(1868)／古文書	構造・形式	正面7間(16.15m)、側面9間(16.11m)、入母屋造、平入、向拝1間、銅板葺
工 匠	[大工]松井田住 大工棟梁、友吉 [彫工]當國 勢多郡 花輪住 石原常八主信 金子文五郎宣信	基 础	[向拝]基壇、礎石 [身合]外周：切石、中：コンクリート束石
軸 部	[向拝]角柱280 [身合]角柱、丸柱(来迎柱、内外陣境柱、外陣廊下境柱)、地長押、内法長押、台輪、手技	組 物	[外部]大斗肘木 [内部]出組、平三斗(来迎柱上)
中 備	内外陣境柱：嵌込彫刻、彫刻墓股 外陣廊下境柱：嵌込彫刻、彫刻墓股	軒	二軒 半繁垂木
妻 飾	平三斗、二重虹梁、幕股、大瓶東笈形、懸魚 鉤付	柱間裝置	正面入り口建具：棟唐戸 両端：棟唐戸 側面：アルミサッシ 正面壁：土壁漆喰仕上
縁・高欄・脇障子	正面：登り高欄	床	内陣：板張 外陣：疊敷 廊下：擗板張
天 井	内陣：格天井(天井絵) 外陣：折り上げ式鏡天井 廊下：格天井 内外陣両脇の室：竿縁天井		須弥壇：屏子・宮殿須弥壇
塗 裝	[身合]素木(外陣廊下境、脇室、彫刻欄間)、極彩色(内外陣境彫刻欄間、彫刻墓股)、素木(内部柱、虹梁)、漆塗(天井格子)	飾 金 物 等	なし
繪 画	内陣天井板	材 質	土台：櫛 身合本柱：櫛 身合丸柱、虹梁：櫛 来迎柱：櫛
彫 刻	内外陣境欄間(龍、麒麟、波)、内外陣境墓股、内外陣境板支輪(菊、波)、外陣廊下境欄間(鳳凰、梅、雲、他)、廊下板支輪(菊、波)、廊下幕股(鶯、梅)、外陣両脇室欄間(普田別命、竹林の七賢、糞老の滝)、虹梁(唐草絵様)、向拝柱(地紋)、向拝海老虹梁(唐草絵様)、向拝手技(唐草絵様)、向拝水引虹梁(唐草絵様)、向拝欄間(龍、波)、向拝正面額(波、鳥、松)		



写73-2 全景



写73-3 向拝・海老虹梁



写73-4 外陣・内陣



写73-5 廊下



写73-6 脇下外陣境欄間彫刻



写73-7 外陣内陣境欄間彫刻

致するとある。棟札などは残っていない。寺に残る古文書（請負契約、借用証文）や虹梁の唐草絵様、海老虹梁の反り、透掘の墓股、花輪住、石原常八主信71才の仕事であることなどから、江戸末期の建築である。

その規模は正面7間、側面9間（実測：正面16.15m、側面16.11m）1間向拝、入母屋造、平入、銅板葺である。軒は二軒半繁垂木で、妻飾りは平三斗、二重虹梁、墓股、大瓶束菱形である。

組物は、外部を大斗肘木、廊下及び外陣を出組、来迎柱上を平三斗とし、中備は内外陣境、外陣廊下境を極彩色彫刻欄間、極彩色彫刻墓股とし、脇室にも透彫の欄間を備える。他にも板支輪、虹梁唐草絵様、向拝水引虹梁木鼻の獅子と模、水引虹梁上の龍の透彫、入り口棧唐戸に嵌め込まれた浮彫など多くの彫刻が残されている。欄間彫刻には「彫工 當國勢多郡 花輪住 石原常八主信 七十一才作 金子文五郎宣信」と記されている。

平面は向拝、廊下、6間取りで、本堂東に土蔵造りの開山堂、北に昭和56年（1981）に増築した書院があり、材質は総檜造りである。昭和40年（1965）瓦葺きから銅板葺きに葺き替えている。

まとめ

長傳寺本堂は、縁起によれば、慶応4年（1868）彫刻工事が停止され、これを完成としている。保存状態は良好である。本堂入り口の棧唐戸に彫刻が嵌め込まれており、本堂建築としてはめずらしい。さらに本堂内部に入ると多くのすばらしい欄間彫刻がある。彫刻は彫工 當國勢多郡 花輪住 石原常八主信 金子文五郎宣信であり、花輪住のたくさんのはばらしい彫刻を見ることが出来る。彫刻石原常八主信71才の仕事であることから二代目常八主信（1786～1863）の仕事で、現存する貴重な彫刻であると共に、江戸末期の特徴を表している。また、向拝の水引虹梁の唐草絵様、廊下、他の枠からはみ出した透彫の墓股などが建造年代の特徴を表しており、江戸末期の彫刻建築の様式を顕著に表している貴重な建築である。

（久保田和人）

【参考文献】

『八幡山龍雲院長傳寺縁起』明治34年
『安中市史第一巻』安中市 平成12年

74 (松井田)不動寺 ((まついだ)ふどうじ)

表74-1

寺院名	龍寶山松井田院不動寺	所在地	安中市松井田町松井田甲987
宗派	真言宗豊山派	所有者・管理者	宗教法人 不動寺
主本尊	平等觀音菩薩	仏事	節分の護摩焚き(不動堂、2月)、春彼岸(3月)、花まつり・お砂踏み(4月)、お盆供養・施餓鬼供養(8月)、秋彼岸(9月)、除夜の鐘つき(12月)
創立・沿革	不動寺は、寛基元年(1243)に日本三戒壇の一つ下野薬師寺の上座であった慈猛上人がこの地に不動明王像を安置したことを開基とする。9世弘算住職の時代に伽藍が造営され、代々徳川将軍家の庇護を受けて隆盛したが、安永2年(1773)の松井田の大火により、本堂をはじめ主要な建物が焼失した。文政2年(1819)2月に32世通音住職により本堂が再建された。後に嘉永2年(1849)4月に35世皆知住職により不動堂が再建された。仁王門の建立時期は不明であるが江戸初期と推定されている。		
文化財指定	不動寺の仁王門(県重文 昭和33年8月)、石塔婆(県重文 昭和30年11月)、木彫不動明王像(県重文 昭和33年8月)		

位置・配置 (図74-1、写74-1)

安中市松井田町は、群馬県南西部で高崎市より西に21kmに位置する。松井田町の地形は、北側は丘陵を境に高崎市倉渕町、西側は碓氷峠・入山峠・和美峠を境に長野県軽井沢町、南側は横野丘陵を境に富岡市妙義町へとそれぞれに接している。旧中山道から北側の路地を200mほど入ると境内に入り石塔婆(県指定重要文化財)と仁王門(県指定重要文化財)が建つ。門を抜けて参道を進むと左手に墓地があり

その後正面に不動堂があり西側に本堂、東側に庫裏が建っている。



写74-1 境内全景

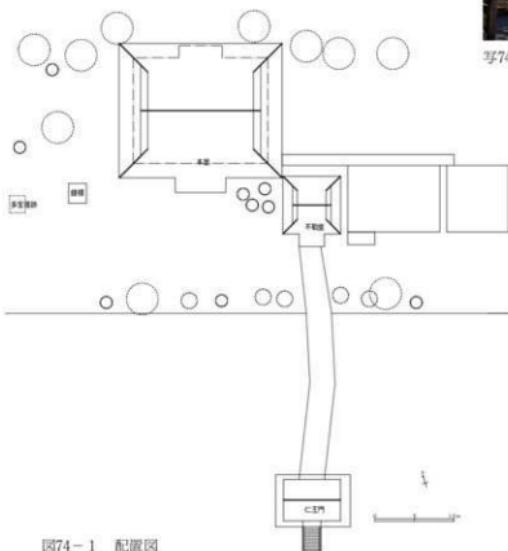


図74-1 配置図

由来および沿革

不動寺は、寛基元年(1243)に日本三戒壇の一つ下野薬師寺の上座であった慈猛上人がこの地に不動明王像を安置したことを開基とする。9世弘算住職の時代に伽藍が造営され、代々徳川将軍家の庇護を受けて隆盛したが、安永2年(1773)の松井田の大火により、本堂をはじめ主要な建物が焼失した。文政2年(1819)2月に32世通音住職により本堂が再建された。後に嘉永2年(1849)4月に35世皆知住職により不動堂が再建された。仁王門の建立時期は不明であるが江戸初期と推定されている(『不動寺仁王門保存修理工事報告書』(公財)文化財建造物保存技術協会)。

表74-2 仁王門

建造年代／根拠	16世紀後期から17世紀前期／建築様式	構造・形式	3間1戸二重門八脚門(5.98m)、側面2間(3.42m)切妻造、平入、柿葺
工 匠	不明	基 础	基壇、柱礎石、自然石布石
軸 部	丸柱、地覆、腰貫、内法貫、頭貫	組 物	平三斗、大斗、方斗、卷斗
中 備	幕股、間斗東	軒	二軒本繁垂木
妻 飾	猪の目懸魚、桁隨、虹梁幕股	柱 間 裝 置	小壁板
縁・高欄・脇障子	なし	床	仁王像台座：板張、その他土間
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	柱(朱)、欄間(彩色)、幕股(彩色)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	
彫 刻	虹梁、拳鼻、懸魚、幕股、欄間(大根と燕)		



写74-2 全景



写74-3 背面・側面



写74-4 虹梁



写74-5 垂木



写74-6 懸魚



写74-7 拳鼻

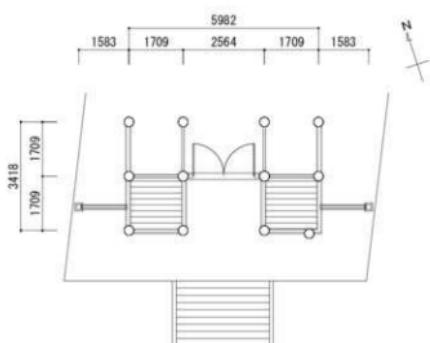


图74-2 平面図(仁王門)

仁王門(図74-2、表74-2、写74-2～74-7)

棟札・墨書は確認不能であるが、指定説明文で江戸初期と推定している。その根拠は幕股や欄間彫刻といった建築装飾や軸部にある拳鼻、実肘木、虹梁、破風板など絵様縦型から推定（建立は元和から寛永(1624～1644)の作とみられ、欄間彫刻は安土桃山風の豪壮なる工風「不動寺縁起」より）。

本堂(図74-3、表74-3、写74-8～74-10)

文政2年(1819)2月に32世通音住職により本堂が再建されたこの本堂は、正面5間、側面5間、入母屋銅板葺屋根である。向拝は水引虹梁の上に雲水と龍の彫刻を据え、虹梁木鼻は象頭とし、海老虹梁木鼻は獅子鼻である。南面以外は縁を三面廻してい

表74-3 本堂

建造年代／根拠	文政2年(1819)／記録	構造・形式	正面5間(16.98m)、側面5間(14.85m)、入母屋造、平入、向拝1間、銅板葺
工 匠	棟梁：矢崎善司昭方 大隅流	基 础	基壇、礎石、自然石
軸 部	[身舎]角柱 [向拝]角柱、長押：地長押、内法長押、腰長押、貫、内法飛貫	組 物	外部：大斗肘木、来迎柱上：出組
中 備	幕股	軒	[身舎]一軒疊垂木 [向拝]二軒木疊垂木
妻 飾	燕懸魚、幕股、二重虹梁、大瓶束	柱間装置	障子戸、土壁
縁・高欄・脇障子	なし	床	内陣：畳、外陣：畳、板
天 井	内陣：格天井 他は棹縁天井	須弥壇、扇子、宮殿	須弥壇、扇子
塗 裝	素木	飾金物等	なし
繪 画	なし	材質	桧、丸柱：櫛、欄間：櫛
彫 刻	内陣：欄間 外陣廊下境虹梁(唐草絵様)、外部：向拝水引虹梁、海老虹梁(唐草絵様)、向拝水引虹梁上欄間(雲水と龍)、木鼻(獅子・狛)		(雲水と龍)



写74-8 正面



写74-9 虹梁



写74-10 内陣水引虹梁

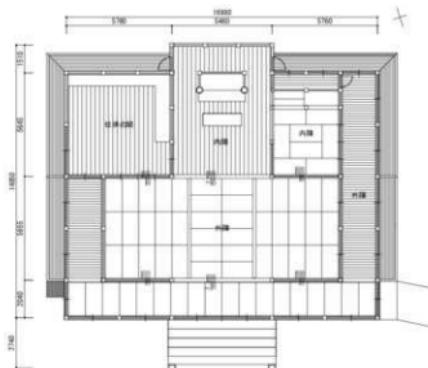


図74-3 平面図(本堂)

る。内部は要所の欄間に豪華な透彫彫刻がみえる。棟梁は諏訪大隅流の矢崎善司昭方とされ、長野県諏訪市の(株)石田組の工事歴に記されている。平面の特徴として廊下、外陣、内陣へと床が一段ずつ上がっている。外陣の東西境柱間に鴨居や下り壁等の区切りがなく、床は東西境柱より、3尺(畳1枚分)屋内側に敷居があり、畳よりわずかに高く設置

されている。内陣須弥壇は来迎柱よりまえに出す事なく納まっている珍しい形である。

不動堂(図74-4、表74-4、写74-11~74-13)

嘉永2年(1849)4月に35世皆知住職により不動堂が再建された。正面3間、側面3間、入母屋瓦葺屋根で向拝付きである。妻側に狐格子があり、破風に

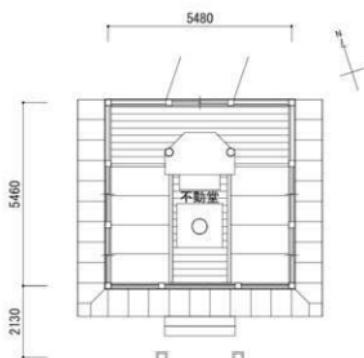


図74-4 平面図(不動堂)

表74-4 不動堂

建造年代／根拠	嘉永2年(1849)／記録	構造・形式	正面3間(5.48m)、側面3間(5.46m)、入母屋造、平入、向拝1間、瓦葺
工 匠	不明	基 础	基礎 基壇、礎石自然石 [向拝]切り石
軸 部	[身舎]角柱、長押、内法長押、頭貫、貫木鼻	組 物	木鼻付き出組
中 備	幕股	軒	二軒半繁垂木
妻 飾	燕懸魚、木連格子	柱 間 装 置	桟戸板
縁・高欄・船障子	三方切目縁・擬宝珠登高欄	床	疊敷き
天 井	内陣・外陣：格天井、外陣一部：竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	扇子、禮摩壇
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	桧、檜
彫 刻	木鼻(向拝：獅子・狛)、手挾、虹梁、軒支輪部分、向拝水引虹梁上(布袋と唐子)		



写74-11 正面



写74-12 虹梁



写74-13 内部

は猪の目懸魚を据えてある。軒下は彫刻付きの支輪板を廻し、向拝水引虹梁上には布袋と唐子の彫刻を載せ、虹梁木鼻は側面は狛で正面は獅子である。

魚で朽隠に懸魚で飾っている。本堂は文政2年(1819)に完成した大隅流の大工が係わった建物として貴重である。そして幕末の建築様式を備えている。

(三好建正)

まとめ

県指定重要文化財の仁王門は、幕股や欄間彫刻といった建築装飾や軸部にある拳鼻、実肘木、虹梁、破風板など絵様縁型から江戸初期と推定している。正面3間、側面2間、3間1戸八脚門で、切妻こけら葺屋根。平入で両側面に袖塀が接続している。二軒繁垂木で軒の出が出ている。妻側破風に猪の目懸

【参考文献】

『不動寺仁王門保存修理工事報告書』公益財団法人文化財建造物保存技術協会 令和元年
『工事経歴書』株式会社石田組 昭和59年版